
プロジェクト・メガル3・第三部

DirtyTom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロジェクト・メガル3・第三部

【Nコード】

N9703R

【作者名】

DirtyTom

【あらすじ】

世界を終焉へ導かんと押し寄せる新たなプログラム。一切の攻撃を受けつけない魔獣ヴォヴァルを迎え撃つべく、新たなガーディアンが降り立った。そして人類を滅亡へと誘う絶望のプログラムとは……

第十七話 『花・前編』 OP

雪を練り込む強風が真横から木々に叩きつけられる極寒の暗い森。人跡の気配も見られない深みの奥にある小さな山小屋から、かすかな光がこぼれ出ていた。

小屋の天井につり下げられた裸電球が、室内に薄暗い領域を作り上げる。その枠からあぶれたエリアは闇のようだった。

暖炉の薪が炎に焼かれパチパチと音を立てていた。

小屋の中央で軍用パンツと薄地のシャツを一枚着用しただけの偉丈夫がゆるりと顔を上げる。逞しい体躯に似つかわしくないしよぼくれた姿勢で、恨めしげなまなざしを正面へと向けた。

手渡された封筒を破り、中から三枚の写真を取り出すと、表情の変わらないその顔にわずかに色が浮き上がった。

絶望の色が。

「この三人を殺せばいいのだな」

静かにそう呟く。

写真を手渡した男が声もなく頷いてみせた。

感情を押し出すことなく、偉丈夫が顔をそむける。

劣化した電球がふいに照度を落とす、ゆらゆらと闇を揺らした。強風に振られた小屋が叫び声をあげ震えるのに呼応するように、

暖炉の炎が勢いを増した。

炎に照らされ、彼の顔に影が浮き上がる。

憤りにまみれた悲しみの影が。

「信じてもいいのだな……」

「……。約束する」

「……」

「必ず守る」

「承知した」クライアントへ振り返ることもなく、血のように燃える炎だけをじっと見続けていた。「早速メガルへ赴こう」

その瞳に映るものが絶望であることを知る者はいない。

からからに干からびた壁の花が、自らの重みに耐え切れず床へ落ち散らばった。

ピンポーン！

「はい」

チャイムの音に夕季が玄関へと向かう。

ドアを開けると光輔の嬉しそうな顔が飛び込んできた。

手荷物の中に冬期休暇用の課題帳の束を見かける。

「おめでと〜ございま〜す！」

「……」

無言でドアを閉める夕季。

「ちよっ！ 待って、正月早々！ あの、これ、お餅。開けて！

ねえ開けて！……」

第十七話 『花・前編』 1

「光ちゃん、お餅食べる？」

キッチンから忍が呼びかける。

するとこたつの前であぐらをかいていた光輔が嬉しそうに顔を上げた。

「食べる、食べる」

その対面で正月番組を観ていた夕季が露骨に顔を歪ませる。

「いくつ焼く？」

「十個」

「そんなに食べられるの？」

「いける、いける。な？」

「……」

W眉毛で光輔を睨みつける夕季。

顔を出し、忍が夕季に確認を求めた。

「夕季も十個でいいの？」

「そんなに食べられない」

「大丈夫だって」にやははは、と光輔が笑う。「綾さんだったら五十個は楽勝だよ」

「綾さんと一緒にするな！」

大きなビニール袋から餅を取り出す雅へ振り返り、忍が不思議そうな顔を向けた。

「あの子達、いつからあんなに仲良くなったの？」

「不思議だよねえ」にんまり笑う。「ま、目的は他にもあるみたいだけどね。あたしも十個食べよ」

「……」

「光輔、それもうやめれば」

夕季のたしなめるような声に二人が振り返る。

光輔はこたつの上で、持ち込んだロボットのプラスチック模型を作っていた。

「課題やりに来たんじゃないかったの」

「いや、だってそのコンビニ売ってたんだぜ。ついちよろっ
さ」

爪切りでパーツを切り取り、切りカスをパチパチと飛ばした。

「パチパチ飛ばすな！」

「後で掃除するって」パチリ。

「また！」

やれやれ、と言わんばかりに雅と忍が顔を見合わせる。

「全然その気もないみたいだけどねえ」

「いいじゃない。お正月くらい」

「まあねえ」

「いいな、こたつ。俺も買おっかな」

「買え！二度とうちに来るな！」

「ええ〜！」

マンネリ気味のお笑い番組が終わり、正午前のニュースが始まる。これといった事件もなく、有名神社の参拝者の集計と各地の積雪の様子が映し出されていた。

「そう言えば雅、なんで昨日お泊りしてたの」

「ん？」雅が顔をのぞかせた。「夕ご飯食べてからみんなで一緒にテレビ観てたら、なんだか帰るのがメンドくさくなっちゃって。一人でテレビ観てもなんか淋しいね。お正月なのに」

「さびちーぼだな、おまえ」

「まあねえ。夕季と警視庁トゥエンティフォー観たんだよ。ね」

「……うん」

「元日からそんなのやってたの……」

「しいちゃん、また録画間違えちゃったんだよ。ほんととはかくし芸が録りたかったのに、裏番組のそれ録っちゃったの。マチャーク観

るの朝から楽しみにしてたのに、ほんとおっちょこちよいだよね。」

「ねって言われても……」忍が悲しそうな顔になった。「……確かにヒデちゃんは観たかったけどね」

「すごかったよ。警察だ、手をあげろ！ 二十四時間以内に自首しろ！ すいません、ちょっとだけ時間を下さい。四十秒で支度します！ 二十四時間つつたじゃねえすか……。そんなことが俺が知るかあ！ ちくしょう、これでもくらえ！ ドカーン！ うわあ、そんなものをどこに！ 素晴らしい！ げははは、これで貴様らも終わりだ！ バババババ！ ちゅどくん！ どっかくん！ もう大迫力」

「……そんなシーン、一つもなかったけど」

「くそっ、観たかったな！」

「だから、そんなのなかったってば……」あきれ顔の夕季。

「ぎゃあ〜！ 見ろ、人がゴミのようだ！ いい娘だねえ〜」

「それ、後でやってたアニメと混ざってる」

「おばさま」嫌がる夕季の手を握り、光輔へ突きつける。「ハウス！」

「……ハウス？」

「……みやちゃん」

「あれ、違ったかな？ あ、しいちゃん、録画してたよね。あたしもっかい観たい。ねえ、しいちゃん、後で観ていい？」

「いいけど」

上機嫌の雅を尻目に、光輔がつまらなさそうにため息をつく。

「だったら俺も呼んでくれればよかったのに。茂樹達、親戚の相手とかでかまってくんないし、他の部屋の奴ら、みんな実家とかに帰っちゃったしさ。今、下宿の中、俺一人だけなんだよ。昼はまだよかったんだけど、一人でカップ麺食べながら仮装大会とか観てたら、なんか淋しくなってきた。なんか泣きそうになっちゃって」

「人のこと言えないよねえ」

「うん。あんまり淋しかったんで、仕方なく夕季にでも電話しよう

かと思ったんだけどさ、メンドくさくなっちゃって、まあいいやつて。そんなことならしとけばよかったよ。てかさ、気をきかせて夕季からかけてくれればよかったのに。冷たいよなあ」

「……」

「あたしは夕季のダンスの中にお泊りグッズのスペース設けてもらったから、いつでもフリーパスだけどね。夕季ってさ、こんな顔してパン……」

「みやちゃんてば！」

「ん？ 手羽？」

光輔がポンと手を叩いた。

「あ、じゃあ俺も服とか持ってこよっかな」

「持ってくるな！」

「でもさ、お風呂とか入った後にまた同じパンツ履くの嫌じゃない？」

「泊まる気マンマンだね、光ちゃん」

「みやちゃん、着信拒否ってこれでいいの？」

「おっけー」

「誰のを拒否設定にしたの？」

「ヒントいち。その人の名前聞いたら光ちゃんがショック受けることうけあいです」

「わかった！」

「桔平さんじゃないからねえ」

「……あれ。じゃ誰だろ……」

「ヒントに。とりあえず夕季に聞いてみたら？ 電話で」

「なんで目の前にいるのにわざわざ電話しなくちゃいけないんだよ。変なの」

「ねえー」

「……」

楽しそうに笑う雅の目の前で光輔が大アクビをした。

「でもさ、他にやることないの？ 宿題とかさ」

「三年生はそういうのないからね」

「あ、そっか。いいよな、三年は。俺らなんてどっちゃりあるんだぜ。冬休みなんてあつという間なのに、こんなペースで全部終わるか心配になってくるよ。なあ、夕季」パチパチパチリ。

「だからやりなつてば!」

「や、夕季が先にやってくれないと写せないし……」

「もう帰れ!」

「まあまあ夕季」忍が助け船を出す。「光ちゃん、お餅たくさん持ってきてくれたんだから」

「ああ、調子にのってもらいすぎちゃったからさ。木場さんがダンボール一箱分、車で運んできてくれた。夕季達も新春餅つき大会来ればよかったのに」

「別名、酔っ払い大会だけどねえ」

「あ、しいちゃん。ブー観ていい?」

光輔の思いつきに忍が反応する。

「いいけど。今デッキの中に他のが入っているかも」

「おいす」レコーダーからディスクを抜き取り、座布団の上へ置いた。

キッチンで餅に海苔を巻きながら、雅が思い出したように告げる。

「そう言えば光ちゃん。年賀状のあたしの名前、雅じゃなくて、『雑』になってたよ」

「え、マジ?」不思議そうに首を傾げる。「……違うの?」

「おんなじ、おんなじ。ざっちゃんって呼んでねえ」

「ざっちゃんって、呼びにく……」

忍が参入してくる。

「そう言えばうちのも、古閑のガの字違ってたよ。『間』になってた。忍も『認』めるって字になってたし」

「余分なものつけちゃったんだねえ」

「え、マジ! ……て、同じ字?」

「だからね……」

「あたし、『季』の字が、『い』になってた」
真横から夕季がぶすりと突き刺す。

「い？」

「委員長の『委』」

見つめ合う二人の時が制止した。

「あれ？ あって、る？」

「あってない」

「……。まあまあ、今時ちゃんと年賀状出すだけでも立派じゃない」
「全然ちゃんとしてないじゃない……」

「あたし、喪中葉書出したのに」

雅のツツコミに苦笑いの光輔。

「あゝあ。りようちゃんいたら、コテンパだな」

途端にテンションが下がり出した雅の様子を見て、忍が複雑そうな表情になった。

それを察知し、焦ったように立ち上がる光輔。

「あ、そういう意味じゃなくってさ……」

バキッ、とプラスチックが割れるような音がした。

おそるおそる光輔が足もとを確認する。

デッキから取り出した忍のディスクが見るも無残に折れ曲がっていた。

「……」キッチンへ青ざめた顔を向ける光輔。「……ごめん、しいちゃん」

「？」ゆるやかに忍が振り返る。そして光輔が手に持つコレクションのなれのはてに気づいた。「……。ぎゃあああー！」

「……ぎゃあっ、って。ごめん。弁償する」

「……いいけどね。また買えば……」すっかり復活した雅の隣で、忍のテンションが地の底まで落ちていく。「初回限定版だけどね。でも通常版でも中身は同じだから。今なら安いし……」

「あ、ははは……」

ピンポーン！

両手いっぱいレジ袋をぶら下げ、桔平と木場が突入してきた。

「あけおめ〜！」

雅が笑顔で出迎える。

「あ、おめでとう〜、桔平さん、木場さん」

「あ、明けましておめ……」

「お、みっちゃん達も来てたのか」光輔を軽くスルーし、顔面蒼白の忍に目を向ける桔平。「ん、元気ねえな、しの坊」

「何でもないっす……」

「あそ」

レジ袋を手渡し、木場が真顔で忍と向かい合った。

「忍、悪いがまたDVD貸してくれ」

「いいですけど……」

その時、桔平の絶叫が部屋中に響き渡った。

「ああー！ おまえ、何やってんの！ ジャッキー、バキバキじゃん！ あ〜あ」

「……」

状況を確認し、うつむいたままの忍へ向き直る木場。

「これ今日借りていこうと思ったんだがな」

「すいません……」

割れたディスクを木場が手に取る。

途端に桔平ががなりたてた。

「こら、木場！ おまえはディスクの裏面、素手で触んなっつてんのに、何回言わせんだ！」

「おお、すまん」

「俺はそういう無頓着なのが嫌いなんだ」厳しい顔つきで忍へ振り返る。「しの坊ももっとちゃんと管理しとけ。大事に扱わねえから、そうやってすぐに割っちゃったりするんだろが」

「……あい」

「ねえ、雅、お餅まだ〜？」光輔がのん気な声をあげた。「オラ腹減っただ」

忍が震える拳を握りしめる。

夕季には忍にかける言葉が見つからなかった。

「お、餅か、俺も食うぞ。三十個くらい焼いてくれ。おまえもそんなもんでいいだろ」

桔平が木場に確認をとる。

「そんなに食えるか」

「綾っぺだったら百個くらいは楽勝だぞ」

「綾音と一緒にするな」

「餅、そんなにねえですし……」ぼそりと忍。

心配そうに見つめる夕季の目の前で、忍が「ちっ」と吐き捨てた。

「……」

「おう、そうだ、光輔。おまえ、年賀状めちゃくちゃだったぞ」いきなり缶ビールを取り出し、桔平が駄目出しをし始める。「俺の名前が『冬詰平』になってたぞ。なんだ、つめへいって。よく届いたな」

負けじと光輔が迎え撃つ。

「桔平さんだって、穂村が『稲林』になってましたよ」

「何！ マジか。イナバヤシ？ よく届いたな……」

炭酸飲料を手に取り、木場がじろりと桔平を睨めつけた。

「俺のは『休場』になってたぞ、いい加減にしろ！」

「なんだと！ てめえ！ わざとだ！ よく届いたな」

「嘘をつくな。なんだ『きゅうば』ってのは！間違える方が難しいだろ！」

「ああ！ てめえ、キューバ知らねえのか。カリブ海にある、野球が強い国だ」

「それと俺の名前とどういう関係がある！」

「木場、きば、キーバ、キীবバ！ キイウバ、キイウーウバ！」

ぐっと睨みつける。「チューバ、だ！」

「残念」皿いっぱい餅を抱えて雅がやってきた。「一番大事なところでかんじやったね」

「ことすもよろしくおぬがいます、って書いてあったぞ！ 全部ひらがなだ！ 貴様は小学生か！」

「こんな立派な小学生がいるか！」

「どこが立派だ！」

「どこがって、新年早々いきなりシモネタ言わせる気か！」

「何故すぐシモネタを言おうとする！」

「仕方ねえじゃねえか！」

光輔と夕季があきれたような顔を見合わせる。

「俺のもそうだったかも」

「うちのは、よろしくおねがいます、になってた」

「……わざとなんだけど」

「そう言えば、あたしの名前、雅じゃなくて、邪悪の『邪』になってたよ」

「あたしは、夕香になってた」

雅と夕季が残念そうな顔を見合わせた。

「誰だ、それ……。よく届いたな……」

「じゃっちゃんって呼んでねえ」

「じゃっちゃんって、呼びにくいだろ……」

「お姉ちゃんのは『怒』るって字になってたし」

「いいじゃねえか、よく怒るし」

「そんなに怒ってまっせん！」

「……まあ正月だからな」

「喪中葉書出したのに」

「まあまあ、今時年賀状出すだけでも殊勝じゃねえか。そこんこはもっと評価されてもいいだろ」

「まあねえ。桔平さんって、好きなこと以外はてんで駄目な人のテンプレだからねえ」

「あれ、なんかすごい辛口トーク！ 正月早々そこまで……」

「だって」

「いや、おかしい。みっちゃん、だっては、おかしい」

「みやちゃん」夕季が真顔で雅を睨みつける。「気持ちいい。もつ
と言って」

「おまえ、そんな、そつと愛の言葉をささやくみたいに！」

「ささやいてない！」

「ないよねえ」

「お、パンドムじゃないか」

こたつの上の作りかけの模型を木場が手に取った。

光輔が楽しそうに笑いかける。

「そのコンビニで売ってたんすよ」

「コンビニ限定カラーか。まだ売ってたか？」

「結構。木場さんも作るんすか」

「まあな。ジャン・クロード専用カラーのやつなら作った。おまえ
エアブラシとか持ってるのか」

「なんすか、それ……」

夕季が忍へと近づいていく。

忍はオーブンへ餅を投入しながら、ぶつぶつと独り言を呟いてい
た。

「みんな、帰ってくんねえかな……」

「……」夕季が切なそうに眉を寄せる。「お姉ちゃん。あたし、お
餅買ってくる」

弾かれたように忍が振り返った。

「あ！ ああ、ああ、お願い。あとお醤油も買ってきて」

「うん」

「あ、俺も行く」光輔が立ち上がった。「俺んちから持ってくるよ。
まだまだいっぱいあるから」

夕季が動きを止めて光輔を睨みつけた。

「……。なんで？……」

「……別に」

「あ、ついでにパンツも買ってこよ……」

「泊めないからね！」

「……自分ちで使うためなんだけど」

「……」

「……」

「おうおう、相変わらず仲いいな、おまえら」

「桔平さん、始まったよ」雅がこたつへもぐり込む。桔平らが持ち寄ったレジ袋を覗き、目を輝かせた。「あゝ、あたし愛のスコーノレ飲も」

「おうおう、飲め飲め。ポツテチンとかキノコの古里も食えって」
「やたっ」

「おい、木場、見ろ。あらゝ、だってよ！」涙を浮かべ、画面を指さす。「あらゝ、だってよ！ あらゝって、く、苦しい！」

「き、き、き、桔平、あんなところに落ち、落ちて……」木場も呼吸困難になり、涙を浮かべる。「ぶは！ は！ はっ！ く、苦しい、死ぬ……」

「みっちゃん、見ろ、見ろ、あらゝ、って……」

「あっははは、あらゝ、だって！」

「こ、光輔……」

「……」

光輔が怪訝そうに雅の顔を眺める。

「何がそんなにおかしいの？」

「ん？」満面の笑みで雅が振り返った。「わかんない」

「……」

「なんかしちやったりなんかしちやったりしてゝだってよ！」

「ぶっはははは！」

「あっはははは！」

「……」

缶チューハイを差し上げ、キッチン目がけて桔平が声を張り上げた。

「おい、しの坊、一緒に飲もうぜ！ しこたま買ってきたからよ」

「あ、はい！ ただいま参ります」ようやく忍の機嫌が直ったよう

だった。大皿に満載の焼き餅を抱え、ダッシュする。「ただちに！」

「ただちに、って、おまえ……」

「まだお昼前だけどねえ。あ、グーミン、ゲット！」

「また飲みすぎじゃねえぞ」

「大丈夫です。これでも自制心は強い方ですから」

「ホントか？ おまえ、こないだの忘年会で、酔っ払って黒崎にトウロウ拳かましてたの覚えてねえだろ」

「ええっ！」 さあっと血の気が引いていく。「……初耳なんスが……」

「わあ、見たい見たい。しいちゃん、やってみせて」

「やめとけて、みっちゃん、危ねえぞ。黒崎の奴、こいつの地獄突きが喉ぼとけにバシバシ入って、呼吸困難になってやがったからな。あいつはなんだか白目剥きながら喜んでやがったけどな。おかしな野郎だ。その後、鶴の拳、とか叫んで飛び上がって、畳の上で思いつきりひっくり返って大変だったんだぞ」

「あ、はは……。その節はどうも……」

「次の日、頭の後ろ痛かったろ？ なんでかわかんなかったんじゃねえのか？」

「ええ、てつきり寝違えたんだとばかり思っていました、意外なところから真実を知りました……」

「おまえ、ずっこけた時パンツ見えてたぞ。黒だった」

「黒なんて持ってません！」

「んじゃ何色だったってんだ」

「たぶん青です。……。ぎゃあああーっ！」

「ぎゃあああ、って……」

「セクハラです！ 訴えますよ！」

「おまえが自分からべらべらしゃべったんじゃねえか」

「でも、でも、卑怯じゃないですか！」

「卑怯もひったくりもねえな。だいたい、おまえなんかセクハラしたってしょーがねえだろが」

「ちつともしょーがありますよ！ てか、そんなふうに言われたらせつねーでしょーが！ 女として！」

「ふざけんな。女だったらシモネタの一つも言ってみやがれ」

「真面目な顔して何バカなこと言ってるんですか！ 涙が出そうですよ！」

「ああん？ 元はと言えば、おまえの酒癖が悪いのがいけねえんだ」「そんなの仕方ないじゃないですか！」

「お！ 開き直りやがったぞ」

「そんなこと言うのなら、もうお酒なんて飲みません！」

「言いやがったな、このやろう！ 後で嘘でしたとか又カすんじゃねえぞ！」

「言いません。女に二言はありません！」

「後で後悔するなよ！」

「後で後悔とは、おかしな言い草ですね。ちゃんちゃらおかしいです」

「何がおかしい！」

「上を見上げたとか頭痛が痛いとかと同じレベルの間違いです」

「どっちも正解じゃねえか」

「ははぁーん。小学生レベルの国語ですけど、桔平さんには難しすぎましたかね」

「いや、難しくねえ。むしろ知ってた！ 知っててあえて使った！」

「嘘ですね」

「嘘じゃねえ！」

「負けたくないから必死ですね。嘘つきは最低です」

「何！ 俺が最低だと！」

「ええ。史上最低です」

「史上最低だ！ 上等じゃねえか！」 桔平が膝をポンと叩く。「よし、気に入った。まあ、飲め飲め」

「長いフリだったねえ」

「あ、じゃあ」

「結局飲んじゃうんだよねえ」

「まあな、正月だからな。な、しの坊」

「ええ、正月ですから。あ、すみません」

「かんぱうい」

「かんぱうい」

「あたしもかんぱあうい」

玄関であきれ顔の夕季へ、木場が一万円札を手渡した。

「これで飲み物と菓子も買ってきてくれ。何か欲しい物があつたら
ついでにいいぞ。それから……」

夕季がじっと注目する。

「もし割れたのと同じDVDがあつたら買ってきてくれ」

「……」

「どうしても今日観たいんだ」

光輔が表情もなく二人を眺めた。

「……。しいちゃん、喜ぶかも」

「……。木場さん、お姉ちゃん、あんまり飲ませないで」

「わかってている」悲しい出来事を思い返すように目を伏せ、木場が
重々しく頷いた。「俺も鼻の穴に指を突っ込まれるのは二度とゴメ
ンだ」

「……」

「パンドムは？」

光輔と木場が見つめ合う。

「……。三つ頼む」

「三つ……」

軽やかな足取りでコンビニへと向かう光輔。

少し引き気味に夕季が続いた。

満面の笑みで光輔が振り返った。

「なんかさ、おまえんちっていいな」

「……」

「茂樹んちもそうだけど、人が集まるうちってうらやましい」

「うちに集まるわけじゃない。みんな、お姉ちゃんに会いに来てるだけだよ」

夕季が顎を引く。

すると光輔はおもしろそうに笑って続けた。

「そっかな。そればっかでもないと思うけど」

「……ちゃんと課題やりなよ」

「わかってるって……」

第十七話 『花・前編』 2

「まさかあんたがうちに来てくれるとはな」

司令室別室で握手を交わしながら、桔平が目の中の偉丈夫と向かい合う。

転属者が新たに配属される場合、この部屋へと招かれるのはよほどの重要人物だけだった。

「ようこそ日本へ、マスター・ドラグノフ」

桔平より目線一つ分高い偉丈夫が薄く笑みをたたえる。ガッチリとした体格ではあるが、欧米人としてはさほど大きくはない。木場の方が一回り大きいはずだった。

「君との決着をつけにきたただけだ」

「何言ってやがる」バツが悪そうに笑う。「手も足も出ねえで半べそ状態だった奴に言うセリフじゃねえだろ」

するとドラグノフがにやりと笑った。流ちょうな日本語でほころびを繕う。

「システムでは、だろう。君が独自のスタイルをもちい出してから、私は一度も極めることができなかった」

「よく言うぜ。こっちゃん逃げるので必死だったのに」

「そんなことはない。私から逃げられる人間は世界中を探しても数えるほどしかない」まなざしが光を放つ。「私を怖れずに向かってくる者もな」

桔平が自嘲気味に受け答えた。

「逃げ切れねえなら懷に飛び込む。鼠が生き残るための最後の手段だ」

「同時にそれが私の弱点でもある」

「あんたも逃げるのはヘタそうだからな」

「……」初めてドラグノフの表情に変化が表れる。かげりが浮き上がり、声のトーンを落とした。「窮鼠は私の方だ。そう思って常に相手を攻撃し続けてきた。立ち止まった時が死ぬ時だからだ。私は誰よりも弱く、そして臆病者だからな」

「でっけえ鼠だな。猫が気の毒になってくる」あきれたように鼻で笑った。「ま、本当にやっかいなのはそんなモンじゃねえだろうがな」

「ふむ？」

「鼠でもライオンや象を打ち負かすことは可能だろう。だが、大地を追われた獣は海でたやすく溺れ死ぬ」

一旦、会話が途切れる。

それから何事もなかったようにドラグノフが続けた。

「まあ、短い間だがよろしく頼む」

「ああ、いいけどよ。大丈夫なのか、奥さんの方は」

「アレクシアのことなら心配無用だ。前から日本に來たがっていたし、日本語も話せる。いや、君よりも堪能だ」

「よけいなこと言い直してんじゃねえ……」

「ずうっと仕事が忙しくて、ろくろく旅行へも連れていけなかったからな。観光も兼ねての家族サービスというところだ」

「でもな、妊婦さんなんだろう。長旅させたり、知らない国に連れてきたりよ。いろいろあんじゃねえか？」

「二人きりで国へ残してくる方が心配だ」

「ま、それもそうか。いろいろ物騒だしな」

「知っているのだろう、キツペイ」

「んあ？」バツが悪そうに顔をそむける。「まあな。一応な。これでも副局長だからな」

「そうか……」ドラグノフが神妙な顔になった。「君が副局長になるなどとは夢にも思わなかった」

「……。まあ、そこそこは俺も同感だが……」

「世も末だ」

「ほっとけ！」

「君を推薦するなんて、どこの愚か者の発想だ？」

「その愚か者だ」

桔平が、くい、と顎をしゃくる。

導かれたドラグノフの視線の先にあさみの微笑があった。

「……。素晴らしい英断だ。目も醒めるような大拔擢というところだな」

「てめえ……」

タイミングを見計らうようにあさみが参入してきた。

「お話はすんだのかしら」

二人があさみへと振り返る。

するとあさみは妖しげな笑みをたたえながらドラグノフの顔を見つめた。

「あなたを歓迎いたします、マスター・ドラグノフ。メガルのためにこれからもその力を存分に発揮してください」

「シンドウ……」ドラグノフが深々と頭を下げた。「先だつての件では大変な迷惑をかけてしまった。ロシア支部にもカラシニコフへも、私から釘を刺しておいた。もうあのような間違いは起こさないと約束しよう」

「あら、何のことかしら？　ここでは何もなかったけれど」

冷やかなまなざしがロシア最強の戦士の心を押し戻す。

「単なる悪ふざけだったのですね。ロシア支部が本気でメガルを包括しようとしたのなら、彼ではなくあなたをよこしたはずだから。私はそう理解していたのだけれど」

「……」

二人の間合いに踏み込むように、桔平があさみの隣にいる細身の中年男性に目をやる。

「そっちの人は？」

「彼はミスター・マカロフ。ロシア支部の有能な技術者よ」

穏やかな笑みをまとい、マカロフが一礼した。筋骨隆々のドラグ

ノフとは比べるべくもなく、一般的な日本人と比較してもさほど違和感を感じさせず、いかにも頭脳労働を得意としていそうなタイプだった。

「ロシアで開発中の試作品を、技術提携の名目で何体かこちらで受け入れることになったの。テスト終了後、世界中の関係機関を招いてお披露目的なプレゼンテーションを実施する予定よ。彼にはその技術サポートをメインで務めていただくことになるのかしら」

「んな話、聞いてねえぞ」

「言っただけよ」妖しげに笑う。「誰かさんはマスターの来日を伝えた時点で浮かれまくって、上の空だったような気もするけれど」

「……だったような気もするけれど」

再度、あさみがドラグノフへと振り返る。

「マスター・ドラグノフにはそのテストパイロットをしていただく目的でこちらへ来ていただいたの。我々は最強の兵士や格技の教官としてより、むしろ優秀なパイロットとしての技量を買っていますから」

「心得ている、ミス・シンドウ」

「しっかりしてお」大あくびをぶちかまししながら、桔平がマカロフをちらちらと見やる。「百点取りそうな奴ってのは、どの国でもみんな同じようなツラしてやがんな。青白いつつうか、菜っ葉ばっか食ってるみたいだよ」

「そのとおりだ」ドラグノフが桔平に笑いかけた。「ちなみに彼は、私やアレクシアよりも日本語がペラペラだ」

「何！」

「よろしくお願いいたします」

温厚そうな笑みを崩すことなく、マカロフが丁寧にお辞儀をする。桔平の顔がずっと青ざめた。

「こ、こつらこそよろしく……」

メガル本部、メインホールで光輔が足を止める。

横にいた礼也と夕季が怪訝そうな顔を向けた。

「んだ、光輔、早く行かねえとオッサンにネチネチやられっぞ」

「ん、ああ」光輔が振り返る。「あそこ、外人の子」

「外人？」

光輔が指さす方向へ視線を向ける二人。

ホールの中央付近で、小さな鉢植えを抱えた金髪の少女が立ちつくしていた。

「迷子かな？」

夕季が思い出したように口を開く。

「そう言えば、今日ロシア支部から新しい人が来るってお姉ちゃんが言ってた」

「ロシアだ？」

「すごい人だって。メックの格技訓練の教官がどうかって」

「誰だそりゃ。また特殊部隊の奴か？ まさかドラグノフ大先生じやねえだろうな」

「……そんな名前だったような気もする」

「何！ マジか！」

「知ってるの？」

「知ってるも何も、ロシア支部最強の男だって」礼也のテンションが急上昇する。「陵太郎さんに格闘技教えたのも奴らしいって話だ。熊を素手で倒したあの、牛を素手で倒したあの、クジラを素手で倒したあの、その手の都市伝説はつきねえ」

「クジラはないよね……」への字口の夕季へ光輔が顔を向ける。「あ、都市伝説か……」

「おし、ドラグノフを倒して、俺がメガル最強の称号をいただくとするか」

ふん、と鼻息を荒げ息巻く礼也を、夕季は表情もなく眺めていた。二人をさておき、光輔が少女へ近寄って行く。少女の目線まで下りて顔を覗き込んだ。

七、八歳、或いはもっと下か、透き通るような白い肌に整った顔

立ちが際立つ。鮮やかなピンク色のワンピースと相まって花のように映った。

「こんにちは」

光輔が笑いかける。

すると少女はまばたきもせずに一瞥して、ぷいと顔をそむけた。

「……」

「わかってねえな、てめえは」

おもしろそうに礼也が乱入してくる。

「ほれ」紙袋の中からメロンパンを差し出した。得意げな様子で光輔へと振り返る。「ガキなんてのはよ、どこの国でもみんなメロンパンが大好きなもんだ。覚えとけって」

「メロンパンってそんなに世界的なの……」

「つまりめえだ！」えへん、と胸を張る。「グローバル・スタンバードだ」

「へえええ」感心しながら夕季へ目配せした。「どういう意味？」

「……。たぶんグローバル・スタンダードと同じ意味だと思う……」

「それだって！ まったく、わかれよ、てめえ！」

「へえええ……」

メロンパンをちらりと見てから、少女は再び顔をそむけた。眉に力を込め、鉢植えを強く抱きしめる。

夕季と礼也の目が合った。

「んだよ」

「何も言っていない」

「……ちっこいてめえみてえだな」

「ぷち夕季ってとこかな」

光輔が引きつるように笑う。

「いや、色が白えから、白夕季だな。んでこっちが腹黒夕季」

「メロンバカ」あきれたように夕季が吐き捨てた。

「んだあ、てめえちつとも工夫とかする気ねえだろ！ 俺をバカにしてやがんのか、メロンパンをバカにしてやがんのかどっちだって

の！」

「どっちも」

「てめえ！」

「グローベル・スタンバードってどういう意味？」

「きいいいい！」

「やめろって、こんなところでさ……」

「ミーシャ」

呼びかけに少女が振り返る。

光輔らが顔を向けると、身重のロシア人風の女性が少女を手招いていた。少女と同じく金色の髪に白い肌、顔には優しそうな笑みをたたえる。彼女は光輔達に気づき、軽く頭を下げながら笑いかけた。

「えれえ美人だな……」

「だね……」

「……」

「こっちのちんくしゃ女とはえれえ違いだな」

「……。バカメロン」

「ああ！ 何だった！」

「まあまあ、二人とも……」

夕季が光輔の耳たぶをつねり上げた。

「だだだ！ なんて俺！」

「ムカついたから」

「おかしい！ それおかしい！」

ミーシャが振り返り、夕季を見上げる。目が合うと照れたように顔をそむけ、母親の待つ場所へと駆け寄って行った。

夕季もその様子をずっと目で追いかけていた。

光輔の耳をつねったままで。

「ででで！」

「あ……」

第十七話 『花・前編』 2（後書き）

少しでも募金をしてきました。残念ながら今の自分にはこれくらいしかできません……

第十七話 『花・前編』 3

メガル西館武道場に夕季とドラグノフの姿があった。他の隊員達はすでに格技演習を終え、次の訓練へと向かった後だった。

訓練服の夕季がドラグノフへ組みつこうとする。それをことなげにかわし、ドラグノフはいともたやすく夕季を組み伏せた。

夕季が下唇を噛みしめる。

「君は優等生すぎる。もう少しクレバーにならないければ進歩は望めない」夕季を床へ這わせたまま、我が子を見つめるように微笑んでみせた。「だが、この誰よりも素質がある」

その様子を眺め、桔平が舌を巻く。

「夕季を赤んぼ扱いかよ。さすがシステム・マスターってとこだな」隣で光輔が畏怖のまなこを向けた。

「なんすか、システムって」

「ロシアの特殊部隊が使う格闘術だ。スポーツみたいな格闘技じゃなくて、確実に相手を仕留めるための殺人技だな。極めれば目隠ししてても相手を倒せるようになるらしい」

「……」情けない表情になった。「あいつ視力ニーゼロだから、今現在、俺百パー負けますね」

「ああ。二百パー負けるな」

「……二百パーすか」

「二百パーだ」

「……。もうちょっと、なんとかかないすか」

「なんともなんねえな」腕組みをし、ふん、と鼻息を荒げる。「これであいつがより強くなれば、三百パーオーバー確定だ。帰省ラッシュの乗車率なみだな。情けねえ」

「そうすか……」

がつくりと肩を落とす光輔。

それを当然だと言わんばかりに桔平は続けた。

「陵太郎にでも教わったんだろうが、夕季もかなりの使い手だ。現役女子高生であんなだけ必殺拳マスターしてる奴は、日本中探したってまずいやしねえぞ。やってる奴が他にいるのかがそもその疑問だな。だいたいメックからして、各国の軍隊の中でもトップクラスの錬度だからな。それについていけてる時点で夕季も礼也もプロの軍人と大差ねえから、そこら辺のケンカ番長クラスじゃ歯が立たねえのも当然っちゃ当然だ。それがあのざまだ。俺が知っている限りじゃ、あのオッサンよか強いシステム使いにや出会ったことがねえが、あいつに言わせりゃ一ミリ下にやすぐ次にきてもおかしくない奴らがゴロゴロしてるらしい。おっかねえだろ、世界ってのは」「そうすね……」恨めしげに桔平を見上げる。「俺も頑張ればケンカ番長くらいにはなれますかね？」

「無理だな」即答し、えへんと胸を張ってみせた。

「無理、すか……」

「五百パー無理だ。土産も潰れるレベルだな。情けねえ」

「五百……。まあ、いいすけど」

「その少年もどうだ？ 見ているだけではつまらないだろう」

ドラグノフに誘われ、光輔が力ない指先で己の鼻っ面を指さす。

「どうだってよ」桔平がいじわるそうに笑いかけた。「礼也は仮病使ってとっととシッポ巻いて逃げちまったし、ここはいっちょ、あの白熊野郎におまえの強いところ見せてやったらどうだ。無敵の光輔大先生よ」

「はは……」引きつり笑いしか出てこなかった。「ゲームの中なら無敵なんすけどね……」

「んだあ、情けねえ野郎だな」

「ええ、直前にあれだけ駄目出しされれば、どんな伝説の勇者でも仮病使っちゃうと思います」

「ったく、どういつもこいつも」

「おい、キッペイ。久しぶりに組み合ってみないか」

「ほへっ！」

桔平の目が点になる。

するとドラグノフは、邪悪な笑みをまといながら追い討ちをかけた。
てきた。

「昨日行った礼堂庵のしることを賭けて一勝負どうだ？」

「しるこつてツラか……」

「彼らに模範演技を見せてやりたいとは思わないか」

「そいつあ、一興だな」挑発を捨て置けんとばかりに眼光を尖らせ、桔平がにやりと笑った。「だがあいにく今日はモチの食いすぎで腹が痛くて腹痛だよ。頭も頭痛で体調の調子が最も最悪な状態だしな。……たたたた、ほあた！」

「そうか」朗らかに笑う。「相変わらず致命的だな、キッペイ」

「いや、何言っただかよくわかんねえんだが」

「ジョークのセンスが……」

「とっとと故郷へ帰りやがれ！」

「言われなくともそうするつもりだ」瞳の奥にかすかに悲しみの色をたたえる。「このミッションが終わればな……」

外の手洗い場で夕季が汗にまみれた顔を洗い流す。手足も擦り傷だらけだった。

悔しそうに下唇を噛みしめる。

完敗だった。

己の力を過信するわけではなかったが、ここまで圧倒的な差を見せつけられるとは思ひもなかった。彼が味方であることの安堵より、もし敵として対峙した場合、たやすく自分を殺すことができるはずだという事実を否定できない恐怖心をはるかに上回った。

もしもその強大な力が愛する者へと向けられたなら。

それを考えるのに、夕季は己の弱さを痛感せずにはおれなかった。
「迷いがあるようだな」

ふいの問いかけに夕季が顔を向ける。

含んだような笑みでドラグノフが見下ろしていた。

「君の強くなりたいという気持ちはよく伝わってくる。だが、もし私を負かしたいと思っているのなら、迷いを捨てるべきだ。迷いのない人間は強い」

「……あなたには迷いがないと言うのですか」

「君よりはな。君は追いつめられていない」

「……」

「誰かに勝ちたいと願うのなら、何か一つだけ大切なものを思い浮かべろ。それ以外はすべて切り捨て、それを命にかえてでも守りたいと思うことだ」穏やかな笑みの奥に厳しい眼光をちらつかせる。

「君には自分の命よりも大切な人間はいるか？」

「……」夕季がドラグノフを真っ直ぐに見つめた。「……いる」

「ならば私に勝たなければその人間が殺されてしまうと強く信じろ。そうすれば君は、自分の腕を折り目を潰されても、私の喉元へ食らいつこうとするだろう」

「……。訓練なのに……」

「だったら何故そんな顔をしている」

顎を引いてかまえる夕季を好ましげに眺め、ドラグノフがやりきれない様子で口を開いた。

「何故悲しみしか生まぬテロ行為が、世界中で後を絶たないのかわかるか」

「……」

「彼らには他に手段がないからだ」

「でも決して許される行為じゃない」

その言葉がゆるぎない夕季の信念であることを見抜き、ドラグノフが少しでも表情を和らげる。

「そのとおりだ。ではこう考えたらどうだ。君の大切な家族達が飢えと貧困で今にも死のうとしている。決して贅沢を望むわけではない。たった一つのパンがあれば家族全員の命が助かるのに、君達に

はそれを買う金も、他に手に入れる手段もない。だのに、物乞いなどにまるで見向きもしない富裕層の手から、ほんのひとかけらのパンをかすめ取ることが、はたして神に背く行為だと言い切れるのか。数日後に君達の目の前で、カビが生え食べられなくなった大量のパンが、彼らの傲慢な力を誇示するように破棄されることを知りながら」

「……それでも許されないはず。詭弁に理解を示したり、非道な行為を都合のいい解釈で正当化してはいけないと思う」
にやりと笑うドラグノフ。

「もちろんこれは歪んだ解釈だ。彼らが本当に志を持つものかどうかさえ、私には疑わしい。だが人間は平等を望みながら不平等を許容する、この世でもっとも醜く愚かな生き物だ。人間が人間である以上、その矛盾は永遠になくならない。ならばどうする。私にできることは、己の信じた正義を貫くことだけだ」

「……」ぐっと顎を引く。「あなたにとっての正義って何ですか」
夕季のストレートな問いかけに、まるで戸惑う様子もなくドラグノフが眉に力を込めた。

「正しさを他人に押しつけることではなく、間違いを素直に認め、正すことだ。誰もが完璧な人間になれるわけではない。だが過ちを認め償うことで、少しずつだが近づくことはできる。それが私にとっての正義だ。あくまでも私にとってだがな」

「もし私達があなたにとっての間違った存在だとしたら、それを正すということですか」

「そうだ」夕季の顔を熱く見つめ、力強く頷いてみせた。「力づくでな」

「……。結局、力で相手を屈服させるんですね」

「ああ、それが一番手っ取り早い」

「……。それって、テロ行為に通じるものがあると思う」

「ものごとを一つの側面からしか見ようとしないからそうなる。もっと広い視野を持てば、思考の裏側から多様な考えが浮き上がって

くるはずだ。かたよった考えを捨て、この本質を見極める目を養え。そうすれば、同じ意見を言う二人の人間の、まるで異なった思想や真理を認められるようになる」

「何が言いたいのかわからない……」

「政治家の答弁やインチキ占い師の予言と同じだ。それらしいことを言えば、相手が勝手に辻つまが合う解釈をしてくれる。今の君の思考回路は、私とテロ行為を結びつけることに最適化されているだけだろう」

「それはちよつと違う気がする……」

「ふむ？」

夕季が複雑な表情で、その自信満面の顔を見返した。

「わかる気がする」

「何がだ」

「そっくりだから。理屈っぽいところが」

「……それはキツペイのことを言っているのか？」

「うん」残念そうに見上げる。「すぐに屁理屈を言うところとかも」

「……。心外だな……」

ふつと笑い、ドラグノフが視線を彼方へと投げかけた。

「キツペイは人間としての体術に秀でている。生まれ持ったものでもなく、他の誰かに習ったものでもなく、おそらくは彼自身の生き様がそれを作り上げてきたのだろう」

ドラグノフが夕季へ顔を向ける。

その熱いまなざしに夕季の心が退いた。

「互いを補足し合う間合いにおいては、私はいかなる相手にも遅れを取る気はしない。もちろん、彼に対してもだ。実戦ではなく、あくまで実戦形式という名の訓練においては、彼は永久に私を組み伏せることはかなわないだろう。彼も自分の腕には相当の自信を持っていたようだが、私の前では明らかにその自尊心が折れかけていた。挫折を知らないものが打ちのめされれば、その分立ち直るのも困難になる。そこで私は、自分だけ目隠しをするというハンデを与えて

みた。決してなめてかかったわけではない。彼のプライドを刺激するためだ。するとどうだ。彼は気負いや戸惑いといったマイナスの感情を一切露呈せず、ここぞとばかりに私を攻め立ててきた。そこで初めて、私は彼の本質を見誤っていたことに気がついたのだ。その凄まじさたるや、私とて手加減できるレベルではなかった。そのままでは最悪の場合、彼を殺してしまうことも考えられた。私はこう言うしかなかった。『やめにしよう。このままではどちらかが必ず傷つくことになるだろう。それは本意ではない』やむをえずだ」

「なめてかかったのに自分が負けるのが嫌だったから……」

「……それは」

じっと見つめ合う。ともに相手を哀れむような表情だった。

「負けず嫌いなところまでそっくり」

「心外だな……」

ドラグノフがずっと目線をそらした。

「君は幸せだな」

「？」

「本当の彼を知らずに、彼と普通に接していられる。彼は理屈でははかれない何かを持ち合わせている。多くの人間は彼を畏れながら、平然とつき合う振りを装っているはずだ。私もそうだ」

「……」

ドラグノフの表情が先とはかわってきていることに夕季は気づいていた。

「！」

ふと視線を感じ取り、夕季が振り返る。

建物の陰へ小さなシルエットが消えていくのが見えた。

「どうやら君は彼女に気に入られたようだな」

ドラグノフの声が聞こえ、夕季が顔を向ける。

「ミーシャだ」

「ミーシャ……」

「ああ、私の弟の娘だ。彼女は私のことを嫌っているようだがな」
「……」

「恨まれても仕方がない」ドラグノフが淋しそうに目線を伏せた。
「あの子から笑顔を奪ってしまったのは、私だ……」

第十七話 『花・前編』 4

とある休日。夕季や桔平らはドラグノフに招かれ、メガル敷地内の彼の仮住居で妻アレクシアの手料理を振る舞われることになっていた。

「おい、てこたあよ、こう言ってやがんのか……」話し終えたドラグノフを真顔で睨みつけながら、押し殺した口調で桔平が切り出す。「中途半端なことが何より嫌いな上官が、いかにもハンパな部下達に向かってこれからはビシビシやるから覚悟しとけつつたら、部下の一人がおそれ多くもって感じで申し出て、お言葉ですがこの隊で一番中途半端なのは隊長殿のナニであります、つって隊長の顔を潰したってことでいいのか？」

「そのとおりだ」腕組みをし、得意顔でドラグノフが頷く。「よくできたな、キツペイ」

「ほおおお！ 上げえな、ロシアン・ジョーク！」

「すごいだろう」

「上げえ！」

「あんたらのがすげえって」辟易する面々の中、桔平の横で礼也がとぐろを巻いた。「一から全部ネタ確認しやがったな。どっかで使う気、マンマンじゃねえか」

ふん、と桔平が鼻息を荒げる。

「よし、今度みっちゃんか夕季に言ってやろう」

「あたしも夕季もここにいてねえ」

「……」

「んじゃ仕方ねえ、光輔」

「俺もここにいてす……」

「しの坊なんかに使ったらせつかくのジョークがもったいねえから

な。こんなこと聞いたらあの野郎また、セツネーす、とか言いそうだけどな、あっはっは！」

「目の前で全部聞こえてるんすが……」

「どんだけ気持ちよく酔っぱらってやがんだって……」礼也があきれ顔をアレクシアへ向ける。「ロシア人てのは、このオッサンみたいに国中全部下品なのかよ」

「礼也！」

礼也をたしなめる忍に笑顔に向け、料理を振舞いながらアレクシアが穏やかに口を開いた。

「ロシア人はみんな真面目よ。イヴァンだけ特別に下品なの」

「そんなことはないぞ、アレクシア」不本意そうにドラグノフが見上げる。「君だって下品なジョークが大好きだと前に言っていただろうが」

「そんなこと言った覚えはまったくありません……」

「ほら、あれをみんなに言ってやったらどうだ。あれだ」

「あれって、どれだ？」桔平が合いの手を入れる。「またシモネタじゃないだろうな」

「いや、シモネタじゃない。あれだ。ロシア軍人の屈強さを試すために将軍がムチで兵士を打って、痛くないのかとたずねてもその兵士がまるで動じないから、今度は将軍が兵士のナニを取り出してムチで打ってそれでも声一つあげないから、さすが祖国の誇る勇士だとばかりにその兵士に本当に痛くないのかとたずねたら、その兵士が、痛くないであります、将軍殿の打っておられるのは私の後ろの男のナニでありますから、っていうやつだ」

「知りません……」

「シモネタじゃねえか……」

アレクシアや礼也をはじめとする面々がそろってげんなりする。

ただ一人、桔平だけが興味津々で身を乗り出してきた。

「ほお、そりゃどういう内容なんだ？」

「いや、今オチまで全部聞いちゃったじゃねえか」

「つまり何か？ ロシア人てのはナニもタフだってことで……」

「ホントにわかってねえのかって！」

桔平とドラグノフが顔を見合わせた。

「おそろしいな、ロシア人は」

「おそろしいだろう」

「あんたらの方がおそろしいって……」

腕組みをし、ふうむと唸る桔平。

「ロシアン・ジョークってのはヌキどころ満載だな。ヘタなアイドルの写真集よりよっぽど実用的だ」

「どう実用すんだっての」

はっとなって雅が顔を向ける。

「まさか、ヘタなアイドルって、あたしのことじゃないでしょうね！」

「おまえはアイドルじゃねえだろうって」

「いや、みっちゃんのことなんだけどな」

「そうなんかよ！」

「まあ、悔しい！ きいー！」一心不乱にボルシチをかつくらう。

「おいしい！ おぼえてごらん！」

「ごらん？……」

「バカだろ、おまえら……」

「がっはっはっは！」豪快に笑い飛ばし、ドラグノフがグラスを差し上げた。「乾杯だ、キッペイ」

「おお、乾杯！」

一嵐が過ぎ去り、ボルシチの濃厚な味わいに全員が舌を巻く。

「んまい！ おかわりだ！」

桔平が子供のように真っ直ぐ皿を突き出す。

その横でガツガツとかつくらっていた礼也が続いた。

「俺もだって！」

「うまいだろう。うちのボルシチは贅沢にも牛肉をたっぷり入れてあるからな」

「前に向こうで食った時はスカスカだったぞ……」

「そのとおりだ。今回は見栄をはって大量に購入してきた。おかげで破産だ。金を貸してくれ、キツペイ。今度のクリスマスには返す」
「一年後か！」

「ロシアまで取りに来てくれ」

「てめえが持っていてこい！」

「来ても返す気はさらさらないが」

「ねえのかよ！」

「大丈夫だ。私の不慮の事故で死んだらその保険金でアレクシアが返しに来るかもしれない」

「いや、ぜってえ駄目だろ！」

「そうか、あっぱはっは！」

アンコールの雨あられに、アレクシアは嬉しそうに応じていた。

「たくさんおかわりしてね。私達だけでは食べきれないほど作ってしまったから」

「いや、すいませんなあ、奥さん」遠慮のかけらもなく桔平が皿を差し出す。「あ、肉は多めでもかまわねえからな。俺に気を遣うなよ、アレクシア」

「ええ……」

「んだと！」隣から礼也が睨みつけた。「俺もそれでもかまわねえって。気遣い無用だ」

「はいはい」

「貴様らがもつと気を遣え！」

苦々しげに吐き捨てる木場を、対面からドラグノフがおもしろそうに眺めた。

「はっはっは、気にするな、キバ」

「しかし……」

「気にすんじゃないねえ」桔平がジロリと木場を見やる。「てめえはもつと自分のブサイクなツラを気にしろ。悩め」

「なんだと！」

「悩めって。悩んでもブサイクはなおんねえけどよ。悩んでハゲと
けて」

「礼也……」

「がっはっは！」ドラグノフが豪快に笑い飛ばした。「日本人は奥
ゆかしい民族だと思っていたが、君達のようにずうずうしくてあつ
かましい人間もいるのだな、キツペイ」

「いや、おまえも客に気を遣えよ……」

あきれ顔の夕季の横からアレクシアが皿に手をかけようとした。

「あなたもどう？ ユウキ」

夕季がぐつと身がまえた。

「……少し」

「遠慮しないで」

「……」

「あ、俺も！」光輔が皿を真上に差し上げる。夕季にジロリと睨ま
れ、わずかに手を下げた。「……少しお願いします」

横目で見つめ合う二人をアレクシアは不思議そうに眺めていた。

「あの……」眉を正し、おずおずと忍が手を上げる。「私ももう一
杯頂いてもよろしいでしょうか」

「ええ、いいわよ」

「あ、じゃあ、大盛りで」

「お姉ちゃん……」

「……だって、おいしいから」

「遠慮しないで」笑顔でアレクシアの目がなくなる。「ユウキとコ
ースケもお肉たくさんでいい？」

「あ、う……」

「お願いします！」

「……。あたしも……」

「はいはい」

「あ、あたしも」もくもくと食べ続けていた雅が皿を真っ直ぐに
突き出し言い放った。「てんこ盛りで」

「テンこもり？」

アレクシアがおもしろそうに笑った。

「あ、私、手伝います」 忍が立ち上がる。「すみません、そんな大変な時なのに」

アレクシアが笑みをたたえ、大きく張り出したお腹を見下ろした。
「いいのよ。少しくらい動いていた方がいいみたいだし。それにあなた達は、イヴァンの大切なお友達ですから」

「ドラちゃんも友達少ねえからな」

「はっはっは！」 桔平に顔を向け、ドラグノフが豪快に笑ってみせる。「そのとおりだが、キツペイに言われると腹が立つな」

「何！」

「自分だって木場さんしか友達いないくせに」

「んだあ！」 副食の揚げパンをちぎって口へ運ぶ夕季を、桔平が睨みつけた。「おまえは人のこと言えねえだろ！」

夕季がぷい、と顔をそむける。

隣の部屋から様子をうかがっているミーシャに気づいた。

ミーシャは夕季と目が合うと、照れたようにうつむき、部屋の中へ隠れてしまった。

「……」

「キツペイ、パンプーシユカのおかわりもいかが？」

「いやいや、すいませんなあ、奥さん。遠慮なく」

「はっはっは、少しは遠慮しろよ、キツペイ。客人のくせに卑しいぞ」

「いや、おまえが遠慮しろよ……」

ドラグノフが夕季へ向き直った。

「ユウキ、君もどうだ？」

「……」 ドラグノフの呼びかけも耳に入らなかった。

「ユウキ？」

「……」

ポンポンに膨らんだ腹をさすりながら、満足げに光輔がドラグノフの居宅から出る。

「あゝ、うまかった」

「光ちゃん、食べすぎ。四杯も」

雅がおもしろそうに笑う。

「や、うまくてさ、つい。綾さんいたら、全部食べちゃってたな」
忍へと振り返る光輔。「しいちゃん、今度あれ作って」

「無理です。作り方がわかりません」

「無理だよねえ。三杯も食べちゃってたくせに」
忍が恨めしそうに雅を眺めた。

「おまえも三杯食べたじゃん」

「うん、おいしくてね、つい」

「大丈夫だ」

力強く頷いた木場へ三人が振り返る。

「レシピは聞いておいたぞ」

「……それはまた」

「すごいすね……」

「……ねえ」

「まず俺が今度トライしてみる」

「……それはまた」

「すごいすね……」

「……ねえ」

「作れんのかよ、ゴリア料理」

「ゴリア料理とはどういうことだ、礼也！」

桔平が伸びをする。

「案外たいしたことなかったな」大あくび。「所詮ロシア料理なんてモンはあんなところか」

「六回もおかわりしといてよく言いますね」光輔があきれ顔で呟く。
「あんなもんだって」礼也が桔平に頷いてみせる。「異常な期待かましてんじゃねえって。がっかりするだけだからよ」

「おまえも五杯食ったじゃん……」

「だな、あれじゃ食いモンレベルでいけば、駅前の定食屋の味噌カツと大差ねえ。あんなモンだろうな。うまかったけどよ」

「んとだって、あれじゃフレールの極上メロンパンのが上だって。うまかったけどよ」

「もりもり食べちゃってたよねえ」にゆっ、と雅が笑う。「うまいいうまい言ってたし」

「いや、実際うまかったって。でもよ、メロンパンと比べるモンでもねえだろ」

「自分で言ったくせに……」

「んだ、光輔、言いがかりつけんな、てめえ！」

「おまえ自分が何言ってるのかわかってる？」

「ああ！」

「光輔、勘違いすんな」桔平が厳しい顔で光輔を見据える。「ボルシチ自体がうまいんじゃないやねえ。アレクシアが作ったボルシチがうまいんだ」

「おお！ 俺もそれが言いたかったんだって！」

「結局おいしかったんだよねえ」

「うまかったな、ゴリア料理」

「うまかったって、ゴリア……」

「ゴリアじゃないだろう！」

最後尾に夕季の姿があった。

一月とはいえ午後の陽射しは温かく、気持ちがよかった。

何気なく顔を向け、裏庭のプランターの前でしゃがみこんでいるミーシャに目を止めた。

「綺麗なお花だね」

ビク、とミーシャが振り返る。

夕季が覗き込んでいた。

いくつもの大型プランターの中に赤、黄、白の花が彩りよく咲き並ぶ。

「なんて言うお花なの？」

日本語が話せないミーシャには、夕季が何を語りかけているのかわからない。

それでも眉間にぐっと力を込め、顎を引きながら夕季へ一輪の花を差し出した。

「くれるの？」

夕季を見据え、ミーシャが頷く。

「ありがとう」夕季が笑いかける。

するとミーシャはすつくと立ち上がり、逃げるように家の中へ入っていつてしまった。

鮮やかな赤い花を手にしたまま、夕季はその後ろ姿を目で追いかけた。

「珍しいですよ、あの子からお花を渡すなんて」

アレクシアの声に夕季が振り向く。

流れるようなブロンドに優しそうな笑みをたたえ、夕季の手にする、まるで花束のようなプリムラ・ジュリアンをアレクシアが眺めていた。

「あの子は本当に好きな人にしかお花をあげたりしませんから」少しだけ目を伏せた。「イヴァンですら、もらったことがないのに……」

第十七話 『花・前編』 4（後書き）

アニメ業界のスポンサーとしてパチンコマネーが台頭しているという記事を読んで、複雑な気分になりました。なるほど、最近やたらアニメパチンコが増えてきた理由も納得できるわけですが、集客のために内容にまで口出ししてくるとなるといかなものかなと。まあ、もともとおもちゃ産業も似たようなものですかね……

ぼちぼちという感じですが、また今後もおつきあいしていただけたら幸いです。

第十七話 『花・前編』 5

ミーシャは一人、プランターの前で花と向かい合っていた。鋏を手にし、時おり茎から切り取ってはプラスチックのバケツへ放る。十歳にも満たない子供にはおおよそ似つかわしくもない気難しい表情で、淡々と作業を繰り返していた。

心に響くは懐かしき父の声。

『ミーシャ……』

＊

幼少のミーシャが振り返る。

花のような微笑みを体ごと受け止めたのは、優しそうな満面の笑顔だった。細身だが力のあるまなざしを持ち、その奥にあたたかな光を宿す。

「パパ、おかえりなさい」

「いい子にしてたか」

「うん」

笑みを絶やすことなく、ミーシャの父、ニコライがミルクのような頬へキスをする。

ミーシャが笑いながらくすぐったそうに身をよじらせた。

その後ろでは楽しげに二人の姿を見守るアレクシアの姿があった。ミーシャとニコライは裏庭の花壇で色とりどりのプリムラ・ジュリアンに囲まれていた。

ニコライがかいがいしく手入れをするのを、ミーシャが横から見つめる。

眩いばかりの太陽の光を浴び、それぞれの花が宝石のように輝い

ていた。

「ニコライ、ミーシャ、お昼にしましょう」

アレクシアの呼びかけも耳に届かず、二人は時おり顔を見合わせ、いつまでも楽しそうに花を眺め続けていた。

「今度はいつまでいられるの」

ミーシャの何気ない一言にニコライの手が止まる。ふっと笑い、花を見つめながら、ニコライは申し訳なさに告げた。

「明日には戻らなければならぬんだ」
するとミーシャの表情が曇り出す。

「そうなの……」

「大事なお仕事なんだ」

「……次はいつ帰ってくるの」

「……。わからないな。一段落つくまでは何とも言えないから」

ミーシャが眉を寄せ、ニコライを見上げる。

「そんなに日本がいいの？ 私やママより」

「そんなはずないだろう。パパにとってミーシャやママより大事なもののなんて存在しない。でもね、パパにとってかけがえのない宝物であるミーシャやママを守るために必要なことを、日本の人達はパパに教えてくれるんだ。パパのことを助けてくれる。だからミーシャ達のためにも、日本の人達を大切にしてくちやいけない」

「……。日本人なんてロシアより全然駄目なくせに……」

「そんなことはないぞ。日本にだって立派な人間はたくさんいる。パパのことを認めてくれる人達や、親切にしてくれる人達とかね。その人達と一緒に仕事をするのは、とても大切なことなんだ。わかってくれるね」

「……」

ミーシャが塞ぎ込む。小さな唇を震わせ、今にも泣き出しそうだった。

「でも心配はいらない」につこり笑いかける。「ミーシャとママに任せておけば、花は大丈夫みたいだからな」

ミーシャの頬がぷくつと膨らむ。

「パパったらお花のことばかり！」

「パパはね、花を見れば全部わかるんだ。ミーシャやママが一生懸命大切に育ててくれていることや、苦しくてもつらくても元気に明るく頑張っているってこととか。ミーシャ達がどんな大変なことにも負けてやしないってことも。パパはそれがすごく嬉しいんだ。だから約束するよ。ミーシャ達がこの花を枯れさせない限り、パパもずっと元気で頑張る。ずっとミーシャ達のことを想っている。必ずまたすぐに帰って来る」

「本当？」

目尻に涙をにじませ、ミーシャが顔を向ける。

ニコライは笑いながらそれを見つめ返し、花壇の中から一番鮮やかな花をミーシャへ差し出した。

ミーシャも嬉しそうにそれを受け取った。

＊

人の気配に気づき顔を上げると、夕季が微笑みながらミーシャを見つめていた。

頬を赤らめミーシャが立ち上がる。

くるりと向けた背中に、夕季の声が追いかけてきた。

「ミーシャ」

おそろおそろミーシャが振り返る。

すると夕季が楽しそうに笑って紙袋を差し出した。

「一緒に食べよ」

メック・トルーパー事務所でバッグの中を漁っていた礼也が鬼の形相で振り返る。

「あら、俺のメロンパンがねえ！ ガッコの後の楽しみが！」 光輔をぐぐいと睨みつけた。「てめえ、ぶっ殺す！」

「ええ！　なんで！」

メガル敷地内にある海に面したドックでは大型船舶が行き交い、物資の搬入がひっきりなしに行われていた。

海鳥が飛び交い白波打ち寄せる突堤に並んで腰かけ、夕季とミーシャが遠く広がる海を眺める。

何も言うことなく、それぞれが手にするメロンパンにかじりついた。

ちらちらと何度も夕季の様子をミーシャがうかがう。夕季が目線を合わせると照れたように顔をそむけ、もふもふとパンを口へと押し込んだ。

「おいしい？」

微笑みながら夕季がミーシャの顔を覗き込む。

しかしミーシャは何も答えようとせず、ただ黙々と口を動かし続けていた。

「パパのこと、嫌いなのか？」

その何気ない問いかけにミーシャの眉がピクリとうごめく。

ミーシャには日本語でたずねる夕季の言葉が理解できない。だがパパという言葉に反応したようだった。

途端に堰を切るがごとくにロシア語でまくしたて始めた。

『イヴァンなんて大嫌い。パパでもないのにパパみたくにするし。

イヴァンのことをパパみたくにしているママも嫌い。日本人はもっと嫌い。私達からパパを取った。みんな、みんな嫌い。大っ嫌い』

おそろおそろ顔を上げると、心配そうに見つめる夕季と目が合った。バツが悪そうにミーシャが顔をそむける。

『でも、ユーキのことは、好き……』

ぼそりと呟き、探るように夕季の手に触れた。

それから二人は何も言わず、互いの手を結び合ったままいつまでも海を眺めていた。

翌日、メック・トルーパーの事務所前で夕季と礼也が睨み合っていた。

その様子をオロオロしながら見守る光輔の姿もあった。

「てめー、勝手に人の宝モン奪っていきやあがって！ 俺がどんだけ切ねえ思いつたのかわかってやがんのか！ おかげで無人島サバイバル、観損ねちまったじゃねえか！ しの坊が間違えて録ってたからいいようなものをよ！」

「おなかすいてたから。ごめん」

夕季が無然と言い放つ。

その態度が礼也の炎に油を注いだ。

「んだ、てめえ、本当にわりいと思ってんのか！」

「思っていない」

「んだあ！ その態度は！」

「意外とおいしそうだったから、つい」

「おお！ ……お、おお、う」複雑そうに眉を寄せる。「……意外と？」

「まあまあ、落ち着けて」

頃合いを見計らい、光輔が二人をなだめにかかった。

「今のは夕季が悪いよ」

「弁償する」

「いや、弁償するとかそういうことじゃなくてさ」

「……」

光輔に諭され夕季がそっぽを向く。

光輔が、はあ、とため息をついた。

「礼也に謝りたくない気持ちにはわかるけどさ」

「んだ、てめえ、光輔！」

「礼也に謝るのだけは嫌」

「てめえ……」

その時、どこからともなく現れた小さな影が、光輔の向こう脛を蹴りつけた。

「だっ！」

「ミーシャ……」

「いてて。なんで俺が……」

夕季の後ろへ隠れ、眉をVの字にしてミーシャが顎を引く。

「なんかそっくりだね……」

「にくったらしそうなことかな……」

「……うるさい」

怪訝そうに見下ろす光輔と礼也を睨みつけ、ミーシャがまくしたてた。

『ユーキをいじめるな！ あんた達なんか、大っ嫌い！』

ぽかんと間抜けヅラを向ける光輔ら。

「……なんつったんだ、今」

「……とりあえず怒りは伝わってきたけどね」

夕季がミーシャに目をやる。それから光輔と礼也を表情もなく眺めた。

「とてもおいしかった、って」

「……いや、嘘だよね」

「ああっ！ ふざけんてめえ！」礼也が顔に陰を浮き上がらせ睨みつける。光輔を。「そういうことなら仕方ねえだろうが。所詮ガキなんざ、メロンパンの魅力にかかりゃイチコロだからな」

「いや、何言ってるの……」

「グローバル・うふふううん……、だ！」

「無理しなくてもいいよ……」

「あれだ！」

「……」

ピクピクと顔の筋肉をうごめかせ、礼也がふんぞり返るようにミーシャを見下ろす。

「フレールのメロンパンは世界一だからな。誰もが虜になるのは仕方ねえ。決してさからえねえ。ボルヒチだかボルハチだか知らねえが、敵じゃねえってことだな」

「ボルシチなんだけどね」

「うますぎて思わずゴリア人もビックリだって」

「ゴリア人って誰……」

札也がごそごとバッグから紙袋を取り出す。

「とっときのアイテムだがメロンパンヤー初心者のおまえらには特別に拝ませてやる」にそにそと得意げに笑った。「極上メロンだ。」

一日限定二十個の激レア商品で、俺のような超常連でも三個までのシバリ入れられるビツプなシロモンだ。桐嶋ですら滅多にお目にかかれねえってボヤいてやがったほどだ。ガッコさぼる覚悟がねえと買うのはまず無理だろうな。みてくれのよさだけじゃねえ。中に果肉がゴツソリ入ってて、準備運動とかなしにいきなり口にしやがったら、うまさで心臓止まるかもしれねえ。一つ二百……」

ミーシャが紙袋を奪い取り、全力で走り去る。

「おい、ちよつと待て！ 全部持つてくんじゃねえ！ 俺の分まで！ シャレンなってねえぞ！ てめえ！」

ミーシャの背中を見送り、夕季が困ったように札也を眺めた。

「……。どうもありがとう、って」

「おお……」

「いや、何も言っていないし……」

建物の陰に隠れるミーシャの姿に気づき、夕季が足を止める。

表情もなく注目する夕季に、ミーシャがぐつと顎を引いた。

「やったね、ミーシャ」

夕季が笑いかける。

するとミーシャの顔つきが緊張から解きほぐされた。

「……。ユーキ、ロシア語話せるの？」

「少しだけ覚えた。ミーシャが簡単な言葉で話してくれればわかるかもしれない」

「……」

ミーシャが紙袋を差し出す。

それを夕季が押しとどめた。

「いいよ、くれるって。一つだけとっといってくれって」

「……」

「食べよ」

「うん……」

第十七話 『花・前編』 6

ドラグノフは誰もいなくなった竜王の格納庫へ足を踏み入れていた。

隣の倉庫ではロシアから持ち込まれた三体の試作品が数日後のプレゼンテーションのために陳列してある。竜王を模した、人型の直立歩行兵器。ただしコクピットの外側に機器を詰め込まなければならぬ都合上、サイズは竜王より二回り以上大きなものとなっていた。

すでに日も落ち、薄明かりの下、移動用のトレーラーにつながれたまま鎮座する三体のディテールが淡く浮き上がっていた。

音もなく歩み寄り、ドラグノフが三体の竜王を畏怖するように眺める。

隠蔽用のコンテナは整備のため両側とも跳ね上がっており、あらわとなった空竜王の下腕に静かに手を触れた。

その冷たい金属の感触がドラグノフに祖国の厳しい冬を思い起こさせた。

＊

吹きすさぶ夜の嵐の中、一人の若者が旅立とうとしていた。

ザックに荷物をまとめ、ブーツの紐を固く結ぶ。燃え上がる暖炉の炎に照らし出されたのは、石よりも硬い鋼の意志をともすまなざし。

若き日のドラグノフだった。

気配に振り返ると、憂うような顔を向ける弟ニコライの姿があった。

「兄さん、自分が何をしようとしているのかわかっているのか」

苦しげに言葉を押し出すニコライを表情もなく眺め、淡々とドラグノフが受け答える。

「無論だ」

「ならば何故」

「この国の中枢は腐り切っている。無抵抗と傍観はあきらめとなり、裏切りを生み、我々の心をも腐らせる。誰かが楔を打ち込まなければならぬのだ。荒れた大地をめぐりあげ、再び豊かな恵みが得られるように作り変えなければならない」

「だが兄さんのやり方は間違っている」ニコライが一步前へ出た。

「あなたがしようとしていることは神への冒瀆だ。何も省みない争いは新たな争いを生み、都合のいい理想論に感化された負の連鎖だけが繰り返される。互いを押しのけ、血にまみれた未来を奪い合うために。それでは何も変わらない。誰の心も満たされない」

静かなる男の握り込まれた拳を、ドラグノフが冷めた視線でとらえる。

「力のない理想につき従うのは弱い心だけだ。現実から目をそむけた者は肉体も精神も蝕まれ、やがて内なるともし火すら枯れさせられる。それでも心は満たされると言い切れるのか」

「兄さん……」

「この世に神などいない。我々は己の未来を自分自身の手で切り開いていかなければならない。誰の力もあてにせずに」

「神はいる」

訝しげな顔を向けるドラグノフを、ニコライが真っ直ぐに見つめる。

「信じようとする気持ちさえあれば、それは母なる祖国とともに誰もの胸の奥に確かに存在する」

「幻想だ。そんなものなど存在しない。あるのは都合のいい時だけそれにすがろうとする、ずるく卑しい心根だけだ」

「本当に満たされないのは兄さんの心の方なんじゃないのか」

「何だと」

「兄さんは自分を見つめることから逃げている。どうしてもっと自分自身と向き合おうとしない。本当のあなたは、僕達の知っているあなたは、そんなうつむいた心の持ち主ではない。誰よりも気高く、強く、まるで……」

「ざれごとばよせ！」

「……」

ドラグノフの一喝にニコライの心が後退する。

そのさまを苦しげに眺め、血を吐くような想いでドラグノフは言葉を積み重ねていった。まるで己の信念を雪で覆い隠すがごとくに。「現実と向き合う必要があるのはおまえの方だ。いい加減に目を覚ませ、ニコライ。枯れない花などこの世にはない」

「僕の心の中にはある」

「！」

「何があるうと決して枯れない花がある。そしてどんな時もそれで満たされている。あなたやアレクシアの笑顔がある限り、僕の心は枯れない」自身の胸に手を当て、氣遣うように微笑む。「あなたの心の中にも必ずある。気高く、尊ぶべき、信じるものが」

「……。そんなものなど、どこにもない……」

部屋の外から心配そうに二人のやりとりを見守るアレクシアの姿があった。

「あなたが言うように、この国の内情は心すら凍えるほどに寒いものなのかもしれない。だがこの冷たい大地にも花は咲く。確かに雪に埋もれる花もある。凍りつきしおれるものもある。しかしそれかわいそうだと摘み取ってしまえば、あとは枯れるのを待つだけだ。どんな花でも厚い雲の奥にある太陽の光を受けようとして、精一杯伸び上がろうとする。美しい花びらを見て微笑む者のために、懸命に咲こうとする。なのに誰かが見守っていてあげなければ、育んでやらなければ、花は花であることすらわからなくなる。あなたがいなくなれば、アレクシアはどうなる」

眩しそうに目を細めるドラグノフ。ニコライ達の顔を直視することができなかった。

やがて何も言わずに二人へ背を向けた。

「兄さん！」

「アレクシアを頼む」

「イヴァン……」

ドアノブに手をかけ、ドラグノフが振り返らずに告げる。

「おまえ達は花だ。祖国を彩る花だ。俺はそれを草や木とともに覆い隠すことしかできない」ドアを開け、果てのない暗闇を見上げた。「この心すら凍らせる吹雪のように……」

幾つかの年月が過ぎ、久々にドラグノフが故郷の地へと赴いた時、知り合いからニコライとアレクシアが結婚したことを知らされた。

帰郷も告げず、車の中からその様子をドラグノフがうかがう。

ニコライとアレクシアの楽しそうに笑い合う姿が目映った。それは花のような笑顔だった。かつて自分も交え、三人で同じ花を咲かせた頃のような。

もう一つ、新たに小さな花が咲いていた。

鮮やかで気高く美しい、二人が育んだ小さな命。

汚れなき花のような笑顔が自分の見失っていた太陽の光であることに気づき、ドラグノフは黙ってその場を後にした。

それがニコライの姿を見た最後の日となった。

ニコライの訃報を聞きつけ駆けつけた時、花は枯れきっていた。

「パパの嘘つき！」

大粒の涙をぼろぼろとこぼし、ミーシャがアレクシアを睨みつける。

ドラグノフとアレクシアは何も言えずに、ただその顔を悲しげに見つめるだけだった。

「パパなんて大嫌い！」

ミーシャが外へと飛び出して行く。

追いかけたドラグノフ達が見たのは、ニコライが大切にしていたプリムラ・ジュリアンを狂ったように踏みつけるミーシャの姿だった。

「大嫌い！　大嫌い！　みんな、みんな、大嫌い……」

「そんな馬鹿な！」

黒づくめの使者の前でドラグノフが血も吐かんばかりの叫び声を張りあげる。

「ニコライが、そんな！……、でたらめを言うな！」

胸倉を両手で締め上げるドラグノフにも、顔色一つ変えず使者の男は告げた。

「残念だが事実だ。政府の要職として日本へ出向いたおりに、現地の反対派から話を持ちかけられたらしい。政府を通じて入手したロシア支部の情報をリークし、なおかつ反対派のすることを黙認する見返りに、彼は私腹を肥やしたのだ」

「だが、ニコライが……、……あの雪のように潔白な男が……」

「君にとっては信じ難いことなのかもしれないが、我々が事実を受け止めることに戸惑いはない。この国の実情を知る人間ならば誰もそれをとがめはしないだろう。だが、祖国を欺き、メガルへの過剰な便宜をはかった以上、国賊であることは疑いようもない。連絡が遅れたことは申し訳なかったが、その時点でもし君を呼び戻していれば、君自身の命が危うかったということを知ってほしい」

「ニコライが……」幾多の言葉も魂へは響かず、力なき両手を男へかけたまま、ドラグノフががつくりとうなだれる。「国賊として処刑されたというのか……」

「まだ公にはなってはいないが、政府は彼の家族を国外追放とする考えだ」

「！」ドラグノフが血相を変え、顔を上げる。「アレクシアは！」

ニコライの家族はどうなる！　どこが受け入れてくれる！」

静かに男が首を振る。

「彼女らはすべてを失い、この国から追い出されることになるだろう。それを救えるとしたら、彼女の身内か協力者だけだ」

「貧しい田舎の生まれだ、協力者などいるものか！　彼女らには身内すらいない！」

「ならば、仕方がない」

「……」ドラグノフが震える拳を凝視する。キツと男を睨みつけた。
「俺が彼女達を引き取る。俺の家族として彼女達を受け入れたい。メガル、ロシア支部の人間として」

「無理だ。彼女達の立場は我々がかばえる範疇を逸脱している。ニコライの血縁者として君もすべてを奪われ、裸同然で国を追われるだろう。彼らとのつながりを断ち、我々の同志でいることが、英雄である君を国から守る唯一の方法なのだ」

「俺の頼みでもか！」

「論外だ。どうしても言うのなら、ロシア支部は君を切り捨てるだろう」

「く……」ドラグノフが頭を抱える。ギリと噛みしめた口の中から血が流れ出た。

「反対派の工作は巧妙かつ狡猾だ。正当な理由もなく彼らをかばうことは、君以外の誰のためと受け取られるはずもなく、すべての成り立ちが我々自身の責だと公言するようなものだ。政府を敵にまわし、反対派にもつけこまれる隙を与えることになる。そんな大きなリスクを冒すことはできない」

「……俺には、彼女達を救うことはできないのか……」
「一つだけ望みがある」

ぼそりと告げた男の言葉に、ドラグノフが弾かれたように立ち上がる。

「なんだ、それは！」

「もし君に、祖国のためにその身を捧げるという覚悟があるのなら、

我々は断固として戦い抜くつもりだ」

「……どういう意味だ」

「我々がニコライの潔白を証明する。すべて反対派によって仕組まれた策略だと暴いてみせる。彼は反対派に脅されやむをえず屈したものだ、必ず政府を納得させてみせる。それで彼の家族は罪を免れることだろう」

「……」

「これは罠だ。反対派と日本の反乱分子による、ロシアから君を引き離すためのな」

「……。俺が、……俺のせいでニコライは罠にはめられたと言うのか」

「そう考えることが賢明だろう。反対派や反乱分子の中でさえ、君の親派は存在する。祖国の英雄としての君の存在は、それほどまでに影響力があるのだ。目をそむけては先へは進めない」

揺るぎなきまなざしで、ドラグノフは真っ直ぐ暖炉の炎を見つめ続けていた。

「俺は、何をすればいい……」

男の口もとがにやりとする。

そしてその男、マカロフがドラグノフへ一歩近づいた。

＊

「ドラグノフ」

冷たく響き渡るような呼びかけにドラグノフが顔も向けずに答えた。

「何の用だ、マカロフ。不用意な接触は誤解を招く。彼らに怪しまれるぞ」

マカロフが冷めた笑みを口もとにたたえる。

「仕事だからな。君が滞りなく任務を遂行するためにも、私は君を監視し、サポートしなければならない」

「わかつている」

「ならばいいが、もしやこの国に情がうつたのではと勘ぐってしまつてな」

「……そんなはずはない。私も一刻も早く、祖国へ戻りたいのだ」天井の薄明かりへと手を伸ばし、冷たい光を握りしめた。「この国は寒すぎる……」

第十七話 『花・前編』 7

その日もいつものように、夕季とドラグノフの居残り格技演習が行われていた。

武道場の陰からじっとミーシャが二人の様子を見守る。

それを横目で確認し、ドラグノフは夕季を解放した。

「今日はここまでにしておこう」

「はい」

ぷふう、と夕季が息を吐き出す。

ドラグノフがにやりと笑った。

「ユウキ、なかなかよくなってきたぞ」

夕季が、ぐっ、と身がまえる。それから穏やかに笑った。

「どうもありがとうございます」

「ついでに言うと、ロシア語の方が上達が早い。私よりもペラペラになったようだ。どこかで習っているのか？」

「ん……」ちらと目配せした。「……いい先生がいるから」

ドラグノフも同じく目を向ける。

「なるほどな」

ミーシャが照れたように、さっ、と身を隠した。

柔らかな陽射しの下、プランターの前へ並んで腰を落とし、夕季とミーシャが色とりどりの花を見渡す。

その後方からアレクシアが優しげなまなざしで二人を見守っていた。

夕季が歩み寄り、アレクシアが抱える洗濯物へ手を伸ばした。

「ありがとう、ユウキ」

「中へ運べばいいの？」

「ええ」

夕季へ洗濯籠を手渡し、アレクシアが目尻を下げ、黙々と花の世話をするミーシャを遠目に眺めた。

「本当にありがとう、ユウキ」

日本語で語りかけるアレクシアへ、不思議そうに夕季が振り返る。するとアレクシアは嬉しそうに続けて言った。

「実の父親を失ってから、あの子は誰にも心を開こうとしない。私やドラグノフにも。でもユウキのおかげで今は何だか楽しそう。この国へ来てよかった」

「……。私は、そんな……」

顎を引いて身がまえる夕季へアレクシアが笑いかける。

「夫のニコライは花を愛でるのが好きな心の優しい人でした。私とニコライとイヴァンは子供の頃からの知り合いで、二人とも身寄りのない私へも兄のように接してくれた。感謝しています。ニコライもイヴァンも自分達の生まれた国が大好きで、荒れてしまった祖国を建て直そうとそれぞれの道を選びました。愛する人間がずっと笑顔でいられるようにと。なのにニコライは道を踏み外してしまった。悪い日本人にそそのかされ、悪いことをしてしまった。己の力のなさを知り、未来に絶望してしまったからです。でも私もミーシャも知っています。ニコライが決して欲望に負けて誤った選択をしたわけではないことを」

「……」

「ミーシャは日本人が父親を奪ったと思います。その日本人達と密接な関係を持つイヴァンのことも許していません。イヴァンが自分とニコライを引き離したのだと勘違いしています。イヴァンは何も悪くないのに。イヴァンがいなければ私達は国を追われ、野垂れ死ぬところでした。イヴァンは私達のために己の信念を曲げ、つらい選択をしなければならなかった。私達を見捨て、自分の信じた未来をつかむこともできたはずなのに。私達を救うために、イヴァンは……」

「どうして私にそんなことを」

「ごめんなさい、ユウキ。不愉快な話をしてしまっ

「そんな……」

「あなたには知っていてほしかったの。ミーシャとお友達になってくれたあなたには」淋しそうに目を伏せた。「ここには長くいられそうもないから」

「……」

「ミーシャはまだ父親の影を追いかけています。ニコライの愛したプリムラの花を育て続けるのもそのためです。まだ心のどこかで信じている。花を育てていれば、大好きな父親が帰ってくるのではないかと。優しかった父親の笑顔がそこにだけはあるような気がしているのです……」

花がらを摘み取る作業中、ミーシャはふいにプランターの中の一本を根元から鋏で切り取り、バケツへと放った。

「どうしてお花捨てちゃうの」

何気ない夕季の問いかけに、ミーシャの眉がぴくりと反応する。

「……綺麗じゃないから」

「でもそのお花だって一生懸命咲いているんだよ」

「綺麗じゃないお花なんていらない。嫌い」

「じゃあ、あたしがもうね」

夕季がバケツの中から黄色いプリムラ・ジュリアンを拾い上げる。するとミーシャが不機嫌そうに眉を寄せた。

「……。……ユーキにはもっと綺麗なのをあげる」

「あたしはこれでいい。この花もとっても綺麗だから。ミーシャが大切にしている花とは違うかもしれないけれど、あたしはこの花好き。素敵だと思う」

「……。勝手にして」

「勝手にする」

「……」

「……。ねえ、ミーシャ」

夕季の優しい声にミーシャがそろりと顔を向ける。

夕季は穏やかに笑いかけ、ミーシャの顔を見つめていた。

「ミーシャはとってもいい子なのに、どうして二人のことを認めてあげないの」

「……。二人って？」

「マスターとママのこと」

「……。嫌いだもの……」

「どうして。マスターもママも、みんなミーシャのことが大好きなんだよ」

「……嘘だ」

「嘘じゃないよ」

「嘘だ！」

目に涙を浮かべ、ミーシャが立ち上がる。眉間に皺を寄せ、噛みつくように夕季を睨みつけた。

「そんなの嘘だ！」

「ミーシャ……」

「嘘つき！ ユーキなんて大嫌い！」

「ミーシャ、何てことを言うの」

心配そうな顔つきでアレクシアが歩み寄る。

差しのべられた手をミーシャが振り払った。

「みんな、私のことなんか嫌いなくせに。邪魔なくせに。いなければいいと思ってるくせに！ ユーキだって、ママだって、ほんとには私のことなんて好きじゃないくせに！ ほんとにはイヴァンと二人でいたいと思ってるくせに……。ママとイヴァンと赤ちゃんがいればいいって思ってる。私なんていらぬ。必要ない。絶対、そうだ。私が邪魔だって思ってるくせに……」

「ミーシャ」

大粒の涙をぼろぼろこぼし、ミーシャが駆け出す。

その後を追おうとしたアレクシアが突然腹部を押さえてうずくま

った。

「アレクシア！」

夕季の声に立ち止まるミーシャ。振り返ると苦しそうにあえぐアレクシアを夕季が介抱しているところだった。

真剣なまなざしでミーシャを見つめ、夕季が叫ぶ。

「ミーシャ、マスターを呼んできて。メックの事務所にいるはずだから。いなかったら誰でもいいから連れてきて」

ミーシャが戸惑いの表情を見せる。

「早く！」

意を決し、ミーシャが走り出した。

どうすればいいのかわからず、闇雲にドラグノフを探そうとミーシャが駆け続ける。だがメガルの敷地は広大すぎて、幼いミーシャには位置関係すら把握できていなかった。

きよろきよろと見回し近くの間人へ助けを求めようとしたが、誰もミーシャの言葉を理解できずに笑いかけながら素通りしていくだけだった。

不安が波のように押し寄せる。

その時、聞き覚えのある声を耳にした。

「お、ちび夕季じゃねえか」

ミーシャが振り返る。

メロンパンを口にくわえた礼也がいた。隣には光輔の姿も見える。顔をゆがめ、ミーシャが礼也の手をつかみ、引っ張っていきこうとした。

「んだあ、またメロンパンが欲しいのか？　そうそう簡単にやられねえぞ。世の中そんな甘かねえ」

「いや、違うみたいだよ」

「んあ？」

ミーシャの表情に鬼気迫るものを感じ取り、二人が顔を見合わせる。

「……なんか、ママンがどうのって言ってるみたいな」

「ママん？ あの妊婦さんか？」

ピンとくる二人。

「おい、光輔、専門医呼んでこい」

「おまえは？」

「俺はこいつと様子見に行ってくる。なんかあったらケータイすつから、いつでも取れるようにしとけよ」

「わかった」

光輔が本館へ向かって全力で疾走し始める。

ミーシャを抱き上げ、礼也も走り出した。

「おお、結構重てえな、てめえは！」

涙でくしゃくしゃになった顔でミーシャが礼也にしがみついた。

数十分後、医務室のベッドには、落ち着いた様子で横になるアレクシアの姿があった。

ドラグノフがその手を両手で握りしめる。

二人の顔はともに安堵の笑みにつつまれていた。

いたわるようにアレクシアを見つめるドラグノフの姿を、ミーシャは複雑そうな面持ちで部屋の外から眺めていた。口もとを結び、淋しそうに眉を震わせる。

ドラグノフが光輔らに顔を向けた。

「ありがとう、コウスケ、レイヤ、ユウキ。おかげで助かった」じわりと涙をにじませる。「もう少して流産するところだったらしい。この子は弟の大切な忘れ形見だ。もしものことがあれば、私は彼に顔向けできない。助かって本当によかった。本当にありがとう……」

「あんでもねえってよ」メロンパンをくわえ、礼也が親指を後ろへ向ける。「あんたんとこのちびすけが必死こいて助け求めてきやがったからよ。行ってみりゃ、このバカがアホヅラ下げてアワアワしてやがって、えらいこっちゃだったっての。もっと早くケータイとか使ったときゃいいのによ、ほんと、勉強ばっかで何の役にも立たねえ」

「うるさい……」恥ずかしそうに夕季が顔をそむける。「……電磁波が赤ちゃんに悪いかもってちよっと思っただけ」

「あのちび、こいつのことすげえ嫌ってやがったくせに、よっぱど必死だったんだろうな。でなきゃ俺らはスルーしておしまいだ」

「なんで俺だけ嫌われた感じになってんの……」

「俺らに礼言うんなら、ぷち夕季誉めといてやれって……」
振り返る礼也。

が、そこにはすでにミーシャの姿はなかった。

ミーシャは夕暮れ時の薄暗い空の下、うずくまるようにプランターの花を眺めていた。傷のある花を見つけ鋏を近づけたが、切り取るうとしてからふと思いとどまった。

背後から夕季が忍び寄る。

それに気づいたように、振り返ることもなくミーシャは話し始めた。

「イヴァンは私のことを嫌ってる。ママが好きで、ママと一緒にいたいだけ。私なんかいなければいいと思ってる。ママもそう。だから私は、イヴァンもママも嫌い」

夕季は心配そうにミーシャを見つめていた。

鋏を放り出し、ミーシャが振り返る。それから泣きながら夕季に抱きついてきた。

「みんな大っ嫌い。大っ嫌い……」

「わかってるよ、ミーシャ」

優しく笑いかけ、夕季がミーシャをそっと抱きしめた。

「わかってる……」

第十七話 『花・前編』 7（後書き）

激安メガネを作りについてフレームを選んでいたところあまりいいものがなくて、持ってきてくれたトレーの中に一つだけちょうどいいものがあつたので、「あ、これいいですね」って言ったら、「それはお客様のものですね」と言われたことがあります。つい先日……

第十七話 『花・前編』 8

武道場におなじみの二人の姿があった。いつもどおりの練習風景。だがドラグノフは、常ならぬ気迫をその日の夕季から感じ取っていた。

それまでの夕季より明らかに技に切れがあり、無駄がない。それはマスター・ドラグノフが袂を引き締めなければならないほどだった。

組み手の応酬の末、ドラグノフが夕季の背後を取る。

「まだまだだな、ユウキ。……」

片腕を極め、その無防備な背中を静かに見つめながら息をのんだ。夕季の呟きがドラグノフの心を現実へと引き戻させるまで。

「ミーシャが何故花を育て続けるのかわかりますか」
にやりと笑うドラグノフ。

「私を揺さぶろうとしているのか。残念ながら、答えはすでに出ている」

「あなたに受け取ってほしいからです」

「！」

当然、ドラグノフの表情は夕季には見えていない。だがその変化を知るように夕季はたたみかけてきた。

「ミーシャはあなたのことを愛しています。それを表に出せないのは、あなたがミーシャに愛されることを拒絶しているせいです」

「……」

一瞬の気のゆるみをつき、夕季が体勢を入れ替える。すかさず背後を取ろうとしたが、ドラグノフが強引に抜け出し、二人は正面から向かい合う状態で静止した。

がっかりし、小さく口を尖らせる夕季。

「……もう少しだったのに」

「私の心を揺さぶるとはたいしたものだ」安心したように、ふっと笑った。「残念ながら、詰めが甘かったようだがな」

「そうですね。でも、今言ったことは事実です」

かつ、と見開かれるドラグノフの両眼。

それから夕季は涼しげなまなざしでドラグノフをつつみ込むように続けた。

「ミーシャが傷のある花を摘み取ってしまう理由は、一番素敵な花をあなたへ手渡したいからなんです。自分の手で、大好きなあなたへ」

「！」

「ミーシャはすべて知っています。父親のことも、あなたのことも。ただあなたを受け入れるきっかけがないだけなんです。彼女も苦しんでいます。今のあなたと同じように……。気づいていますよね。」

……ここで彼女が見ていたのは、私じゃない」

「……」

ゴクリと唾を飲み込むドラグノフ。

黙って見つめ合う二人の間に、緊張感にも似た空気が流れていた。

「夕季」

大沼の声に振り返る二人。

まるで呪縛から逃れ出たような顔つきでもあった。

「柊さんが探していたぞ。集合がかかっていたんじゃないのか」

「あ、うん……」

ドラグノフへ一礼し、夕季が道場を後にする。

ちらとドラグノフを一瞥し、大沼もそれに続いた。

「訓練とはいえ、すごい殺気ですね。さすがマスターだ」顔も向けずに大沼がぼそりと告げる。「またご享受願います」

「ああ……。……。君は」

大沼が振り返った。その表情には微塵も乱れがない。

「……いや、何でもない」

「失礼します」

去って行く大沼の姿を見届け、ドラグノフが顎の下の汗を手の甲で拭った。

報告書の束をポンと投げ出し、桔平が光輔らを見渡す。ふん、と鼻息を荒げた。

「ヴォヴァルだ」

ブリーフィング・ルームに光輔ら竜王のオビディエンサーと桔平、あさみ、腕組みをしながら壁際で直立する木場の姿があった。

「ヴォヴァル？」

不機嫌そうな礼也に、同じく不機嫌そうな桔平が答える。

「カウンターの予想じゃ一週間でどこか。まだ確定は出てないが、二、三日前になりゃピンポイントでくつきりしてくんだろ。てめえら、今日からどっか行く時は必ず連絡しろよ。三日前からはメガルにお泊りだから、そのつもりでいろ」

「ふざけんなって」光輔へと振り返った。「なあ、光輔」

「おまえはもともとメガルに住んでんじゃん……」

「これは命令だ。学校へはこっちから連絡しとく。体育も部活も見学だからな」

「俺、体育コースなんすけど……」

「眠てえこと言ってんなって」礼也が鼻をほじりながら大あくびをかます。「んなの、てきとーでいいだろ」

「黙れ、金髪！」

「おおっ！」勢い余り、親指が深く突き刺さる。「おおおっ！」

「なんだ、まっキンキンにしやがって。外人にでもなりたいのか！ ナニ人だ！」

「いや、あのかな……」

「いいか、約束破ったら市内のパン屋に圧力かけて、一年間メロンパン売ってもらえねえようにしてやるから覚えとけ」

「はあ！ ふざけんな、オッサン！」

「やかましい！　いつまでもごちゃごちゃ言ってやがると、てめえのお気に入りの店にメガルが十億円投資して、ネクタイしてかなきや出入りできねえような超高級店に改装してやるぞ！　バターロール一個六千円、メロンパンはなんと二万円だ！」

「二万っ！　そいつああ、横暴だろ！　なあ、光輔！　夕季！」

「いや、俺は別に」

「あたしも別に」

「んだあ、てめーら！　恥を知れ！」

「恥？……」

「このタイミングで来たか……」報告書を食い入るように読み漁る夕季へ、木場がちらと目をやった。「当然のことだが、明日のプレゼンは中止だな」

夕季の耳がぴくりと反応する。

「仕方がないわね。それどころじゃなくなったから」

あさみを受け、桔平が腕組みをして嘆息した。

「せっかく部品もすべて組み上がって、テストもすんだとこだったのによ」

「すでにすべてキャンセル済みよ。遠方からの来賓にはトラブルがあった旨を告げて、今日中にメガルから出て行ってもらう段取りになっています。プログラムの発動はメガル全体でも最優先事項だから、ロシア支部も納得するでしょうし」

「でもな、明日ギリギリで綾っぺが来れそうだったてのにな」

「何！」

「ほんとに、桔平さん？」光輔が夕季へ顔を向ける。「聞いてた？」

口を尖らせ、夕季が首を振った。

「サプライズのつもりだったんだろうけど、やっちゃったな、綾さん」

「おお。ま、仕方ねえわな……」

「仕方ねえですむ問題かっての。ざけんな！　ったくよ、ヴォヴァルだかメバルだか知らねえが、はた迷惑だろ、実際！　今度いつ来

れるのか、わかんねえってのによ。発動すんなら来月にしとけて、ハゲ！」

「……おまえのイカりの基準はメロンパンと綾ッペだけなのか？」

「他に何があるってんだ！」

「なんのてらいもねえな……」

「ヴォヴァルって、どんな奴なの？」電話帳のような報告書を閉じ、夕季が桔平の顔を見据える。「この報告書じゃ何もわからない」

「おまえ、もう読んじまったのか……」あぜんと夕季を見つめ返す。「俺は理解するのに半日かかったってのによ。しかも難しい漢字ばっかだもんで、しの坊にカナふってもらってだな……」

「フォラスの時とは明らかに反応が違うわね」

桔平をさて置いて、全員があさみに注目する。

「その報告書は建前上のものよ。わざとわかりにくくぼかして記載してあるの。公の報告書には記載できないことの方が多から仕方がないのよ」

「何！ いっしょけんめー読んだのに！ 甲とか乙とか任意のなんとかが被なんとかにとか、んだこの、古文みてえな……」

「大切なことはおいおい説明していくから、そのつもりでいて頂戴」その後を木場が受けた。

「アスモデウスのような実体獣に近い相手かもしれない。ならばまたガーディアンの方が必要になる。おまえ達の体は自分だけのものではないことをよく自覚しておけ」

「あまりプレッシャーはかけない方がいいんじゃないかしら、木場主任」

「……まあ、だな」

ぼうぜんと大人達のやりとりを眺めていた礼也が、けつ、と顔をしかめる。

「ヴォヴァルだかフォラスだか、聞いたことねえのばっかだな。もっとうこうよ、ルシファーとかサタンとかメジャー級の名前の奴は来ねえのか？ 一発で全部カタがつくようなよ」

桔平があきれ顔で礼也を見やる。

「そんなビッグネームが来てみる。鼻毛一本で世界が滅ぶぞ」

「いや、あんたが滅べよ」

「おい、間違っただろ、いろいろ……」

光輔らを退席させ、桔平が木場に念を押した。

「今日から奴らに特Sの警護をつける。いいか、絶対気取られんじやねえぞ」

「わかってる」重々しく頷き、桔平を眺める。「学校の方は大丈夫なのか」

「ちゃんと言い含めてある」ふん、と息をついた。「あいつら、先生や職員の中にメガルの訓練受けた奴がいるって知ったらびっくりするだろうな。今じゃ、駅員やコンビニの店員なんかに交じってやがるみたいだしな」

「俺ならば誰も信じられなくなるだろうな。いつそのこと、彼らに打ち明けた方がいいんじゃないのか？」

「んなことしたらストレスたまってしまうがねえだろ。囚人と同じだ」

「それもそうだな」

「何も監視役ばっかってわけでもねえがな。実際、そういった輩のおかげで避難やらが円滑に処理できてる面は大きい。ま、交じってるのがそればっかだとは限らねえけどな」

「……」

「マスター・ドラグノフは？」

何気ない問いかけに二人が振り返る。

あさみが表情もなく二人を眺めていた。

「少し早いけれど、帰ってもらおう？」

「……。仕方ねえな」

「……」木場が真顔になる。「夕季が淋しがるな」

「まあな。でもいい機会だったのかもしれない」つらそうに眉を寄せ、桔平が深く息を吐き出した。「どのみち、あいつにとっては酷

な結果になってただろうからな……」

暗闇に浮かび上がる真夜中の突堤に、二つの怪しげな影があった。打ち寄せる波を静かに見下ろすドラグノフの背後から、マカロフが忍び寄る。

「予定が変わった。世界中の要人もろとも、オビイディエンサーを抹殺する計画はもはや不可能だろう。カウンターが反応している間は、訓練中も彼らのまわりに尋常ならぬ護衛がつく。我々の行動の一つ一つに制約が課せられたと言っても過言ではない」

「……」

「もっともシンプルな形で計画を実行する以外、選択の余地がなくなった。できるか？」

「……もし、しなければどうなる」顔も向けずに押し出すようにドラグノフが声を絞り出す。「計画が頓挫すれば目的は果たされず、報酬もない。違うか？」

「そのとおりだ」マカロフが重々しく頷く。「そして計画の成否を問わず、君には消えてもらわなければならない。我々の裏切り者として」

「わかっている。それが約束だ」

「もう一つ懸念がある」

「なんだ」

「日本側はすべて知っているようだ」

「……」

「反対派に取り込まれた君が、プレゼンテーションの最中に事故に見せかけオビイディエンサー達を殺そうとしていることも、それを反対派のせいに仕立て上げるべく、我々が仕組んだこともな。すべてを知り、その上で我々を泳がせている。ならば、このタイミングでプログラムの発動を公表したことも合点がいく。彼らは君を英雄として迎え入れ、あくまでも英雄のままロシアへ送り返すつもりだ。我々主流派との上辺だけの円滑な関係を維持するために。信じがた

いことだが、我々の中にもスパイは存在する」

「それも承知だったのではないのか」

「？」

「そのために私を引き入れた。私ならば彼らが受け入れない理由がないからだ」

「……。そのとおりだ、ドラグノフ。君の裏切りはありえない。それが君が積み重ねてきた功績によるものだからだ。君を否定すれば、メガルの中で多くの人間を敵にまわすことになるだろう。だからこそ、君の裏切りには価値がある」

「そして誰もが予想し得る筋書きに、誰も逆らうことができない」
マカロフが頷いた。

「そのとおりだ、ドラグノフ」

「ここには柁の他にも注意しなければならない人物が多い。まるで国中からそういった人間達が、ここへと集められたかのようだ」

「だからこそその君だ。君でなければ、このミッションを成功へ導くことは……」

「私に与えられた結末を誰も変えることはできない。それが君達の歪んだ誠意をちらつかせる策略だとしてもだ」

マカロフの言葉を遮り、黒く淀んだ海面をドラグノフが睨みつける。

「私自身にも……」

第十七話 『花・前編』 9

式典用のブースに三機の搭乗式二足歩行兵器が陳列されていた。

全高約十メートル。陸竜王や海竜王を模したと推察されるレイアウトは基本的に似通ってはいたが、それぞれが独自のコンセプトを持ち、サイズの違いもあり、まるで別の機体のように映った。

開発時期の前後もあったが、成り立ちが異なり、個別の開発チームが競うようにプロジェクトを展開してきたのだ。そのすべては主流派に属するグループであり、今回ドラグノフやマカロフとともに、多数の技術スタッフが来日していた。

コクピット・ハッチを跳ね上げた状態で直立する三体の機械歩兵をいぶかしげにドラグノフが見上げる。

シンプルな造形の機動特化型、装甲や火力に重点を置いた重武装型、工作機械のようなマニピレータを持つ偵察型がそれらのすみ分けであり、偵察型には試作段階の遠隔操縦ユニットがデモンストレーション用にコクピット内に実装されていた。

「ずいぶんとでけえんだな」

桔平の声にドラグノフが振り返る。

幹部用の制服の襟元を指で広げ、桔平がドラグノフの横へ並んだ。「デリーとの共同開発が決まった時は竜王とそんなに違わないサイズだったはずなのに」

「竜王と同等のシステムを再現しようとすれば、必然的にこのサイズとなったのだろう。パワード・スーツならばこの半分以下のサイズでも収められるのだろうが、安全面とパイロットのケアにおいて改善すべき問題点が多すぎる。技術面ではロシアもデリーもすでにクリアしているのだがな」

「……。ロシア人ってのは頭いいんだな……」

「君よりはな」

「何！」

自嘲気味にドラグノフが、ふっ、と笑った。

「心配するなキツペイ。私もロシア人だが、こんなものは作れない。せいぜい世界最強の特殊部隊でトップに立てるくらいだ」

「いや、自慢してるようにしか聞こえねえんだが……」

「そうか？」

まあいいか、というふうに桔平が後頭部をかく。

「こいつの名前、確かインフィニティ、だったな」

「インフィニティ・シリーズ。無限、という意味だ」

「よくある名前だ」

「そうだな。だが、まだ誰もそれを見極めた者はいない。今はまだ口に出すのも恥ずかしい段階だが、いずれ完成するだろう。我々がそれを見極めた最初の人間になる」

「なるほどね。ま、竜王の中はスツカスカのモナカだからな。まったく同じモンなんてできっこねえし、あんたらがすげえことには変わりねえよ」

「モナカ？」

「おお」振り返り、にやりと笑う。「定番の和菓子の一つだ。今度食わせてやるよ。濃く日本茶によく合うんだぜ」

「それは楽しみだ」ドラグノフも同じ顔をしてみせた。「ぜひロシアへ持って帰りたい」

「本当に変わってんな、あんたは。和菓子が好きなロシア人なんて、そうはいねえぞ」

「どこの国のものでも本当にいいものは同じだ」

「まあな……」二足歩行兵器のバックパックへ目をやる。行軍中の歩兵の背負う荷物を思わせる巨大な箱が、亀の甲羅のように密着されていた。「これがウロボロスか……」

「ああ」中型車両ほどの大きさのユニットをドラグノフも見上げる。「まだ試作段階だな」

「でっけえな。竜王よりもでっけえんじゃねえのか？」

「これでもかなり小型になった方だ」桔平の顔も見ずににやりと笑う。「最初の設計では合衆国と同じサイズだった。そのために苦肉の選択として侵略プランが持ち上がったほどだ」

「いや、何言ってるのかわかんねえんだが……」

「時計の針が限りなく零時に近づいた瞬間だ」

「言ってるって」

「ふ……」ふいに複雑な心境をその表情に浮き彫りにする。「ムゲンを謳っておきながら、性能も活動時間も現行の原子力機関にははるかに及ばない。こいつはただの長時間バッテリーにすぎない。残念ながら失敗作だ」

「充分だろ」ドラグノフと同じ表情になる。その思惑は対照的だった。「燃料の補充もなしで何日も動き続ける戦車や戦闘機が、戦場にゴロゴロ現れたらと思ったら、歩兵の立場からしたら絶望的な気持ちになる」

「アメリカではこれと同じ容量の高密度燃料ユニットを、冷蔵庫ほどの大きさで実現したと聞く。同じ機体でそれぞれのパワースーツを携行しながら戦ったとしたら、ロシアには到底勝ち目がない」

「最初はそんなモンだろ。携帯電話だって出始めの頃はとも携帯できるようなシロモノじゃなかった。全然つながらなかったしな。そんな時や、ポケベルで呼び出して公衆電話に行きや充分だって、みんな言ってたもんだ。だが技術の進行は、みるみるうちにスタンダードへとたぐり寄せられていく。癌細胞が増殖するようなスピードでな」

「たとえが適切ではないな」

「本当に賞賛されるべきは、無駄だと思わず、諦めずにそれを成し遂げた奴らだ。最初の一步を踏み出した人間の勇氣には、その後のどんな偉大な功績だって及ばない」

「賛同しかねる面も多々あるが、言いたいことはわかる。ものごとをつきつめることも確かに難しいが、我々はあえてパイオニアとな

る道を選択した」

「小型核融合炉の開発に躍起になっているところもあるが、ウロボロスを目指したロシアは正しい。燃料の調達はおろか、整備や不測の事態にもその場で対応できるからな。知識さえありゃ、その辺の町工場でだって修理可能だ」

「堅牢でシンプルがロシアの伝統だからな。どれほどの先進技術が詰まっているのかと期待して分解した技術者は、中身を見て拍子抜けするだろう。その驚くほどシンプルな作りに仰天すること間違いなしだ。ボルシチを作る方が二つばかり工程が多い。アレクシアならばそこへあと三工程加えるはずだ」

「ははは。かと言って、決して手を抜いているわけじゃない。必要なスペックを詰め込み、できるだけ簡素に大量に壊れないものを作り上げる。誰がどこでどんな道具をどう使うのか熟知しているからこそできる芸当だ。そしてそれが優位であることを決して他人には悟らせない。そのしたたかさがロシア人の怖さだ。知ってるか？こいつがアメリカさんからインフェルノ・シリーズでもじられて畏れられてるのを」

「ああ。皮肉たっぷりイン・フェアと呼ばれていることもな」

「どっちも当たってる」

「そうだな」

「……」

「……」

沈黙を受け入れる二人。

次の桔平の言葉には複雑な想いが詰め込まれていた。

「あんたにとっては残念なことになったな」

「……」すぐさまドラグノフが思考を切りかえる。「これも巡り合わせだ。もともと縁がなかったものと考えるしかない」

「いつ発つ？」

「まだ未定だが、長居して君達の邪魔をするわけにもいかないからな」

「プログラムの発動中はあんた達の行動にもかなりの制限がつきまとう。その前に撤退する方が利口かもな」

「ああ」

「ただな……」

「……」

「あのバカ、淋しがるだろうって思ってな」

「……。ユウキのことか？」

「……ああ」

「私も残念だ。ようやく後継者を見つけたというのにな」

「なんの後継者だ？」

意味ありげにドラグノフが笑う。

「たった数週間で彼女は見えるほど強くなった。体の使い方がいい。体幹がしっかりしているから簡単にぶれることもない。もともとセンスはあったのだろうが、あの上達振りには正直言って驚きを隠せない。体格が同じならば、おそらく彼女の方が私より上だろう」

「あんたみたいな女、そうそういやしねえがな……」

「同じ条件で対一ならば、彼女より強い高校生は日本には存在しないはずだ」

「そりゃ言い過ぎだろ。あの体つきで格闘技かじってる二百キロの奴に勝てるとは思えねえ」

「その二百キロの相手の筋肉はナイフも通さないのか？」

「殺し合いの話、してたのね……」

「何百回殴っても人間が必ず死ぬという保証はない。だが急所さえつけば、指一本で倒すことも可能だ」

「そういう戦い方、あいつがするとは思えねえがな」

「それは同感だな。彼女は優しすぎる。非情にはなれないだろうな」

「ああ……」 桔平が淋しそうにため息をついた。「……俺以外の人間にはな」

ドラグノフが遠くへ視線を投げかけた。

「彼女は強くなる。何より、あれだけの心を持った人間はそうはい

ない」

「これ以上強くなれると、こっちもいろいろ困るんだが……」

桔平が胸ポケットからタバコを抜き取る。差し出されたそれをドラグノフは丁寧押し返した。

「あんたやアレクシアにもそうなんだろうけどな、あいつ、あんたの娘のことがすっかり気に入っちゃったみたいだよ。似たモン同士ってえか、何てえか、自分のガキの頃見てるみたいで、かわいくて仕方ねえんだろうな」

「ミーシャもそうだ。ユウキを自分の姉のように感じている。心を閉ざしてしまった彼女の支えになってくれている。あんなに楽しそうにしているあの子を見るのは久しぶりだ」

「……楽しそうって、あのチビッ子、全然笑わねえだろが」

「笑っている。私にはわかる。あとはそれを解放してやるだけだ」
ドラグノフが満足そうに頷いた。「私以外の誰かの手でな」

「……。また、戻ってこれるのか」

「……難しいだろうな」

「そうか……」

「……」

「……。なあ……」

「それ以上は言わないでくれ」

振り返ることすら拒絶するようにドラグノフが桔平の声を断ち切る。

「友人と見込んでの頼みだ」

「……」

桔平は何もできずに、ただその背中を見守るだけだった。

第十七話 『花・前編』 10

昼下がり、ドラグノフは重い足取りで居宅のドアノブへと手をかけた。

その日アレクシアは、検査入院していた市内の関連病院から退院することになっており、何もなければすでに帰宅している予定だった。

明後日、マカロフらロシア支部の人間はメガルの専用機で祖国へ帰る手はずとなっていた。ドラグノフの頼みで、アレクシアとミーシャだけは体調が整うまでの滞在を許可してもらったものの、退院した以上は長く引き伸ばせそうもない。

その旨をこれからミーシャの前でアレクシアへ告げなければならなかった。

ドラグノフが遠い記憶をたぐり寄せるように想い返す。

それは、プリムラの花を抱きしめながらアレクシアの後ろへ隠れるミーシャの姿だった……

＊

「……ミーシャ、今日からこの人があなたのパパになってくれるの」
ミーシャが身がまえ、ぐっ、と顎を引く。

「ご挨拶は？」

「……パパじゃない」

「ミーシャ……」

「パパじゃない！」目に涙のため、ミーシャがドラグノフを激しく睨みつけた。「こんな人、パパじゃない……」

「それでいい」

表情もなくそう告げ、ドラグノフが二人へ背中を向ける。
「早く身支度をすませてくれ。準備ができ次第この家を出る」
ドラグノフの背中越しにミーシャの泣き声が聞こえてきた。それを慰めるアレクシアの声も。
『それでいい』誰にも届かない想いを心の内でつらねていく。『いつまでもニコライのことを忘れないでいてくれ……』

＊

ドアを開いた瞬間、それまで聞こえていた話し声が途切れる。
木製の椅子に腰掛けプリムラの花を眺めるアレクシアの背中に隠れ、ミーシャが身がまえた。

ちら、と一瞥し、ドラグノフが二人に背を向けてキッチンへと向かう。それから抑揚のない声を押し出した。

「アレクシア、調子はどうだ？」

「いいみたい」

「そうか……」グラスの水を一息に飲み干し、深く息を吸い込んだ。
「本国から要請があって、急遽帰らなければならなかった。君の体調次第だが、いつ出立してもいいよう準備だけはしておいてくれ」
「ええ……」力なく微笑み、優しげなまなざしを後ろのミーシャへ向けた。「イヴァン」

「なんだ」

「ミーシャが渡したい物があるって」

「……」

表情も変えずにドラグノフが振り返る。

アレクシアは穏やかな笑みをたたえ、それを迎え入れた。

「さあ、ミーシャ」

アレクシアに後押しされ、顎を引いたミーシャが少しずつドラグノフへ近づいて行く。目の前で立ち止まると、後ろへ回した手をドラグノフの前へ差し出した。

プリムラ・ジュリアンの花束だった。

それは色とりどりの、そして綺麗なものや傷のあるものも混在した、不恰好だが心のこもった花達だった。

手渡された小さな花束を呆然と見続けるだけのドラグノフ。

するとミーシャはもじもじと手を組み、困ったようにドラグノフの顔を見上げてきた。

「……今日の夜、ママの退院のお祝いを三人でしたいの。だから早く帰ってきて……」眉をひくつかせ、口もとを震わせる。

しかしドラグノフにはわかっていた。それが彼女の精一杯の笑顔であることが。

やがてゆるやかに花びらが開くように、ミーシャがぎこちなく、かすかに笑ってみせた。

鮮やかな花のごとく、優しく、柔らかく、彩り輝きながら。

「……」

ドラグノフの視界が滲んだ涙で白け出す。わなわなと両手を震わせミーシャの顔に触れようとしたが、寸前で思いとどまり、両拳を握りしめた。

ぐすん、と鼻を鳴らし、ドラグノフが静かに二人へ背中を向けた。「すまない。今いろいろと片づけなければならぬ仕事が多くて、約束できない……」

その態度に、アレクシアはただならぬ何かを感じ取ったようだった。

ミーシャが残念そうに顔を伏せる。

「何時なら帰れるの？」

「ミーシャ」ミーシャの手を取り、アレクシアが穏やかに諭す。「イヴァン、今日はお仕事で早く帰れないかもしれないの」

「遅くてもいい。待ってる」

「駄目。あなたは早く寝なさい」

「でも、待っててあげなくちゃ」

アレクシアがミーシャを抱きしめる。それから嗚咽が言葉を奪っ

ていった。

ドラグノフは二人から顔をそむけたまま、ただそこへ立ちつくしていた。

「ママ、どうして泣いてるの？ どうして……」

格納庫に収められた搭乗式二足歩行兵器の一体が起動する。

三体の中でもっとも重武装を施したその個体が、両眼を発光させ歩き出した。

予想だになかった事態に、パニック状態のクルー達が我先と外へ飛び出していく。

インフィニティのコクピット内で、ドラグノフが覚悟を決めたまなざしに光を宿した。

それは揺るぎのない信念となって、彼の脳裏から定められた結末だけをフラッシュバックし続けていた。

『私が死ねば、アレクシアやミーシャ達は助かるのだな……』

続く

第十八話 『花・後編』 OP

叩きつけるような強風と豪雪にまみれた小さな山小屋の中、二人の男が顔をつき合わせることもなく互いの思惑だけをぶつけ合っていた。

マカロフの冷え切った声に生氣のない相づちを返し、ドラグノフが激しく燃え上がる暖炉の炎を眺める。

「それが真実ならば、私が背を向ける選択はどこにもない」

「君にとっては酷な話だろうがな」

「だがすべては理の範疇にある」

ドラグノフの決意を汲み取り、マカロフが重々しく頷いてみせた。「君の失墜を目論む反対派の策略によって、ニコライは苦渋の選択を迫られた。それが君の命であったのか、彼の家族をたてにしたものかは定かではないが、いずれにせよ容易に推測できうることだ。

彼は実直で汚れることを知らないがために、それを受け入れるしかなかった。だが問題はたとえそれが事実であろうと、我々には何一つ証明する手段がないということだ。ただ一つ、君が自らその役を受け入れる以外は」

「断る理由はない。彼の誠意を逆手に取り、彼の家族の安全を脅かさないことを条件に、私が弟ニコライをそそのかした。反対派へ帰順するための功績としてだ。私はそれを遠き異国で声高に叫ぶ。あとは君達がそれを正面から受け止め、哀れな被害者であるニコライの家族達を保護するだけだ」

「反対派の立場を失脚させ、政府からの信頼を得る。それだけで主流派にとってはかなりのメリットとなる。ニコライの家族には、我々が誠意ある対応をすることを約束しよう」

舞い上がる暖炉の火の粉を眺め、ドラグノフは何の期待も見られ

ないまなざしをマカロフへ向けた。

「もう一つだけ、望みがある」

「何だ」

「目的を果たした後、私の身柄を君達が確保することは可能か」

「約束はできかねる。君の命があるうちはな」

「もとより私を生かしておく気などないのだろう。私の心変わりを誰よりも恐れるのは君達のはずだ」

「否定はしない。我々にとって君の口は災いでしかないからな」

「命など必要ではない。ただ私は屍となったとしても、この国へと戻りたい。この朽ちた大地と淀んだ空の下へ。それだけだ」

「わかった、約束しよう。君の偉大なる功績のせめてもの手向けとして」

「感謝する」

床へ落ちた花びらを一枚手に取り、握りしめる。ドラグノフの手のひらでそれは粉々に砕け散り、床の埃の中へ埋もれていった。

「私の肉体は故郷の大地へ埋めてほしい。愛する祖国の土へと還るために。それが私の最後の願いだ……」

第十八話 『花・後編』 1

その衝撃にメガル全体が震撼した。

ドラグノフの駆る二足歩行兵器が、基地内の特設ブースを占拠したのである。

多くの人間達がいまだ敷地内に取り残され、またドラグノフ自身が攻撃の意思を示さないため、メック・トルーパー達は遠巻きに様子を見守るだけだった。

報告を受け、桔平が司令室から飛び出そうとする。

それをあさみが引き止めた。

「待ちなさい、柊副司令」

「待ってられっか！ こんな一大事によ！」ネクタイをむしり取る。

「俺が奴を説得する」

激情をぶつけるように睨みつける桔平を、あさみが顎を引いて見返す。

「……大量殺戮兵器が敷地内に持ち込まれたみたいなの」

「！」カッと両眼を見開いたまま、桔平の体が硬直した。「……んだって」

「詳しいことは不明だけれど、どうやらロシアからその類の兵器が持ち込まれた可能性が高い。ついさっき、ロシア支部の反対派をにおわせる組織から爆破予告があったわ」

「……どこに」

「わからない」

「……。ロシアは何て言ってる」

「そんな事実はない、だそうよ」

「……」桔平が考えをめぐらせる。「なんだ、このタイミングは。おかしいじゃねえか……」

「考えられるもつとも高い可能性は」

「……まさか」

「そのまさかよ」笑みの消えたまなざしで桔平を見据え、淡々とそれを口にした。「当初の三体には異常は見受けられなかった。遅れて到着した重武装ユニットか、或いはその後のウロボロスか。どちらにせよ、手引きする人間がいなければ、実現不可能なことに変わりはない」

「我々は一切関与していない」

マカロフの声に二人が振り返った。

「どうだかな」値踏みするように桔平が突き放す。「考えたくもねえが、あんたらが仕組んだサプライズってセンも充分ありえる。むしろそっちの可能性の方が……」

「いや、彼の独断行為だ」

「！」

マカロフは眉一つ動かすことなく、二人を見据えて続けた。

「ミス・シンドウ、ミスター・ヒイラギ。我々にチャンスをくれ。

これはロシアの失態だ……」

ドラグノフが基地を占拠してから約十分が過ぎようとしていた。マニュアルの記載によれば、ドラグノフの搭乗するバリエーションはメック・トルーパーの特装車両数台以上のファイアパワーを謳い、その気になればものの数分でメガル全体を制圧するほどの能力を有していた。

竜王の格納庫に近い場所でもあったが、ドラグノフの真意が読み取れぬ今、夕季らも迂闊には近づくことができずにいた。

「おい、どうなってんだ、夕季」

「……わからない」

「わからないって、てめえの師匠だろうが」

「……」

「きっと何か訳があるはずだよ」

「訳ってなんだ、光輔」

「……いや、それは……」

「あたしもそう思う」

光輔と礼也が夕季へ振り返る。

夕季は毅然としたまなざしで、ドラグノフが立てこもるブースがある一角を見続けていた。

「あたしが話してみる」

「ああ！ てめえ、自分なら大丈夫だとかふざけたことぬかす気じやねえだろうな」

「あの人は自分のことを鼠だって言った。もしそれが本当なら、追いつめられなければ牙を剥くことはないはず」

あきれたように礼也が嘆息する。

「あのな、謙遜に決まってるだろうが。あんなバケモンみてえな鼠いるかって。どう見ても猛獣だろうがよ。熊とか虎とか、ガッツリ肉食らう系の奴だ。てめ、のこのこ出てって、かわいげねえそのドタマから食われても知らねえぞ」

「その時はお願い」礼也の顔を見つめ、夕季が淡々と告げる。

「お願いって、てめえなあ……」

「夕季、少しでいいから、あの人を引きつけてくれよ。俺は木場さんに頼んで、ここにいる人達をなるべく遠ざけてもらうから」

夕季が光輔へ向き直った。

光輔の顔つきが変わっていた。凜とした表情で夕季の決意を正面から受け止める。

「おまえがあの人と話している隙に俺達が竜王に乗り込む。竜王なら被害を最小限に抑えられるかもしれない」

「……」

「誰も傷つけないんだ」

「……。わかった」

ふっと笑い、光輔が頷いた。

「おまえも無理するなよ。駄目だと思ったらすぐに引き返して来い

よ」

「わかってる」

「よし」

「……」 慚然とした表情で礼也が二人を見比べていた。「てめえら、人さしおいて、何勝手に話進めてやがんだって」

「時間がないから」

「行くぞ、礼也」

「おい、お、ちょっと待って……」

その時、マカロフが指揮するロシア支部の部隊が駆けつけてきた。手際よく現場を仕切り、野次馬達の排除に努める。

「ああ、なんだ、てめーら！」

いきり立つ礼也をアサルト・ライフルを手にした武装兵が押しとどめた。

ぐっ、と顎を引き、決して退かない心で礼也が屈強な武装兵達に立ち向かう。

そこでマカロフが、冷やかなまなざしで礼也を見据えながら一歩前へ出た。

「君達は下がっていなさい。危険だ」

「んだと！」

滑り込むように駆け寄って来た木場が、二人の間に立ちはだかった。

「そういうわけにはいかない。ここは我々の管理区域だ」

エネミー・スイーパーのメンバーを主として、メック・トルーパーの隊員達がそれに続く。

一部では揉み合いが始まり、一触即発の様相を呈していた。

「ここでは我々の指示に従ってもらおう」

木場が厳然と言い切る。

しかしマカロフは譲歩するそぶりを微塵も見せなかった。

「これはロシア支部の不祥事だ。君達の手を煩わせることなく、我々だけで解決する」

「あんたらに彼が説得できるのか」

その声に主だった人員が振り返る。

桔平だった。

「今のロシアに彼の心をくみ取ることができるのか」

「その必要はない」

「何」

「彼は裏切り者だ。狡猾にも我々を欺き、反対派の凶事に手を染めてしまった。我々の信頼を逆手にとって。我々は正義の名のもとに、彼を粛清しなければならない」

「てめえ……」

マカロフにつかみかろうとする桔平を、懸命に木場が押しとどめた。

「放せ、木場！」

「やめろ、軽率な行動は慎め」

「うるせえ！ この野郎ペしゃんこにのしてやんねえと俺の気がおさまんねえんだ！ 何が正義だ！ 腹ん中、ぐっちゃぐちゃに黒ずんでやがるくせによ！」

「それをしてどうなる」

「うっせえ！ 放せ、木場！……」

ざわめき立つ周辺の状況を不審に思い、ミーシャが窓を開ける。

慌しく人が入り乱れていたが、そこからは外の様子が何もわからなかった。

「何かあったの、ママ」

敷地内に緊急放送が鳴り響く中、愁いの表情でアレクシアがミーシャを抱きしめる。

「どうしたの、ママ。……痛い」

「ミーシャ。イヴァン、もしかしたら帰って来れないかもしれない」

「！ どうして？」

「……。お仕事で遠くに行くことになるかもしれない……」

それから先は言葉をつなぐことができなかった。

その様子にミーシャもただならぬ理由を感じ取る。

アレクシアに抱かれたまま、ミーシャがしっかりとしたまなざしで窓の外を眺めた。

「……。イヴァン、死んじやうの？」

「！」

「死なないよね？」

「……。唇を震わせ、アレクシアが悲しげな瞳を揺らした。「お祈りしよう、ミーシャ。無事イヴァンが帰って来れますように……」

「誰に」

「ミーシャ……」

戸惑いの表情を浮かべ、アレクシアがミーシャの顔を見つめる。

ミーシャは眉を寄せ、口を固く結びながらその顔を見返した。

「誰にお祈りすればイヴァンは死なないの？ お祈りすればパパも死ななかったの？」

「……」

「イヴァンが言ってた。神様を騙そうとする悪い人達がいるから、神様は私達のことなんか見てくれないんだって。だから神様は私達のことなんか助けてくれないんだって」

「ミーシャ……」

流れ出た涙をミーシャが拭い取る。

それからミーシャはキツと表情を正し、アレクシアへ背中を向けて駆け出した。

「ミーシャ、ミーシャ……」

追いかける声が途切れ、悲しみの涙にまみれたアレクシアが膝から崩れ落ちていった。

第十八話 『花・後編』 2

メック部隊とロシア支部強行班は睨み合ったまま、何の進展もなく時だけが過ぎようとしていた。

痺れを切らしたマカロフが部隊へ指示を出す。

「これより十分の後、全部隊でブースへの突入を試みる。先に私が陽動部隊とともに二号機を奪取し、三号機の遠隔操作に成功したら、一斉に砲撃を始めろ」

「は！」

「勝手なことはさせねえぞ！」

木場に羽交い絞めにされた状態で桔平がマカロフを睨みつける。

木場もそれに続いた。

「そうだ、勝手なことはさせせん！」

決死の様相で桔平が振り返った。

「てめえは放しやがれてんだ！」

「いや駄目だ。おまえにも勝手な真似はさせん」

「あのな……」

ホットラインからの呼び出しがあり、ようやく桔平が解放される。

あさみからだった。

「何の用だ。今は取り込み中でおまえなんかと話しているヒマは……」一瞬にして桔平の顔色が変わった。「ドラグノフが俺と話したいだ！」

大声にそこにいる全員が振り返る。

司令室別室の窓越しに騒動を見下ろし、あさみが含んだような笑みでそれを告げた。

「あなたと二人きりで話したいそうよ。くれぐれも慎重にね」
あさみの瞳が妖しげな光を放った。

「……ああ、承知した」通話を終了し、桔平が木場へと向き直る。すでに冷静さを取り戻していた。「だってよ」

「……。桔平」

「ああ、わかってる」マカロフをちらと見やり、木場へと念を押す。「おまえはそれまでこの百点野郎を押さえておいてくれ……」

メック・トルーパーの誘導によって野次馬達がぞろぞろと退いていく。

連絡用車両へ向かう桔平を夕季ら三人が引き止めた。

「桔平さん」

「まだいやがったのか、てめえら。早く避難しろ……」

「何言ってるんだって」桔平の声をかき消して礼也が言う。「あんなチンケなロボット、俺らが出てきや一発だって。メンドくせえこと言ってる……」

桔平が礼也の胸倉をつかむ。ぐい、と引き寄せ、押し殺した声を捻り出した。

「つべこべ言ってるねえで言うことを聞け」

その迫力に礼也が口もとを引き締める。

他の二人もただならぬ状況を感じ取ったようだった。

「いいか、てめえら。俺がいいって言うまで動くんじゃないぞ」

「どうして」

桔平が振り返ると、一步も退くことなく真剣なまなざしを向ける夕季の姿があった。

「どうしてもだ。死にたくなかったら言うとおりにしろ」

「死に……」

「他の奴らと一緒に本館の地下へ避難しろ。竜王は作り直しがきくが、おまえらの替わりはいない。頼む……」

礼也を突き放し、桔平が歩き出す。

毒気を抜かれた礼也達はただその場へ立ちつくすだけだった。放心状態の二人を交互に眺め、夕季が顎を引いた。

「本館へ行こう。あそこなら……」

「頼むってよ」

「言ったねえ」

礼也と光輔が顔を見合わせる。

「……。礼也、光輔、本館で……」

「死ぬってどういうこった？……」

「なんで俺らが……」

「……」

特装車両後部コンテナの通信スペースで無線機を手にする桔平。

ここでは司令部からのコントロールにより指定回線以外のアクセスはブロックされ、外部からの干渉は理論上不可能だった。

入り口付近には様子をうかがう木場とマカロフの姿が見えた。

「……。俺だ」

神妙な面持ちで第一声を押し出す桔平。

対して、ドラグノフは極めて落ち着き払った様子でそれに受け答えた。

『キッペイか。他の人間の避難はすんだのか』

「……ああ、あらかたな」

『そうか。早く全員を避難させてくれ。できれば君の周りの人間達もすべて』

木場をちらと見やってから、桔平がドラグノフに応答した。

「大丈夫だ。ここには俺を含め、死んでも文句を言うような輩は残っていない。あんたはこのうらなりは知らないがな」

『彼ならば気にする必要はない。どのみち私の監視を怠れば彼は粛清されるのだからな』

余裕めいたドラグノフの口調が冗談なのかどうか判別できず、桔平が口をつぐむ。

それを見透かすように、ドラグノフは笑みを含んだ調子でつないでいった。

『これから私が話すことを君達の記録に残せ。まずは嘘偽りが一切ないことを私は母なる祖国へ誓う』

「何言ってるんだ……」

戸惑いを隠せない桔平を一人置き去りにしたまま、ドラグノフの独唱が始まった。

『私のこれまでの功績はすべて自分を高く売るためのものだ。何も持たずに生まれた私達貧民層にとって、地位と財力は功績や名声以上の意味を持つ。誰もがそう思うはずだ。そして私は、私がロシア支部で得られるすべてを、すでに手にしてしまっていることに気がついてしまった。あとは立場を変えるしか何ら望むべくもない。しかし私は、身売りするにはいささか信頼を積み上げすぎてしまった。体制に不満を持つグループへ自分を売り込むためには、それなりの手土産が必要だったのだ』

「……」

インフィニティのコクピット内でドラグノフが無線機を握りしめる。一度だけ静かに目を閉じ、活目して続けた。

「我が弟、ニコライを抱き込んだのは私だ」

『！ ドラグノフ……』

「家族の命をたてに、私がニコライを脅して悪事を働かせた。ロシアには主流派と反対派の他にもう一つ別のグループがある。彼らを戦わせ、潰し合いの後に実権をすべて収めようとする野心的なグループだ。私の価値をどこよりも高く見積もったグループでもある」

「いい加減にしろ！」

マカロフが叫ぶ。

桔平を押し分け、マカロフが無線機を奪い取った。

「愚かなたわ言はやめろ、ドラグノフ！ 我々を煙に巻こうとしているようだが、貴様の背反行為を我々は決して見逃さない。我々は命にかえても貴様を……」

それ以上マカロフは言葉を積み上げることができなかった。顔面にヒットした桔平のバックブローによって、数メートルも吹き飛ば

されてしまったからだ。

「貴様！」

見向きもしない桔平の背中目がけ、拳銃を差し向けるマカロフ。が、それはすぐさま、木場のまわし蹴りによってコンテナの隅へと弾かれていった。

衝撃に震える右手を押さえ畏怖するように見上げるマカロフを、木場が修羅の形相で睨みつける。

「失せろ」

「……」

ギリと歯がみして、マカロフが車外へ出て行った。

その様を一瞥し、桔平がぼそりと告げる。

「続けるよ、ドラグノフ」

『……ああ。すまない、キッペイ』

「よくそんなでたらめ、次から次へと出てくるもんだな」

『！』

「夜も寝ねえで一生懸命考えたんだろうが、そのシナリオには重大な欠点がある」

『……。どういう意味だ……』

「センスがねえよ。そんなツマンねえジョークじゃ救いがねえだろ。それじゃ笑うところも泣くところもねえ。ヌキどころがねえ、どこぞの同人雑誌と変わんねえ。最悪だ」

『……』

ふざけたふうでもなく、真剣なまなざしで桔平がそれを口にする。木場もまた、同じ表情でことの成りゆきを見守っていた。

「ロシアにはそんなグループは存在しない。あるのは風野派と反風野派だけだ。そしてニコライを取り込んだのは、反風野派じゃない。反風野派のしわざに見せかけた、風野派の連中だ。あんたを仕向け、反風野派を一掃しようとした、奴らの策略だ。そのためにニコライは、あんたや家族の命をたてにとられ、懐柔された。全部知ってる、あんたも、そしてニコライもな」

『……』

「彼は、あんた達を守るために、血まみれの臓腑を吐き散らす思いで国賊を買って出たんだろうよ。えげつねえことしやがる。悪いのは奴らだ。あんたが責任を感じるようなことじゃない。それをよ、わざわざ家族の前で見せつけるように悪党ヅラかましやがって、何やってやがんだ、いったいよ。でけえ図体して、けなげつつうか、なんつつうか。何が、手にしてしまっていることに気がついてしまった、だか……」

『キツペイ、木場を大切にしろ』

「？」突然話題を切り替えたドラグノフに、桔平が不可解そうな表情になった。

『彼は決して君を裏切らないだろう。信じてさえいればな』

「……」苦虫を噛み潰したような顔になる。「もう、すでに一回裏切られてんだけどな……」

静かに耳を傾けていた木場の表情が暗く濁った。

『ならば信じる気持ちが必要なかったのだろうな』

「んあ？」

コクピットの中、ドラグノフがふつと笑う。

「かけがえのない人間というのは、何があっても必ずどこかで引き合うものだ。君にはそういった人間がまだ近くにいます。私にもニコライがいた。だが、彼はもういない」

『……』

無線機を握りしめ、やるせなさそうに桔平が眉を寄せた。

『私がニコライを追いつめてしまったのは事実だ。汚れなく、花のように祖国を輝かせることができたはずの男から、私という無粋な存在が生きる権利を奪ってしまった。未来を摘み取ってしまった。彼の家族から大切な笑顔を奪ってしまった。私のせいだな』

「ふぬけたこと又カシてんじゃねえぞ」

『……』

「だったら、牙剥く相手、間違ってんじゃねえのか」

『……間違っただけだ』

「？」

『私の乗るこの機体には、細菌兵器が積載されている』

「なんだ！」

無線機を握る桔平の手に力が込められる。

木場が眉間に皺を寄せた。

「細菌兵器だってよ……」

車外で盗み聞きをしていた礼也と光輔が、信じられないと言わんばかりの顔を見合わせた。

「やべえんじゃねえか、マジでよ……」

「やばいかもしれない……」

夕季は何も言わず、二人の会話を聞き取ろうと集中していた。

ふいに機内でドラグノフが悲しげに表情を曇らせる。

「この機体に一定のショックを与えると、システムが作動する仕組みになっている。それは何一つ破壊することのない静かな爆発だ。すみやかに建物をすべてシャットアウトすれば、この人間達は誰一人傷つかずにすむだろう。付近住民も早急に避難させれば、どうということもない。だが一旦接触すれば苦しみ悶えた末に確実に死に至る恐ろしいウイルスでもある。そして今後一ヶ月以上に渡り、この敷地内の施設は何一つ使用できなくなる。プログラムの発動を控えてそんな事態に陥れば、君達がどんな立場となるか想像するに難しくはない。それが彼らの狙いだ。退避の名目で混乱に乗じてドラグ・カイザー三機を鹵獲し、役立たずの日本から実権を奪い取る。責任問題を前面に立てて、本部の移転と実権の譲渡を要求する算段だろう。それが今回のクライマックスだ」

『……』

「ジョークだ。そんなものなど存在しない。万が一にもな」

『ドラグノフ……』

「私はこれからこの機体を駆って、なるべくここから遠くへ逃げることにする。君達へのブラフがばれ、退路を失ったためだ。おそら

く私の裏切りを許せない同志達が、私を駆逐すべく攻撃してくるこ
とだろう。私は死にもの狂いで逃げ続け、海の彼方で機体もろとも
爆発することになるかもしれない」

『……。おまえ……。』

「キッペイ。一つだけ願いを聞いてくれ」

『……なんだ』

「私は裏切りを重ね続けた救いがたい愚か者だ。だがニコライの家
族には何の罪もない。彼女達をこの国で保護してくれ。私の謀略を
メガルへ通告した、ニコライの功績として」

『……』

『ざれ言はそこまでだ！』

突然の怒号にドラグノフが、桔平が、夕季らが振り返る。

特設ブースの中から起き上がった別の機体が、ドラグノフの前へ
立ちはだかっていた。

そして機動特化型のコクピット内で、正義を謳うマカロフがメガ
ル中へ轟くほどの憤怒を叩きつけた。

その狂気を孕むまなざしもろとも。

「ドラグノフ。裏切り者の貴様を処断する！」

第十八話 『花・後編』 3

「どうなってんだ……」

まばたきも忘れ、礼也や光輔が立ちつくす。

夕季が心配そうに眉を寄せた。

今、彼らの眼前で、メガルの技術の粋を結集した二体の人型機動兵器が激突しようとしていた。

「貴様ら、何をしている!」

木場の怒鳴り声に光輔がすくみ上がる。

おそるおそる振り返ると、鬼のような形相で三人を見下ろす偉丈夫の姿があった。

「早く逃げろと言ったはずだ!」

「だってよ」こともなげに礼也が返す。「おっさん、冗談だっつてたじゃねえか。だったら俺らがちよちよいと……」

「本物だ」

「……」

「本物の細菌兵器がああ機体には搭載されている。そしてマカロフは、一番安全な場所からそれを起動させるつもりだ。自分の仲間達すら捨石にしてな」

絶句する三人。

「……んじゃ、竜王に近づくこともできねえじゃねえか」

「桔平さん、このことを言ってたのか……」

夕季が、うん、と頷く。

「早く本館に行こ……」

「ユークー!」

振り返る夕季。

今にも泣き出しそうな表情でミーシャが走り寄って来るのが見え

た。

「ミーシャ」ミーシャを抱きとめ、夕季がその顔を見つめる。「こは危ない。早く逃げて」

「イヴァンを……」

「！」

「イヴァンを助けて！」顔をくしゃくしゃにしながらミーシャが夕季にしがみついた。「お願い、助けて……」

小さな体を抱きしめ、夕季が対峙する二つの巨影を睨みつけた。

ブースをなぎ倒し、二機のインフィニティがあいまみえる。

それぞれのマニピレーターには、竜王用のサブマシンガンよりも大口径のアサルトライフルがマウントされていた。

全身にチョバム装甲を施したドラグノフの重装備型がゆらりと前へ出た。

それに呼応するように、両手で銃をかまえたまま腰を深く落とし、陸竜王さんながらマカロフのインフィニティが足裏のローラーでダッシュする。一瞬でドラグノフの視界から消え去り、真横へと位置取った。

両眼を爛々と光らせ、ドラグノフの機体が反応する。

繰り出された左腕をかい潜り、マカロフが銃底でドラグノフのみぞおちの辺りを突き上げた。

よろめき、後退しながらもなんとか踏み止まるドラグノフ。咄嗟に反応し、攻撃の軸をわずかにそらしたおかげだった。

「さすがだな、ドラグノフ」機動特化型インフィニティの中、取り憑かれたようにマカロフが笑う。「パイロットとしての技量は貴様の方が上だ。だが機体の性能差は埋めようもない。その鈍重な機体では私をとらえることはできない」

重装型のコクピット内部で、ドラグノフが顎下の汗を手の甲で拭いた。

「やめろ、マカロフ。この機体を破壊すればどうなるのかわかって

いるのか」

『何も起きはしない』

「！」

『そのまがましいまでの重装備はすべてダミーだ。このガンも貴様の持つものと同じく模擬弾だ。広範囲に渡って爆発を巻き起こすものや、無関係な者達を危険に晒すものなどどこにもない』

ドラグノフのコクピット目がけ発砲したマカロフの銃弾が、防御のために突き出した重装備型の銃をその右手ごと吹き飛ばしていた。

「やはり実弾か……。やめろ、マカロフ」ドラグノフが決死の様相でマカロフを制しようと試みる。「それ以上の衝撃を加えれば機体が……」

『心配するな。コクピットを狙えば被害は最小限に抑えられる』

「マカロフ！ 貴様、自分が何をしようとしているのか、わかっているのか！」

『わかっている』

マカロフがにやりと笑った。

「インフィニティを一機失うのは痛いがやむをえない。裏切り者を処断し、速やかに事態を収束させるのが最優先だ」その瞳の奥に妖しげな光を宿らせ、マカロフが謳い上げる。「これ以上近づかなければ、他の誰も害をこうむることもない。貴様の機体だけが爆発したとしても、巻き添えを食う者はいないだろう。ましてや、我々の同志が細菌兵器の危険に晒されることなどあり得もしない。そんなものはなから存在しないからだ」

苦渋の決断を迫られるドラグノフ。

「キッペイ！ 早くそこから逃げ遅れた人間を避難させろ！ この基地内の者だけではなく、付近住民すべてだ！」ギリと奥歯を噛みしめた。「私の機体には細菌兵器が組み込まれている。機体の破壊と同時にそれらは巻き散らかり、風に乗って広範囲へ広がるだろう」途端に基地内がパニックのるつぼと化す。

「早く館内へ避難しろ！」

「だから、とっとと竜王に乗ってりゃよかったのによお！」

避難をうながす木場へ振り返り、礼也が憎まれ口を叩いた。

「今さらそんなことを言って何になる！ 本当に死ぬぞ、おまえ達！」

礼也が口をつぐむ。

脅えるミーシャを抱きしめ、まばたきすらせずに夕季が木場を見上げた。

「何か方法はないの」

「……。実験用の爆破施設に封じ込めるか、機体そのものを爆風で吹き飛ばすしかない」夕季の目をまっすぐに見つめ、木場がしっかりとした口調で言い切った。「それでもある程度の飛散はまぬがれないだろう」

全員が言葉を失う。

硬直してしまった夕季らを不安げに眺め、ミーシャが捨て犬のような声を絞り出した。

「……イヴァンは？ イヴァンはどうなるの？」

「ミーシャ……」

「イヴァン、死んじゃうの？ ……そんなのやだ」ミーシャが泣き始める。「やだ、そんなのやだ……」

ミーシャの体を抱きしめる夕季。何もできない不甲斐ない自分を睨みつけるようでもあった。

互いの顔を向け合うこともなく、光輔と礼也が同時に口を真一文字に結んだ。

「やめろ、マカロフ！」連絡用車両内で無線機を握りしめ、桔平が懸命にマカロフへと呼びかける。「それ以上そいつに手をかけるな！ 本当に取り返しのかからないことになる！」

『大丈夫だ』

無線機を通して押さえのきいた声が響き渡った。

『ブラフだ。そんなものなど存在しない』

「バカ野郎！ そんな確証どこにもねえ！ 勝手なこととして関係ねえ奴らまでわざわざ危険に晒してどうする！」

『これはテロだ。テロを見過ごすことは祖国の理念に反する。些細な暴力にいちいち屈していたら、いつまでたっても理想へは到達できない』

「はあ！ ちっとも些細じゃねえだろ！ てめ、何わけわかんねえこと——」

『ロシアにも感応指数に秀でた人間が大勢いる。優れた科学者も人材も数え切れないほど存在する。君達より優れ、君達よりも祖国を尊び、神を信じ、この世の行く末を愁う、この世界の核となるべき人種だ。それなのに日本だけが権利を独占しようとする。忌むべき地だという曖昧な理由だけで、ドラグ・カイザーを三機とも我が物顔で占有する。不公平だとは思わないか、ミスター・ヒイラギ』

「……」

『表向きは従順な我々の中にも、崇高な理念と、リスクを承知であえて望むべき確かな思想がある。決して譲れぬ誇りと理想があるのだ。すべてに従うわけにはいかない。特に今の日本には』

「……。てめえ……」

「桔平！」

木場に呼びかけられ、桔平が振り向いた。

「木場、そっちはどうだ」

「今、鳳さんの先導で、気密装甲車両を手配させた。インフィニティ相手にどこまで通用するかわからんがな」

「ドラグノフの援護くらいにはなるだろう。なるべく二体を引き離し、マカロフの野郎を押さえ込むんだ」

「わかっている」訝しげな表情でブースへ目をやる。「桔平、インフィニティの活動時間はどれくらいだ」

「無限マイナス一時間」

「無限！……」

しれつと言いつつ桔平に、木場が絶句する。

すると表情も変えず、ため息混じりに桔平はつけ加えていった。

「カタログスペックではな。実際は六十日ってとこだ。水増しがハ
ンパねえ。原子力空母の連続運用にもはるかに及ばない、とんだイ
ンチキスペックだ」

「だが必要充分な作戦可能限界だ」

木場と顔を合わせ、桔平が重々しく頷いてみせる。

「違う。たった一機で戦況をひっくり返し、食料も燃料の補充
も必要としない単独兵器が、六十日も戦場を闊歩すんだからな。考
えたくもねえ」

「試験用のドックは」

「あさみに手配させた。そこまで運んでいく手段が厄介だがな」応
答のなくなった無線機を機材に押しつける。「いざとなったら、俺
がホバーを操縦してでも差し向ける」

「いや、俺が行く。おまえには他にすべきことがあるだろう」

「やらせてくれ。あいつも俺の数少ない友達の一人なんだ」覚悟を
決めた表情で桔平がブースへと目をやった。「親友にあんな悲しそ
うな顔されたら、ほっとけねえだろ」

木場には何も拾い上げることができなかった。

「あいつらは？」

「避難させた。いつまでも渋ってはいたが、無理やりにな。防護服
を着せろだ何だ言っていたが、防護服ではふいの爆発に対応しきれ
ない上、竜王の格納庫へ向かうにも必ず危険区域を通らなければな
らない。そんなリスクはおかせん」

「すまん。助かる」外の様子をうかがいつつ腕組みをする。「あい
つらを一人でも失ったら、こっちの負けだ。俺達がどうなろうと、
あいつらを失うわけにはいかない。当の本人達は納得できんだろう
がな」

「わかってる。さあ、おまえも防護服くらい着ておけ」

「ああ……」

銃撃音に振り返る二人。

目と鼻の先で、譲れない二つの異なる思惑がぶつかり続けていた。

足裏のローラーを可動させ、ドラグノフのインフィニティがメガルの滑走路を滑り抜ける。

アイセンサーによる機器の切り替えとスロットル開閉、感圧式のハンド・マニピレータ操作を目まぐるしく展開し、独立した個々の動作をまるで生物のように滑らかに連動させ続けた。

一世代前までのシステムでは、移動をしながらの攻撃、並びに情報の収集や処理などを一般的なパイロットがこなせるまでには、一年以上の訓練期間を必要とすると言われていた。バランスサポーターやオペレーションシステムの最適化により、操作自体はそれほど難しいものではなくなったが、回避行動を取りながら攻撃までこなせるパイロットは、わずか一握りしか存在していなかった。事実上実戦においては、外部からのサポートなしでは運用不可とまで囁かれるほどだったのである。水も食料も頭部の貨物スペースに積載できるのに、単独での使用がままならない。それがドラグノフの言う、インフィニティの欠陥部分でもあった。

がしかし、ドラグノフやマカロフといった秀でた熟練パイロットの手にかかれば、この二体のように恐るべき兵器へと変貌する。

まさに無限の可能性を秘めた、悪魔の戦闘兵器だと言えた。

戦闘においての見極めに長けたドラグノフではあったが、優れた操縦技能を持つマカロフの前に銃撃を避けるのが精一杯で、なかなか海際へと展開することができずにいた。

それどころか機動性に優れるマカロフは常にドラグノフの先へと回り込み、むしろメガルの懐深くへと押し込もうとしていた。

「く！」

コクピット内で歯がみし、ドラグノフがヘッド・アップ・デイス

プレイと外部カメラの状況を何度も見比べる。

銃を取り上げられ片腕もがれた今、他に武器となりそうなものは何一つなかった。動きもマカロフの機体にははるかに及ばない。それをあざ笑うかのごとく、マカロフの攻撃は執拗に追従し続けた。

一瞬の機会を得て、倒れ込みながらドラグノフが先ほど弾き飛ばされたライフルを左手でつかみ取る。

すぐさま反転し、片膝立ちの体制で左手を突き出し、マカロフ目がけて発砲した。

弾道が正確にコクピットの中心を射抜いていく。

だが軽く脆いプラスチックの模擬弾は、その表層にかすかな傷を残しただけで四方八方へ飛び散るだけだった。

「無駄だ、ドラグノフ！」マカロフが勝利を確信して叫ぶ。「祖国の誇りを汚した国賊よ。弟もろとも、異国の地で灰となれ！」

ふいに背中に衝撃を受け、マカロフが振り返る。

メック・トルーパーの気密装甲車が、機動特化型インフィニティの動力ユニットを銃撃していた。

下半身を固定したまま上半身だけを百八十度回転させ、一瞬で相手車両と正面から向き合う。腰に回転軸を持つインフィニティならではの芸当だった。この特殊機動がある限り、インフィニティにはどの角度からの死角も存在しない。

「バカ者どもが！」マカロフが怒りと狂気に満ちたまなざしを差し向けた。「このウロボロスがどれだけの価値を持つものなのかかわらんのか！ 貴様らクズの命をいくら寄せ集めても、遠く及ばん！」

マカロフの集中攻撃を受け、装甲車が黒煙を上げながら活動を停止する。間髪おかず、中から乗組員が慌てて飛び出してきた。

「死ね！」

逃げ出す乗組員目がけ狙いを定めるマカロフ。

それを阻止しようと別の車両が射線上へ突入した。

「バカが！ 何台来ても同じことだ！」

すぐさま撃破。続けざま、背後から接近する複数の車両をローラーによる旋回機動でかわし、側面から蹴りつけ横転させた。

「直進兵器がこのインフィニティにかなうものか。……！」

本能で危険を察知し、マカロフが周辺を探り始める。

振り向いた眼前に、カメラアイを発光させたドラグノフのインフィニティがぬうつと現れた。

「ドラグノフ！」

高機動型インフィニティの頭部へ銃口を突きつけ、声も発せずドラグノフが連射する。プラスチックの模擬弾とは言え、一点に集中したエネルギーはメインカメラのレンズを粉々に砕き、マカロフの視界を奪うことに成功した。

「くそ！ 前が！」

弾切れとなったアサルトライフルを放り捨て、ドラグノフがマカロフの機体へ腕をからませる。蛇のように滑りこませ肘を折り、無差別に銃撃を続ける右腕をそぎ落とした。

背中を蹴りつけ、うつ伏せになったマカロフのインフィニティをドラグノフが踏みつける。

それからマカロフから奪い取ったライフルで残った手足を弾き飛ばした。

それですべてが決着した。

コクピット内で深く息を吐き出すドラグノフ。

「キツペイ。すまなかった。早くこの機体の処理を……。！」

信じられない光景に再びドラグノフが活目する。

偵察型インフィニティが彼の目の前に立ちはだかっていた。

防護服のフード越しに桔平が、くわと目を見開く。

「なんだ、ありゃ……」生唾を飲み込んだ。「誰が操縦を……」

ドラグノフが銃を新たな刺客へと差し向ける。

だが数瞬早くダッシュした偵察型インフィニティはまたたく間にドラグノフの眼前まで詰め寄り、右腕のヒートカッターを振り下ろ

したのである。偵察任務として訪れる敵地で岩や樹木、建物や戦車まで、ありとあらゆる障害を取り除くエクスカリバーだった。

左腕を切り落とされ、ドラグノフの駆る機体がマニピレーターとしての機能を完全に失う。体当たりを仕掛けたところを左腕のパワー・ヴァイスに阻まれ、万力のようなその圧力で頭部を拘束されることとなった。

「くそ……」

策に窮したドラグノフが周辺を見渡す。メック・トルーパーの作戦車両はすべてマカロフによって行動不能状態へと陥っていた。

「キツペイ……」目を細め静かな口調で、歴戦の勇士が覚悟を並べ立てる。「万策つきたようだ。君達は安全な場所まで避難しろ。私は君達からなるべく遠く離れるよう努力してみる」

無線機を握りしめる桔平。

「ふざけんな、てめえ！」くぐもる声がもどかしく、フードを歪り取った。「何カッコつけてやがる。最後まで生き延びる方法を模索しろ！ そう言ったのはてめえだろうが！」

『今がその最後だ』

「な！……」

『だが勘違いをするな。私は終焉の時が訪れるまで諦めはしない。最善の結果を得るための努力をする。たとえこの身にかえても』

インフィニティのコクピットの中、ドラグノフが満たされたように笑った。

「キツペイ。追いつめられた鼠が何故猫に立ち向かっていけるのかわかるか」

『……何を』

「生への執着ではない。死を覚悟するからこそ、かなわない相手でも食らいつくせると錯覚するのだ。チャンスは一度きりしかない。たとえば猫がそれで命乞いをしてきたとしても、心変わりすれば間違いないく食い殺されるからだ。だから鼠の心に迷いはない。私は最後まで抗う。誰にも望まれず、この不毛な命を持てあました、せめて

もの償いとして」

『おい、てめえ……』

金きり音が声をかき消す。

ハッチを溶かし、ヒートカッターの刃先がドラグノフの目の前に突き出してきていた。

目を細め、誰にも届かない声をドラグノフがつないでいった。

『こんな血にまみれた手で家族を抱きしめることはできない。私にできることなど、もう何もない……』

シャッターの下りた本館ロビーできよきよとせわしく周囲を見回しながら、夕季はミーシャの手を握りしめていた。

他の職員らがモニタリングする画面上で状況をうかがい見ようと視線を向ける。

拘束され、ブレードを突きつけられたドラグノフのインフィニティが、必死の抵抗を続ける様子が映し出されていた。

「ユーキ」

涙でくしゃくしゃになった顔をミーシャが差し向ける。

夕季はわずかに眉を揺らしたが、画面から目をそむけることなく成り行きを見守り続けた。

「イヴァンを助けて。イヴァンは悪くない」ふるふると唇を震わせた。「悪いのは私……」

「……」

「お願い、ユーキ、イヴァンを助けて。ちゃんと言うこと聞くから。いい子になるから。もう二度とお花捨てたりしないから……」

人目もはばからずミーシャが大泣きし始める。

周囲が何ごとかと振り返ったが、ロシア語でわめき立てるミーシャの叫びは誰の心へも伝わらなかった。

夕季を除いては。

「……イヴァンのことを、パパって呼ぶから……」

「約束だよ」

「！」

はっ、と顔を上げ、ミーシャが夕季を見上げる。

夕季はモニターに映し出される光景をひたすら見続けていた。

涼しげに笑みをたたえながら。

「約束だよ、ミーシャ」

残された右腕の下腕で偵察型インフィニティの肘を折り、ヒートカッターを遠ざけようとドラグノフが試みる。

だが姿勢の不安定さからくるパワー効率の違いは如何ともしがたく、なかなか状況を覆すことができなかった。

重心を落とし前傾姿勢を取るも、クラッチした左腕のアームに引き剥がされる。

ドラグノフがローラーを全開で逆回転させると、少しずつ二体が元の場所から離れ始めた。

そしてその行為に心血を注ぐごとに、刃先はドラグノフの喉もとへと近づきつつもあった。

高熱にドラグノフの皮膚がちりちりと焼かれていく。

凄まじいまでの精神力で信念を貫いてきたが、そろそろ限界も近いようだった。

『アレクシア、ミーシャ……』意識が朦朧とし始める。『必要とされる一つの命が生まれ、引き換えに不要な命が一つ消えていく。私の死はその限らないサイクルの一片にすぎない。さらばだ、妻よ、娘よ。そしてまだ見ぬ命よ。悲しまないでくれ。……愛している』鼻つらへ狂気の刃が迫る。それは数秒を得ずして、ドラグノフの胸もとを貫くはずだった。

が、しかし、目を閉じたドラグノフのもとへそれが届くことはなかった。

予期せぬ状況に戸惑いながらも、ゆるやかに瞼をこじ開けていく。そこで展開された光景にドラグノフが言葉を失った。

彼の視界からブレードが遠ざかっていったからである。

そして切り開かれたハッチの隙間から覗く、燃え上がる勇者の両眼が赤く光り輝いた。

第十八話 『花・後編』 5

ドラグノフと向かい合う体勢で、陸竜王が偵察型インフィニティの右腕を抱え、引き剥がす。

その咆哮と礼也の雄叫びがシンクロした。

『不要な命なんぞ、一つもねえんだってよ！　　ったく、わけわかんねえなあ！』

礼也の叫び声に、停止していたドラグノフの意識が呼び戻される。

「何をしている、レイヤ！」

『んなこた、どうでもいい！　俺的にぜひともあんたに駄目出ししてえことがあって、わざわざ参上つかまつった！　あんた、自分の娘のこと全然わかってねえな！』

「！」

『あいつの大好物はボルヒチだかボルハチだかじゃなくてメロンパンだ。親ならちゃんと気づいとけての！　本当、救いよしのねえダメ親父だって！』

「……」

陸竜王の両眼が輝きを増していった。

コクピットの中から礼也が激情を噴き上げる。

「好きでもねえモン無理やり食わせようとするから、あんなバカ女みてえにヒネくれちまうんだって。あんたにや悪いが、ボルヒチよかメロンパンの方が百倍うめえ。あのチビ助に直接聞いてみなってことだ！　瞬殺されてやったのもそんな哀れな部分が透けてて、何やらかわいそうで本気モードが出せなかったせいだ。決して実力負けじゃねえ。それは認めるが、もう二度と相手はしてやんねえぞ！

どっかの誰かとどっかい大作でギャグはイテえしよ、中身も丸カブリだし、そんなこともわかんねえようなクソ親父なら、娘に嫌わ

れても仕方ねえって！」眉間に力を込め、ぐっと睨みつけた。「以上だ！」

偵察型の胸に背中を押しつけ、礼也が両足をドラグノフの肩へかける。そのまま伸び上がるようにドラグノフを蹴り飛ばした。

ヒートカッターが引き抜かれると同時に、ヴァイスで固定されたドラグノフのインフィニティの頭部が飛散する。

「光輔！」

吹き飛んだドラグノフの機体を、海竜王のクローがコントロールした。

「俺はボルシチ結構好きなんだけどさ！」

空高く放り上げ、子供が大人を抱えるようにキャッチした。衝撃が海竜王の足首まで強化コンクリートの滑走路へめり込ませる。

「メロンパンよりはうまいと思うよ」

『ふざけんな！』

「……あと、おまえが人のこと、嫌われるとか言っちゃ駄目だと思うよ」

『うっせえ、ハゲ！』

「ハゲって……」

抱えた腕をひねり、陸竜王が偵察型インフィニティを投げ飛ばす。その勢いでヒートカッターを装着した右腕が肩からもぎ取られていった。

間髪入れず、体勢を立て直し左腕のヴァイスでつかみかかろうとする相手を、バーン・クラッカーの乱れ撃ちが粉碎した。

「奴ら、また勝手な真似を……」送信機を握りしめ、桔平が歯がみする。「おい、木場！」

『すでに確保済みだ』

桔平が行動不能となった高機動型インフィニティへと目を向けると、偵察型の無線操縦器を放棄したマカロフが、木場らに拘束されコクピットから出てくるところだった。

『キッペイ……』

ドラグノフのくぐもった声が聞こえ、ようやく桔平が胸を撫で下ろす。

「おい、何とかなったようだな」

『いや、まだだ』

「なんだと、どういうことだ!」

『どうやらダメージを受けすぎてしまったようだ。間もなくこの機体は活動を停止する。それが発動キーとなって、ウィルスが流れ出す仕組みだ』

「……」 桔平が音を立てて唾を飲み込む。「だったら今すぐ出てこい。すぐに光輔達に……」

『不可能だ。ハッチがイカれてしまった。無理やり引き剥がせば機体が損傷し、その場でシステムが作動するだろう。もう時間がない。早く私を洋上ドックまで誘導してくれ』

「……」 なんだってんだ、ここまでやっというて!」

憤怒のままに桔平が拳を無線機へと叩きつける。

それを見透かすように、ドラグノフの静かな覚悟が空間へ広がっていった。

『仕方がない』

損壊し活動停止状態の機体の中、ドラグノフが満足げに笑った。

「君達はよくやってくれた。私は満足だ……」

『そんなの認めない!』

夕季の声に反応し、顔を上へ向けるドラグノフ。

空竜王が空から飛来し、その青白い眼光でドラグノフを照らしていた。

インフィニティもろとも海竜王を背中から抱え上げ、空竜王が飛び立つ。

その様子を確認した桔平が声を張り上げた。

「よし、ナイスだ、夕季、そのまま海へ出ろ。一キロほど先に試験用のドックを待機させてある。そこへそのわからず屋を放り込んでまえ」

『了解』

「おまえの合図でゲートを閉じる。飛散防止剤も手配済みだ。外部へはもれねえ」桔平が口もとを引きしめた。「頼んだぞ、夕季」

『了解……』一拍の間。『必ず助けます』

「好きにしろい！」

インフィニティと海竜王をぶら下げたまま、空竜王が加速し始める。

一刻の猶予もないはずだった。

「何故だ。何故君達はそこまで……」

宙吊り状態でドラグノフが夕季へ問いかける。

「私は生きていてはならない人間だ。君達にもわかるだろう。私がいればこの先必ずまた……」

『私は認めない』

ドラグノフの世迷言を夕季がすっぱりと断ち切ってみせた。

『もしあなたが何らかの罪を背負ってそれを償いたいと望んでいるのなら、愛する家族のために生きるべきだと思うから。どれだけ汚れても、どれだけみすばらしくても、ただ捨てるためだけにその花を切り取る権利は誰にもないはず』

しかしドラグノフの心は動かない。

「君の両手が自分でも嫌になるほど汚れていたとすればどうだ。それでもその手で可憐な花を摘み取ろうと思うか。血にまみれてしまった悲しい花びらを美しいと思えるのか」

『そうしなければその花が枯れてしまうと云うのなら、私はそうする』

「摘み取ればどのみち枯れてしまうのか。それはエゴだ」

『枯れるかもしれない。でも植え直せばまた光を求めて伸び上がるかもしれない。その花が自ら咲き開くことを望むのなら、私は迷わず手をさしのべる。かわいそうだからという理由で可能性を否定してしまうことそ他人のエゴだ。見守ることがつらいから、苦しいから、ただそこから逃げるために目をそむけているだけだ。私はた

とえどんな姿になっても、それを見ていてくれる人がいる限り生きていたい。みすばらしい私の姿を見て、それでも笑ってくれるのなら』

カッと見開かれるドラグノフの両眼。夕季の声に重ね合わせるように、ニコライの言葉を思い返していた。

「……。どうやら、迷いがあつたのは私の方らしいな。だから私は小さく、弱い……」淋しそうに目を伏せる。それからかたわらへ置いた花の束を見やった。ミーシャから貰ったものだった。「……私の、負けだ」

『もうすぐドックへ着きます。頑張つて下さい。アレクシアやミーシャや、新しい命のためにも』

ドラグノフが嬉しそうに笑う。それは何ごとにもとらわれない、心からの笑みだった。

「だが、もう遅い」誰にも届かない声でそう呟く。「すべてが……」腹部の傷を押さえ、ドラグノフが静かに目を閉じた。しごく満足げに。

桔平達は突堤へと繰り出し、総出で沖の様子をうかがっていた。一足先に機体から抜け出た礼也の横で、泣き続けるミーシャをアレクシアが抱きしめていた。

風を切り裂く翼音を従え、空竜王が地に降り立つ。

ハッチを開け一人で機体から降りる夕季の姿を見て、ミーシャがさらに泣き声を上積みさせた。

困ったような顔になり夕季が目線はずす。

「おい！」

桔平の声にそこにいる全員が一斉に振り返った。

視線の先で、海の中から海竜王がその黄橙色の光をのぞかせていた。

そして高く掲げたその両腕には、ぐったりと横たわるドラグノフの姿が見えたのである。

すすり上げるようにミーシャがえづき始める。

「ミーシャ。マスターから伝言がある」

夕季に呼びかけられ、くしゃくしゃの顔をそろりと向けるミーシャ。

すると夕季は顔も向けずに淡々とそれを口にした。

「お花を台なしにしてごめんなさい、今度からは大切にします、つて」

「！」

弾かれたようにミーシャが海へと振り返る。

徐々に近づき、次第にあらわとなるそのシルエットの中、海竜王に抱かれながら、茎と葉だけになったプリムラ・ジュリアンを小さく掲げるドラグノフの疲れた顔がミーシャ達の方を向いていた。

「イヴァン……」

ミーシャが号泣する。

嬉しそうに微笑み涙ぐむアレクシアに優しく抱かれながら。

第十八話 『花・後編』 6

海竜王のハッチを開け、光輔が軽やかに飛び降りる。
それを笑顔の桔平が出迎えた。

「よくやった、光輔」

光輔が嬉しそうに笑った。

「桔平さんの言うとおりにやったらうまくいきました」

「俺じゃねえよ」 夕季を、くい、と親指でさす。「こいつのアイデ
アだ」

「さすが、夕季」

顎をぐつと引き、照れながら夕季が二人を睨みつけた。

「……なんでおまえは誉められただけで人を睨む」

「睨んでない……」

「まあ慣れっこですけど……」

インフィニティのハッチを引き剥がす直前、海竜王がドックの中
でフォッグを発生させる。海竜王のみが持ち得る濃密なミストの防
壁が、ウイルスの拡散をわずかに遅らせたのである。

「なんせ、よかったわ」

ほっと胸を撫で下ろす桔平。

横を見やると、担架に載せられ医療班に治療を施されるドラグノ
フの姿が目に入ってきた。

「とりあえずの処置はしておいたが、ブツが仕込まれてたのがバッ
クパックの方だったから、人体にもほとんど影響ないレベルだ」そ
れから据わったまなざしでもう一度光輔らへ向き直った。「勝手な
ことしやがったためえらには後でキツイお仕置きが待ってるがな」

「ええっ！」

「んだあ！ ちょー消しだろ！ 普通よ！」

「そういうわけにはいかねえ。一步間違えば、てめえらがとんでもねえことになってたんだからな」

「なんねえって。俺は不死身だからよ」

「黙れ！」食い下がる礼也をギリリと桔平。「てめえ、どこかの誰かってのは、俺のことか！」

「他に誰がいんだって」

「あんなシモネタ大魔王と一緒にするな！ 不愉快だ！ 不本意だ！」

「いや、人種以外えれえカブってんぞ、あんたら……」

「やくかましい！」見栄を切るように礼也を睨みつけた。「とりあえずてめえは罰としてメロンパン禁止の刑だ。市内のパン屋全部に特別援助金とてめえの顔写真ばら撒いて、姿を見かけ次第警察へ通報してもらおう。なんと有効期限は一年間。更新も可能だ」

「そんじゃ、死んじまうって！」

「……不死身じゃねえのか」

「いや、だからってよ！ どうせ金使うんならご褒美で一年間食べ放題のフリーパス発行しとけて！」

「だから罰だっつってんじゃねえか！」

「はあ！」

「さっき、ナイスだ、って言った」ぼそりと夕季。

「そういえば言ってたような……」ふうむと光輔。

「言ってたって。俺もすっかり聞いた」

「……」ぐむむむっ、と桔平の眉がひくつく。「……そりゃナイスよ、って言ったんだな、たぶん……」

「おいこら、パワープレイにもほどがあんだろ！」

「ううむ……」

「自分でも苦しいと思ってますね」

「……。黙れ、てめーら！」

「逆切れしやがった……」

「逆切れだねえ……」

夕季が桔平を睨みつける。

それでも桔平の心は退かなかった。

「そんな顔したって駄目だぞ。命令違反には違いねえんだからな。睨みたきや睨め。ちっとも怖くねえぞ。今年の俺は厳しくいく。今までのような甘いジャッジは一切なしだ。とことん追求して、とことんまでつき詰めてやる。今年の俺は、柊つめへーだ。覚えておけ。おまえが何言ったって、ちょっとやそつとじゃへこまねえぞ。決して揺るぐことのない精神力の強さがハンパねえからだ。とにかくキゴときが立派な大人に勝てると思うことがおこがましい」ふん、と鼻を鳴らし、胸を張ってみせる。「どーだ、まいったか」

「もううちに来ないで」

「……そんなひどいこと言わなくてもいいじゃねえか……」

「メールとかもしてこないで下さい」

「下さいって、おまえ……」桔平が泣きそうな顔になる。「俺はおまえ達のことを心配してだなあ……、って、今何やった、おまえ！」

「着信拒否」

「……。俺じゃないよな？」

「誰だと思ったの？」

「……光輔え？」

「なんでやねん……」光輔、苦笑い。

「そーいやおまえ、どこにいやがった」

礼也に問いかけられ、夕季と光輔が顔を向ける。

「俺らが走って格納庫に向かった時、どこにもいなかっただろうが」

「本館の地下」

「そっからわざわざまた出て行ったのかよ」

「違う」ふん、とあきれたように息をつく。「本館の地下から格納庫の下に通路が走ってるから、そこから。避難してる人が多くて、思ったより手間取ったけど」

「何！」礼也が目を見開く。「なんでそんな大事なこと早く言わねえ！」

「言おうとしたのに二人とも聞かなかったじゃない」口をへの字に曲げる。「だから本館へ行行って言われてたのに」

三人が一斉に振り返る。

そこにはポカンとした表情で成り行きを見守る桔平の姿があった。

「……。うん、そのとおりだな……」

「嘘こけ！」礼也の激しいつつこみ。「今、そうだったのかって顔してやがったろ！ 頭ん中でポンて手え叩いたツラしてたぞ！」

「いや、そんなことはない。俺は知ってた。知っててその上でだからだな……」

「どうして副局長のくせにそんな大事なことも知らないの」

「……」夕季の毒攻撃をまともに浴び、顔色が悪くなる。「……」

ああっ！ それどころじゃなくて、すっかり忘れてただけだ！

「開き直りやがった……」

「最低だ……」

礼也と光輔が顔を見合わせる。

「こりゃ、ちょー消しだな」

「ちょー消しだねえ……」

「ちょー消しにやしねえぞ！」

「何！」

「ええっ！」

「一度出したジャッジは意地でも覆らせねえ。ぜってー認めねえ！ たとえミスジャッジだってわかっててもだ！」

「いや、ミスは認めろって……」

「ふざけんな！ 俺の言うことも聞かねえくせしやがって！ おまえらのそういう態度が、聖人のように清らかな俺の心を感情のない機械のようなマシンに変えさせたんだ。俺はおまえらのおかげで、決して折れることのない鋼の心と氷の心を合わせ持つアイアンアイスマシーンマンになれたのだ！」

夕季のへの字口がさらに角度を尖らせる。

「もう仕事以外で二度と話しかけないで」

「いや、職場でそんなふうに言われるとリアルにへこむからな……」

担架の上に身を横たえ、ドラグノフが虚ろな視線を泳がせる。
暮れかけた高い空へ手を伸ばし、何かをつかもうとしてやめた。

「ニコライ……」

その眩きは誰の耳にも届かない。

気配に気づき視線を向けると、涙で目を真っ赤に腫らしたアレクシアとミーシャの姿があった。

「アレクシア……」

それからミーシャの顔をぼんやりと眺めた。

ミーシャはプリムラの花を抱きしめ、何かを堪えるようにじつとドラグノフの顔を睨みつけていた。

悲しそうに瞳を揺らし、ドラグノフがその瞼を閉じる。再び目を開くと、静かにミーシャへ笑いかけた。

堰を切ったように涙をこぼし、ミーシャがドラグノフへ抱きついていく。

その頭をいとおしそうに撫で、ドラグノフが目頭を押さえた。

『ニコライ、すまない……』口もとを引きしめ、嬉しそうにアレクシアとミーシャを見比べた。『私達が家族となることを許してくれ……』

夕季らは何も言わずにその光景を眺め続けていた。

頃合を見計らい、桔平が一步前へ出る。

厳しいまなざしと表情に、ドラグノフもすべてを悟ったようだった。

「キツペイ……」

「こんな時にすまないが、あんたにしないやらならない話がある」
ドラグノフの目を見据え、迷いのない口調で告げていく。「申し訳ないが二度と祖国へは帰れなくなった。この国にもいられなくなるだろう」

ドラグノフが、ふっと笑った。

「わかつている」状況を感じ取り桔平を睨みつけるミーシャの頭を撫で、穏やかに微笑む。「覚悟はできている」

「あんたの家族も含めてだ」

ドラグノフの瞳に悲しみの色合いが浮き上がった。

「……私はどうなってもいい。だが、家族のことは……」

「そうはいかない」

切なる想いを桔平の宣告が断ち切る。

「あんたには今日限り死んでもらわなくちゃならないからな」桔平がすまなさそうに顔を伏せてみせた。「さっきの爆発事故で全員死んだことになっちゃった。あんたが起こした無理心中のせいだ。生きてたらつじつまが合わなくなる。察してくれ」

「……」

「あんたは悪くない、全部マカロフのせいです、ってロシアは言ってきたよ。マカロフは軍部に取り入って、インフィニティの技術を手土産に自分を高く売るはずだった。だがそれを実行に移すには、上層部にも強力な発言権を持つロシア支部を何とか失脚させる必要があった。主流派、反主流派、そして軍部からもカリスマ扱いされ、それらのバランスを取る役割を担っていたあんたの立場もな。だから奴はあんたの存在が邪魔になって、亡き者にしようとした。それがロシアが送ってきた後出しのシナリオだ。解せない部分も山盛りだが、ちゃんとヌキどころはある。少なくとも、あんたのひとりよがりの演出よか百倍マシだ。裏切り者からメガルを守り、国賊から家族をかばって死んだ祖国の英雄を、国をあげて送り出したいとまで言ってきたよ。今さら生きてましたなんて、恥ずかしくて言い出せねえだろ。どのみち今のロシアにゃ、幽霊が安心して住めるような場所はどこにもない。遺体の返還を求めてきたが、死体は粉々で一片も残ってねえって報告しちまった。ロシアもそれで渋々納得しやがった。後からブーブー言いやがったら、シモネタたっぷりのあんたのネタ帳送りつけてガッカリさせてやる所存だ」

「キッペイ……」

ドラグノフが惚けたように桔平に注目する。

すると桔平は、にやりと笑いながら先へとつないでみせた。

「メガ・テクノロジーの知り合いがあんたを雇いたいと言ってきた。優秀なテストパイロットが必要なんだそうだ。そのために、あんたらには早急にアメリカ人になってもらわなければならない。名前はターミネーターでもミスターブーでも好きにしてくれ。どのみち、あんたこの先、メガル中でイタイ奴扱いだけだな」

両目でウインクをする桔平に、ドラグノフが平坦な視線を差し向ける。

「言っておくが、くれぐれも巨乳の大食い女と勝負しようなんてバカな気だけは起こすな。プライド、ずたずたにされんぞ。あいつはボルシチを寸胴ごと平らげちまうような恐ろしい巨乳だからな。あいつに比べりゃおまえさんなんぞ、ごきげんようのお嬢様だ。心しとけ」

「……」真顔で桔平の顔を見つめながらドラグノフが重い口を開いた。「キッペイ、君に伝えなければならないことがある。ずっと言いたかったことだ」

涼しげなまなざしで桔平がドラグノフを見返す。

「なんだ？」

「……」

「……」

「残念だが君にはジョークのセンスがない」

「るっせえ、とつとと出てけ！」

アレクシアと顔を見合わせ、ドラグノフが嬉しそうに頷いた。

やれやれ、と言わんばかりにその様子を見続ける光輔達。

ふいに振り返ったミーシャの厳しい表情に、礼也と光輔が顔を見合わせた。

「おいおい、ちび夕季、えれえ怒ってやがるぜ」

「どうしてパパをもっと早く助けてくれなかったの、って顔だね」

「プチ夕季ならいかにも言いそうだな」

「で、俺だけ蹴られる」光輔が、さつと脛を内側へ向けた。

「十年経ちゃ、間違いなく完全体だな。こいつみてえな」

夕季が二人をキッと睨みつけた。

顎を引き、ミーシャが二人へ近づいて行く。

その眼光の鋭さに礼也と光輔が固唾を飲んだ。

「……逃げた方がいいかな？」

「逃げんじゃねえ。てめ、一生頭上がんねえぞ」

「なんで……」

二人の目の前まで歩み寄り、ミーシャが立ち止まる。

しかし、身がまえる二人へ、ミーシャは背中に隠した花を差し出したのだった。

二輪のプリムラ・ジュリアンを両手を広げるように差し向ける。

「お？」

「俺らに？」

間抜けヅラで自分を指さす二人に、ミーシャがコクリと頷いた。そわそわしながら顔を見合わせ、光輔と礼也が腰を落としてそれを受け取ろうとする。

その時、ミーシャが二人の頬にサプライズを見舞った。

突然の熱烈なキスに硬直する二人。しばらくして、まんざらでもなさそうなニヤケ顔に変わった。

夕季の後ろへ隠れ、二人を眺めてミーシャが照れたように笑う。

『ありがとう。大好き』

ロシア語でそう言った。

言葉の意味はわからなかったが、二人はちらちらと確認し合い、嬉しそうな顔をしてみせた。

間抜けヅラが加速する。

「こいつああ、ぜってー美人になるぜ」

「俺もそう思う」

「こっちのちんくしゃ女と違ってよ」

夕季がキツとなり、二人を睨みつけた。反射的に光輔の耳をつね

り上げる。

「だだだだ！　なんで俺！」

「さっきバカ女って言った！」

「いや、それ言ったの俺じゃないし……、だだだだだ！　わかってるくせに！」

ミーシャが楽しそうに笑った。

花のような笑顔だった。

了

第十八話 『花・後編』 6（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

お見苦しい内容に加え、世界観の崩壊がハンパない感じで恐縮し
かりです。そろそろスパロボっぽさを徐々に出していけたらいいな、
などと考えています。

これからもおつきあいいただけたら幸いです。謝々。

第十九話 『プライマル』 OP

突如として蒼穹を引き裂き現れたその巨影は、あざ笑うかのごとくに空の上から人類を見下ろしていた。

おまえ達などいつでも滅ぼせると言わんばかりに……

「ざけやがって！」

灼熱のシルエットと化した陸竜王の中、礼也の魂が真っ赤に燃えた。

「おし、行くぞ！ 光輔、夕季！」

『わかった、一気に決めようぜ！』

『了解』

ガーディアンを集束させ、すぐさま大地を蹴って駆け上がる。血気にはやる三人に釘を刺すように、桔平ががり立てた。

「てめえら、無茶すんじゃない。まだどんな相手かもわからねえんだからな！」

横並びのコクピット内で、礼也と光輔が奮い立つ気持ちをただ真っ直ぐに叩きつけた。

「だから、やってみなきゃわかんねえって！」

「とにかく一気に決めていこう。な、夕季！」

「……」

日輪の輝きを背に受け、ヴォヴァルの巨体が妖しくゆらめく。木彫りのような、或いはおもちゃのようにも見えるひとこぶラクダの上に、甲冑をまとった中世の騎士を思わせる鈍色の巨人がまたがる様は滑稽でもあった。ただ不気味なのは、仮面の奥の表情が一切見えないことと、体長の倍もあるランスをかまえながら、まるで攻撃の意思が見受けられないことだった。

臥竜偃月刀を上段にかまえ、空目がけガーディアンがさらに伸び上がったいく。

ほぼ同じ体躯のヴォヴァルの頭上まで飛び上がり両断しようとした時、その姿を見失った。

大地に降り立ち空を見上げると、先よりもはるか頭上に黒い影を確認する。

ガーディアンジャンプ力ではそこまで到達することは不可能だった。

「ち！」

歯がみする礼也へ、夕季が顔を向けた。

「礼也、あたしにやらせて」

じっと夕季を凝視する礼也。

「おし、わかった」瞬きもせずにくすりと言った。

背筋を伸ばし、夕季が前だけを真っ直ぐ見据える。

「礼也、光輔！」

「おう！」

「俺もいいよ」光輔の瞳がめらめらと燃え上がった。「ここで一気に決めようぜ！」

再びガーディアンが七色の光に包まれる。

噴き上がるように雲を突き抜け、それは空高い場所で人の形を成してとどまった。

空竜王によく似たシルエットの、それまでの形とは別のタイプのガーディアン、エア・スーペリアだった。

青く輝く両眼に、胸部の装飾部分と全身のラインにはそれぞれ赤と黄橙色の光を宿していた。

轟々と風を従え、空間を切り裂き、白銀の翼を持つ巨人がヴォヴァルへ挑みかかっていた。

第十九話 『プライマル』 1

メック・トルーパー事務所から通路を経て、休息コーナーのすぐ横に小会議室があった。

それは別名、『説教部屋』とも呼ばれていた。

説教部屋の入り口付近でへの字口の桔平が仁王立ちして睨みをきかせまくる。

その前で光輔らが並んで立っており、にこにこ笑顔を振りまく雅が楽しそうに見学していた。

仏頂面の夕季にちよっかいをかけ返り討ちにあう光輔の横で、礼也が大きなあくびを撃ち放つ。

その時イカズチが窓ガラスをビリビリと震わせた。

「てめえら、わかってんのか！」

「いや、わかってるってよ」こともなげに礼也が言う。さらなる大口を開けながら。「ふあゝあああつ！」

それが桔平の怒りのツボをさらに刺激した。

「んだ、その態度は！ あんなに無茶すんなったのに、てめえらはもう、後先考えずに突っ込んで行きやがって。せっかく新型になったってちっとも意味ねえだろが。奴が、ひゅっ、と消えちまったからよかったようなものの、あのままならやられてたぞ。てめえらがぶっ飛んで街の被害もえれえこっちゃだし、国の奴らはここぞとばかりになんもかんもこっちのせいにしてぶーぶー言ってきやがるし、また特別予算組まなくちゃいけないわね、あゝあ、ってあさみが嫌味言ってきやがるし、しの坊は頼んどいた番組間違えて録画しやがるし、楽しみにしてたのに、ったくよ。人死にとか出なかったからよかったようなもんだが」じろりと睨みつける。「毎度毎度、勝手なことばっかしやがって。ひっこみつかねえことにでもなった

ら、どうするつもりだったんだ！」

「いや、そこはよ、桔平さんのスペックで何とかしてもらおうかなって」

「ああ、知らねえぞ、俺は！ 勝手なことするなら先に一声かけとけ。それで俺が駄目だって言ってからにしろ！ そしたら俺は関係ねえ」

「なんだ、そりゃ。単なるタイムロスじゃねえか」あきれたように礼也が吐き散らす。「行く気もねえのにとりあえずコンパ誘ってけって言ってるようなモンじゃねえか。てめえだけ逃げる気マンマンだよ。メンドクせえ」

「屁理屈を言うな！ 都合のいい時だけ、人あてにしやがって。減給になったらおまえらから請求するからな！」

「あのなあ……」

「すいません」光輔一人がおろおろとうろたえていた。「俺があの時止めていれば……」

「ざけんな！ バトルモードになるとおまえが一番イケイケじゃねえか！ いい加減にしろ！ 普段はイエロー・ポジションのくせしやがって！」

「イエロー・ポジションで……」

夕季へと向き直る桔平。

「おい、夕季。おまえ、なんで技の名前言わねえ」

「は？」

「そのとおりだって！」途端に礼也が興奮し始めた。「普通叫ぶだろ。お約束だって！ じゃねえと、次何やんのかわかんねえだろが！」

「いや、だいたいわかってるけどね」

「黙ってろ、光輔！」ギツと睨みつけた。「視聴者のみなさんが納得できねえだろうがってことだ！」

「おまえ何言ってるの……」

「そんな恥ずかしいことしたくない」

返す刀で礼也が夕季を睨みつける。

「はあ！ ふざけんな、てめえ！ それで熱血のテンション限界まで盛り上げて、魂のコスモをしこたまバーニングさせんだろが！」

「くだらない」

「てめえ！」

「メモ渡すから、礼也が叫べば」

「んなあつ！」

「もういい、鬱陶しい」

「きいいいっ！」

「そういうことじゃねえだろ」むっとなって振り向いた二人の顔を眺め、長く深いため息を桔平がもらした。「わかっててもあえてそれを口にすることで、おまえら同士の確認にもなる。声出し確認は基本中の基本だ。特に安全面においては、レベルの高い奴ほど恥ずかしがらずにきちんとそれを実践してる。それに確認は何度やったっていいんだ」

「そんなの必要ない」夕季が口を尖らせる。「ガーディアン意思の疎通はそんな低レベルな共有じゃない。あの中にいれば、光輔や礼也が何を思っているのかだって……」

「てめえらの中ではわかってるのかもしれないが、こっちはてめえらは何やろうとしてんのかまったくわからねえんだ。助言もできねえじゃねえか」

「そんなの……」

「くだらないとか言わせねえぞ。てめえらだけで戦ってるわけじゃない。てめえらの方からはわからない状況だってあるはずだ。もしガーディアンチームの先に民間人の避難場所があったらどうする。うん百、うん千の人間ぶっ殺しといて、事故ですから平気ですって言えるのか！ 言えねえだろ、おまえは特に。どうせ、わちゃわちゃ泡くって、自滅するのが関の山だ！」

「……」

「とにかく次にやろうとしていることをこっちにも明確に伝えろ。」

恥ずかしいんなら、小さな声でもいい。言え。その後、礼也と光輔で合唱しろ」

「ふざけんなって！」

「それは恥ずかしい……」

「三人でオブラートでもかけとけ」

「ビブラートだろうって。素で間違えてんじゃねえ！」

「……おまえ、よくわかったね」

「まったく、いつもこいつも」

「さっきから文句ばかり」桔平と同じく、への字口で夕季がぼそりともらす。「少しはこっちのこと信用したら」

「んだと！ どうやって信用しろって言うんだ！ 俺の言うこと無視して、勝手なことばかりやがって。信用してほしいんだったらそれなりの行動をだな……」

黙り込んでしまった夕季を、やれやれと言わんばかりに桔平が見下ろす。

「まったくよ、かばうのにも限界あるって覚えとけ。これから俺はおまえらの尻拭いで明日まで拘束だ。説明旅行でお泊りだ。何つつて言い訳すりゃいいんだっての。あゝ、頭がいてえ」

「ごまかす方法を考えた」

「何！」

「四つ」

「四つも！」

「言わないけど」

「言わないけど！」桔平が凄まじい形相で夕季を睨みつけた。「そう言わずに試しに一つだけ言ってみな。怒らねえから」

「嫌だ。言わない」肝の据わった顔つきで夕季が桔平を睨み返す。

「どうせ言うだけ無駄だろうし」

ぐむむむ、と噴き上がり、振り返りもせずに桔平が雅へ手を突き出した。

「みっちゃん、あれ」

「はーい」

にこにこと笑みを浮かべながら、雅が真っ赤に塗られたハリセンを桔平に手渡す。そこには雅の字で『桔平さん専用』と描かれてあり、頭から湯気を出して怒りまくる桔平の似顔絵まで添えてあった。ベシ、ベシと続けざまに光輔と礼也を打ちつける。

「いたっ！」

「つてえな！」

それからしばし夕季と睨み合った。

「……」

「……」

静かに時だけが流れていく。

痺れを切らし、口を開いたのは礼也だった。

「おいどうした。やれって」

「わかつている！」

「……」

「……」

「だから、やれってよ！」

「……」 桔平のこめかみを汗が伝う。何かに気がついたと言わんばかりに、ポンと手を叩いた。「いや、そう言えばこいつには、おまえらが暴走しないように見張りを頼んだんだったかなあ。考えてみりゃ、一人だけ負担が多くて大変だよな。これはポイント割り引きしねえとまずいだろ」

バチバチと両目ウインクを夕季へ浴びせかける。

すると夕季は眉も動かさずに冷たく言い放った。

「頼まれてない」

「もしもし、夕季ちゃん……」

「どうもすみませんでした」

「いや、そっぽ向いて言われてもな……」

あきれ顔の礼也。

「女子高生相手にびびってんじゃねえって」

「びびってなどいない！」

「じゃ、いっとけて」

「いったらうじゃねえか！」

意を決して桔平が振り下ろしたハリセンは、へろへろと漂い、夕季の頭の上で、ペシ、と小さく弾けた。

すかさず桔平からハリセンを取り上げ、夕季が思い切り振り放つ。ビュンと風を切り裂いたそれは桔平の頭上でバシツと音を立て、ぼさぼさヘアーを割り、真っ赤なハリセンをビリビリに引き裂いた。

「あゝあ、桔平さん専用なのに」

雅へうんうんと頷きながら桔平が背中を向ける。

「また新しいのを頼む」

「あいあいさ」手のひらを突き出した。「ごひゃくえん！」

「ひゃっきんだろ……」

「お駄賃です！」

「お駄賃！ 子供？ お駄賃、高！」

「かたじけない」

「かたじけ？……」

収まらないのは礼也だった。

「待て待て、おかしいだろ！」

「何がだ。破れたら使えねえだろうが。これじゃ実力の半分も出せねえ。また新しいの買ってきてから改めてだな……」

「じゃねえだろが。何が、うんうん、だ。なんであんたがこいつに返り討ちくらってやがんだってことだ」

「一発ずつだろ。お返しじゃ仕方ねえ。連帯責任だからな。作戦参謀としてあえて受け止めた。あえてだ」

「んじゃ俺らにもやらせろって」

「てめえは手加減とかしねえだろが！」

「今のが手加減してたのかって。明らかに火力が違ってんだろ。百発分の威力は楽勝にあったって」

「一発は一発だ。それ以上でも以下でもねえから、決して負けたわ

けじゃねえ」

「んなこまけえプライド、どうでもいいって。いい年こいたおっさんが、女子高生相手に負けて帰って来てんじゃねえぞ！」

「負けてねえぞ、俺は！ アウエーであることを考慮してもイーブンだ。断じて」

「どこがイーブンだ。顔削ってるだろ。鼻真っ赤だぞ、あんた」

「どうりで昼間から星がちらつくわけだ。くそ！」

「あっち向いて言えって」

「いや、あのな……」

「卑怯じゃねえか」

キツとなって桔平が礼也を睨みつける。

「ごちゃごちゃやかましい。こいつの場合、おまえらと違ってぶっ叩くと頭が悪くなる危険性があるだろうが。勉強できる奴の脳みそは、おまえらみたいなクルクルパーなのとは作りが百パー違うんだ、百パー。同じなのはパーのとこだけだ、このクルクルパーどもが。こいつの頭を三等分して、おまえらに割り振ってようやく三人分だ。おまえらはゼロだからな。ゼロ、ゼロ、三百だ。それがこいつの頭が壊れたら、ゼロ、ゼロ、ゼロになっちゃうじゃねえか。トリプルパーだ」

「ムカつくな、んのやろー」

「でも全部否定できないのも確かだね……」

「そのとおりだ。確かに見かけはアレだが、中身は結構デリケートにできてんだ、これでも。ちよっとしたショックでスフレみたいに崩れちまうかもしれねえ。そしたら俺が困る。あゝ、困る。想像しただけでド困りだ」

「嘘こけ！ 適当なことばっか言って逃れてんじゃねえって」

「マジだ。その証拠におまえらにはもうチャンスはねえ」

「なんのチャンスが……」 光輔が悲しそうに顔をそむけた。「ま、体育コースだけどね」

桔平と礼也の言い争いは続く。

「全部リーダーのおまえがやらんぽらのせいだ」

「はあ！　いつ俺がリーダーになった。リーダーはこいつだろ。認めてねえが」

「嫌。礼也でいい。認めてないけど」

爆心地が礼也対夕季へとすりかわった。

「いや、てめえだ。まさか自分がピンク・ポジションだと思ってねえだろうな。ああ！　いっちょ前によ。そんな貧乳で凶悪なピンク、記憶にねえ！　安いパンチラで人気とろうって魂胆か！」

「知らない。礼也で我慢するからいい。本当は嫌だけど」

「我慢するたあなんだ！　てめえ！」

「……。貧乳って言った！」

「言ったがどうした！」

「謝れ！」

「謝らねえ！」

「謝らないとあのことにみんなに言う！」

「待て、それは待て！」

「なんのことだかわかってるの！」

「いや、わかってねえが！」

「ねえ、夕季、あたしピンクがいいなあ。ピンクやる」誰からも相手にされていないのに、一人で雅が躍り上がる。「ここから先は危険だから、あなたは下がっていなさい。貧乳禁止です」

「みやちゃん……」

「いいわね、いくわよ！　とう！」

「あて！」光輔が顔をゆがませた。「雅、スネに入ってる……」

「かたじけない！」

「へ？……」

すっかり蚊帳の外となった桔平が光輔へ目を向ける。

光輔が卑屈な笑みを浮かべ、再び顔をそむけた。

「まあ、俺はイエロー・ポジションですし……」

「まあな……」

第十九話 『プライマル』 2

「まったくまいっちまうよなあ」

光輔らを帰した後、メック・トルーパー事務所で桔平が悪態をつく。

日はすでに落ち、難しそうに書類とにらめっこする木場が心のこもらない受け答えをしていた。

「普通、頭のいい奴ってのはやる前から何でもわかつちまうから、無茶はしねえもんだがな。あいつは頭いいくせにあきらめが悪いからたちが悪い」

雅が自販機の紙コップを盆に載せ、やって来た。

「おまたへ。ブラックとカフェオレでござる」

「お、サンキュ、みっちゃん」

「おお、すまん」

二人と向かい合うようにちょこんと腰を下ろし、楽しそうに笑いながら雅もカップの一つを口にした。

「夕季のこと？」

「おお」真っ赤に光り輝く鼻を押さえながら、桔平が涙をちょちょぎらせる。「おおイタ」

「大分？」

雅が、ちよん、と指先で触れた。

「っ！」

「痛い痛い飛んでけ」

すると桔平が真顔になった。

「あれ、治った？」

すかさず雅が、ビン、と弾く。

「あだ！」

「うゝむ、やっぱり駄目だったかあ」

「ほ？」

「桔平さん、依然としてイタイ人のままだからなあ。さすが」

「いや、それ違う意味に聞こえる……」

「そのままの意味だけどねえ」

「あっはっは！ 相変わらずみっちゃんはいじわるだよなあ」

「かたじけない」

「かたじけない？……まあ、かわいいから許しちゃうけどな。ブサイ子だったら腹パンして息の根止めてるところだ」

「よかった、かわいくて命拾いしちゃった」

「くそ、また自分で言いやがったな」

「かたじけない」

「いや、意味わかってねえだろ……」

桔平がコーヒーをすする。眉間に皺を寄せ、引出しからフレッシュとシュガースティックを取り出した。

かきまぜて一口。首を傾げ、もう一組追加した。

「ほんとよ、何とかなんねえもんかな」

「そのカフェオレのこと？」

「なあ。こんだけ入れねえと、ほとんどブラックだぜ。どこがカフェオレだっちゅうの」

「おまえの味覚はおかし……」

「おかしいのはてめえのツラだ！」

ぐむむ、と口をつぐみ、木場が桔平を無視する。

そんなことなどおかまいなしに桔平は続けた。

「やることやってるからいいってなモンでもねえだろ。光輔はともかく、礼也も夕季も、あれじゃ誰も認めてくれねえぞ」

雅が目を丸くする。うるうると尊敬のまなざしだった。

「すごいよねえ、桔平さんって、みんなのこといろいろ考えてくれてたんだあ」

「まあな」ちらと木場を見て、誇らしげに胸を張る。「持って生ま

れた性分ってえか、こいつみてえなだらしねえ奴とか、ツラも生き方も不細工な奴ら見てるとほっとけねえんだよ」

「む！」

「生まれついでのリリーダー体質みてえなもんだな。まったく損な役回りだぜ」

「立派な考えだよねえ」意地悪そうに桔平を見つめた。「ほんとに人間ってどうして自分のことだけ見えないんだろ」

「だよな、俺も思うぜ。みんなそれぞれがしっかりしてくれりゃ、他人がどうこう考えなくてもすむってのに」

「ねえ、微妙な感じだよね」

「ほんと、かたじけねえよな」

「何言ってるの？」

「……」

コホン、と桔平。

「ああ見えてよ、奴らも結構デリケートなところあるからな。ムズかしい年頃なのは確かだが、そんな不安定な年代の奴らに、こんな重要なこと任せちゃっていいのかって、正直疑問に思う」

それに木場が頷いた。

「俺も同感だ。実際、彼らに背負わせるには荷が重過ぎることだらけだろう」

「まあよ、四十になっても五十になっても、頭中ガキみてえな構造の奴もいるからな。精神年齢だけなら俺らと大差ねえ気もするし、若いからって、一概には言い切れねえがな……」

「おまえが言うかあっ！」

鼻面をビシッと指差す雅に、桔平の目が点になる。

「……。何、そのツツコミ」

「あれ？」

「あれって……」

「いや、正しい」木場が重々しく頷いてみせた。「みっちゃんが言わなければ俺が言うところだった」

「おまえが言うか……」

背もたれに体重を預け、桔平が大きく伸びをする。顔をゆがめ目を向けた窓には、本棟や滑走路からの明かりが淡く浮かび上がっていた。

「結局よ、どれだけ一生懸命何かやったって、あんなだけ伝えるのがヘタクソじゃ自分らが損するだけだ。歴史ん中にや、間拔けな君主に仕えてたせいで出世できなかった名将がワンサカいるんだからよ」木場をちらと見る。「俺やおまえみたいにな」

その言葉に木場がカチンとなる。

「俺のことは知らんが、おまえが何故そうなる。メガルの副局長というポジションがどれだけの影響力を持っているのか知らんわけでもあるまいに。おまえのキャリアからしたらできすぎだ」

「ねえ、分不相応だよねえ」

「いや、そこまでは言っていないが……」

あきれたように桔平が木場を眺めた。

「あのなあ、こんな置き物みたいなポジション、誰が真に受けるかってえの。ハリボテだ、ハリボテ。ハリー・ポッターと皮肉の司令部屋だ」

「マイナス五百点」

「……相変わらずキビしいな、みっちゃん」

木場が同じ顔で桔平を睨めつける。

「例の大臣の辞任騒動はおまえのしわざだというもっぱらの噂だぞ」
「あゝ、ありゃ、あさみだ。あの方不謹慎ですネ、って総理に書面つきつけたらしい。前々から胡散くせえ輩だとは思ってたけどよ、協力資金だ何だ、受け取るもんだけしっかり受け取りやがって、ちっともこっちのために動きやしねえ。しかも陰でうちの批判とかしてやがったからな、信用できねえたらねえ。あさみの奴、鼻で笑って相手にもしてねえと思ってたら、しっかりカウントしてやがった。問題発言で隙見せたら、ここぞってばかりにのどもとかっ切りにいきやがったからな。おゝ、こええ。後から確認の電話がかかっ

てきて、俺は、そうですね、って言ったただけだ」

「タモさんに言うみたいにな？」

「何言ってるんだろな、この娘は……」

「そうですね！」

桔平が苦虫を噛み潰した顔になった。

「所詮あさみの気分次第で、俺達は今すぐにでもどっちにも転ぶ。もっと深く潜りゃ、あいつだって火刈の手のひらの中だ。誰も俺のことを副局長だなんて思ってるねえよ。正規職員の奴らにとっちゃ任命職なんざ、いちげんさんの客将か山師くらいの感覚だろう。しばらく辛抱してりゃ、そのうちいなくなっちまうだろうって具合だよ。んだから、おまえがやったってゴリラがやったっておんなじだ」

「何故俺とゴリラを引き合いに出す」

「ああ、んなの、同類項だからに決まってるんだろが。それともカブって使った俺のミスを指摘してやがんのか！ 相変わらずキビしいな、てめえは！ ツラに似合わない！」

「な！」

「ねえ、あたしは？ やってでもいい？」

「んあ？ みっちゃんはプリティだから一日メック隊長だな」

「やたっ！」

「で、おまえは万年ゴリラだ」

「……」

「今マウンテン・ゴリラと万年をかけてたのに気づいてもらえなかったね」

「あ、そうか！」

「あ、やっぱりかかってなかったんだあ」

「いや、かけてた。すげえかけてた。つゆだくぐらいかけてた」

「やれやれ、ちょっと甘い顔するとこれだ」

「……キビしいな、みっちゃん。かわいいツラしてからに」

「なによ、かわいいことが罪だと言うのなら、私はかわいくなんてなくていい！」

「どんだけ……」

「だって小悪魔ですから。逮捕しちゃうのだっ」エア拳銃をかまえ、フラットな胸を寄せてウィンク。「ちゅうの！」

「いや、今一つキャラが定まってねえようだが……」

「ねえ、そんなのどうでもいいから、ベトコンラーメン食べにいこ。礼也君も呼んでくるね」

「相変わらず、すげえ強制終了っぷりだな……」桔平が椅子の上でふんぞり返る。「まあいいか。ヴォヴァルの反応もすっかり消えちまったし、今度カウンターに出るまでは平常時扱いだ。おまえも行くか？」

「出張はどうなったんだ」

「んあ？」木場ヘアホヅラを差し向ける。「復興資金の全額援助でチャラになった。とある政党の呼びかけに賛同してってことにしてな」

「そうか……」眉間に皺を寄せながら腕組みをした。「被害額も規模も樂觀視できんレベルだし、ことあるごとにこの調子ではやっくれんな」

「おお、キリがねえ。いくらメガルがケタはずれの資金力を持ってたとしても、いつか底をつくだろうよ」

「いっそのこと、山際や海浜地域に決戦用のスペースでも設けて誘導するか」

「ウルトラ広場みたいなか？」

「……なんだ、それは」

「あれじゃねえか。都会のド真ん中で五十メートルの特撮ヒーローと怪獣が、建物を壊さずに飛んだり跳ねたりできるっていう不思議な特設ステージだ」

「ふざけるな！」

「おおっ！」

「おまえは少しくらい真面目に話ができんのか！」

「いや、でも、そういうこったろ？」

「違う！」木場が頭のとっぺんから湯気を噴出しながら、桔平を睨み倒した。「俺が言っているのは、ガーディアンと魔獣が街を壊さずに格闘できるように、街のはずれに飛んだり跳ねたりできるそれ用の特別なステージを設けたらどうだってことだ」

「……同じじゃねえか」

「ぜんぜん違う！」

二人が同時に雅へと振り返った。

「ん？ うゝん……」難しい顔で雅が腕組みをする。「ドロー！」

「ドロー？……」

「お、おお……。まあ、順当なジャッジだな」

「だしよ？」にっこり。「ケンカしちゃ駄目だよ」

「だってよ」

「むゝん……」

「そんなくだらないことでねえ」

「……むゝん」

駄々っ子を見守るような表情で雅が笑ってみせた。

「まったく、もうすぐバレンタインなのにねえ」

「おお。まったく関係ねえけどな」

「スペシャウデエイなのに？」

「スペシャウデエイなのにだ」

「ふゝん……」雅が切なそうに目を伏せる。「今年は桔平さんにあげるのよそうかな」

「いや、なんで……」

「だって」

「だって、おかしい。あげとこうぜ、そこは……」

「むゝん」

「むゝん？……」

第十九話 『プライマル』 2 (後書き)

お読みいただきましてありがとうございます。

暑すぎてガンプラを作る気にもなれません。最初は参考資料のつもりで買い始めたのですが、いつの間にやら手もとにエアブラシマである始末です。もとよりメカものリスペクト(?)の原点がアオシマや小松崎御大だったことを考えれば、今時のギミック満載のロボット達に惹かれないわけがないですね。でも複雑で壊れやすい変形システムより、もっとガチャンガチャンとブンドドしたい感じですよ。そう言えば、昔のものはおおざっぱなのに、妙に想像力をかきたてられたような気も……

またお越しく下さい。

第十九話 『プライマル』 3

その日一年A組では本年度最後の席替えが行われていた。

眼鏡をかけた大人しそうな少年が、窓際の列の後ろから二番目の席へ腰を下ろす。何気なく後方を振り返り、その顔が硬直した。

古閑夕季の姿があったのだ。

目が合い、さっとそむける。

夕季はそれを別段何とも思わずに、いつもどおりつまらなそうに窓の外を眺めていた。

「おう、小川」少年のそばへ来た同級生が小声で耳打ちした。「古閑の前じゃん。よかったねえ」

「バカ」小川と呼ばれた少年が、ちら、と夕季を見やる。

夕季は気づいてない様子だった。

「なんでバカなんだよ。おまえ、前、古閑のこと、いいって言ってたじゃん」

からかうように笑う。その友人も眼鏡をかけていたが、温厚そうな彼とは違って目つきが鋭く、プライドも高そうだった。

するとその少年、小川秋人は情けない顔になり、本音を吐露した。

「そうなんだけど、古閑さんの前って、なんだかすごいプレッシャーを感じる……」

二人が夕季へ目を向ける。

夕季は相変わらずつまらなそうな顔で外を見続けていた。

授業中にも関わらず、秋人は集中力を欠いていた。

後ろにいる夕季のことが気にかかっていたのである。

この選抜クラスにおいて学業成績は二学期から独走状態にあり、身体能力でも学園全体の中で屈指のスペックをたたき出していた。

担任の教師ですら一目おくほどの優等生なのだ。

なのに一向に周囲と溶け込むそぶりを見せない。

それを友人達は、お高いだの、大人ぶっているだのと、陰口を叩く。

しかし秋人は知っていた。

時々夕季が淋しそうに目を伏せるのを。

誰かに話しかけようとして、思いとどまるようにそれをやめてしまうのを。

それから、諦めた様子でつまらなそうに外の景色へ目を向けるのを。

好きというほどの感情ではないにしろ、以前からどこか惹かれるものがあつたことは否定できなかった。

「小川、次やってみろ」

教師の声に秋人の心が引き戻される。が、時すでに遅く、慌ててページをめくるも、どの問題を指しているのかすらわからなかった。

「え、と……」

「二番」

「……」囁き声が聞こえ、秋人がちらと目線に向ける。

あいもかわらず、夕季は窓の外へ顔を向けたままだった。

「……二番」

「正解」教師が黒板へ向き直る。「ボーっとしとるなよ」

「はい……」席に座り、秋人が小声で夕季に礼を告げた。「ありがとう」

「……」

「……」

「……うん」

横を向いたまま、照れたように夕季が受ける。

秋人がほっと胸を撫で下ろした。

昼休みに秋人が教室へ戻ると、自分の席に他のクラスの生徒が座

っていた。

見覚えのある顔。

G組の穂村光輔だった。

光輔は明るい性格で誰とでもわけへだてなく接したので、A組でもそこそこ知られた存在だった。

秋人の机へ背中を向けて座り、楽しそうに夕季へ話しかける。夕季からのレスポンスはそれほどではなかったが、時おり顔を向けられるさまに、秋人はうらやましさを否定できなかった。

光輔が夕季と何を話しているのか知りたかった。自分と夕季との接点をまるで思いつけなかったからである。

「でさ……」

「光輔」

「？」

夕季が軽く目配せをし、光輔が振り返る。

光輔と秋人の視線が合致した。

「そこ、その人の席」

「え、マジ」光輔が立ち上がり、申し訳なさそうに秋人へ笑いかけた。「ごめん。勝手に座っちゃって」

「いや、いいよ、別に……」低姿勢の光輔の態度に、かえって秋人が恐縮する。「いいよ、まだ座ってても」

「いやいや、そんな」

「次の授業、始まるよ」

「おお、そうだ。次は体育だった」ポンと手を叩き、夕季へ顔を向ける光輔。「その前も体育だったけど」

去り際に夕季へ念を押した。

「んじゃ、さっきの話、考えといてよ」

「……わかった」

淡々と返答し、夕季がまた窓の外へ視線を移す。

それを別段気にも止めずに光輔は、はは、と笑ってみせた。

席へ着こうとする秋人をおもしろそうに眺め、光輔が気さくに声

をかけた。

「こいつの前ってさ、緊張するだろ？」

「！」

「光輔！」

「こうやってすぐ睨んでくるしさ」

バツが悪そうに夕季が顔をそむける。

秋人はどう対処したらいいのかもわからずに、苦笑いするだけだった。

「あ、穂村君」

女生徒の一人が光輔に声をかける。その隣の生徒も嬉しそうに手を振ってきた。

よそのクラスの人間なのに、光輔は秋人よりはるかにこのクラスにとけ込んでいた。

それをねたましげに眺める輩もいる。秋人の友人達もその一部だった。彼らは光輔を上から見下ろし、頭が悪いくせに、と虚勢を張る。だが秋人は素直にそれをうらやましいと感じていた。

自分がないものを持つ光輔を恨めしげに眺め、秋人が何も期待せずに着席する。

「あ」何気なく目をやった夕季の携帯電話に、思わず声をあげてしまった。

ゆっくりと顔を向ける夕季。秋人の視線の先がストラップのフィギュアであることに気づき慌てて手で隠し、照れたようにそっぽを向いた。

「……それって、エルバラだね」

「……」振り絞るような秋人の声に、静かに夕季が向き直る。秋人が真顔を向けていた。

「古閑さん、エルバラ好きなの？」

「好きってほどでもないけど……」夕季が消え入りそうな声で呟く。途端に秋人のテンションが急降下していった。

「あ、そうか……。あれ少女マンガだけど結構おもしろいかなって

思ったりしてたんだけど……」

気まづくなり秋人が前を向く。

すると時間差で夕季の小さな声が追いかけてきた。

「小川君も読んだことあるの？」

秋人がおそるおそる、ひくつく顔を向ける。

初めて夕季に自分の名を呼ばれたのが嬉しかった。

「……ってかさ、姉ちゃんが途中まで買ってたの、いらないからってくれてさ。捨てようかと思ってたんだけど、読んだら結構おもしろくてさ。で、自分で続き買っちゃったりさ。立ち読みとか恥ずかしいから、コミックスでしか読んでないけど。だから俺、今どうなってるか知らないし」

緊張のあまり舞い上がり、とっちらかってまとまりのないことばかりを並べ立てる。

それでも夕季は表情を変えることもなく、秋人の顔に注目し続けていた。

それが秋人へさらなるプレッシャーを与える。

「古閑さんも持ってるの？」

夕季が首を振った。

「コンビニで立ち読みしてるだけ。一度だけマンガ喫茶で全部読んだけど」

「ああ、ふうん……」真っ白けの頭のまま、考えるそぶりでふんふんと何度も頷いてみせた。「よかったら、あげよつか？」

「……」

何気ない一言に、一瞬にして場の空気が入れ変わる。

いきなり『あげる』はないだろう、と秋人は己の失策を痛感した。

「あの、どうせもらいものだしさ。俺、何回も読んでるし、結構たまってきたし、捨てるのもったいないし、女の子が読んだ方がいいかと思うし、……別にいらないものもらってってわけでもないんだけど……」ボロボロだった。「ははは……」

「……」

「……は」

「……」

「……」

「貸してもらえるのなら、お願いしたい」

「！」

秋人の中で何かが弾けた。

「あ、明日持ってくるね」

「……いいよ、急がなくても」

「あ、じゃあ、忘れなかったら」

「……うん」

「……」 うん、と気合を入れ直す。「オンドレって死んじゃったの？」

「……死んでないよ」

「そっか。ちようどいいところで終わっててさ。コミックスって半年くらい遅れてるし。俺みたいなのが少女マンガのコーナーとかいると、いかにもって感じだしさ。あ、ゴメン、ウザかった？」

「……別に」

「あ、よかった。でさ……」

「……」

「おーい！」

昇降口で夕季が振り返る。

走り寄る光輔の姿が見えた。

「夕季、一緒に帰ろ」

「……。今日はちょっと用がある」

「ええ！ 友達もいないのに！」

夕季の目つきが険しくなる。

「……いや、いるよな、友達。俺とか、雅とか、あと……、礼也とか……」

「……」

「はは、は……」

「……。部活は」

「休み」

「休んでばかりじゃない」

「うちの部、確かにあんまり真剣さが無いみたいだな。バスケットや野球部みたいに期待されてないし、体育コースの人間も少ないし。でも大会前にはちゃんと練習するよ」

「勝てるの」

「勝てない」

「……。それって駄目だと思う」

「でも今度のチームには俺がいるんだぜ」えへんと胸を叩く。

「……。レギュラーになれたの」

「まだ」

「……」

「んじゃさ、おまえがマネージャーとかになってビシッと……」

「……」

「……冗談だけどね」

「あたりまえじゃない」

「はは……」

そこへ光輔の友人達が現れた。

「おお、光輔」

スタイリッシュな優男、羽柴祐作だった。

「おう、祐作」

祐作が夕季に気づく。

「お、古閑ちゃんもか。おっす」

「……」

祐作の隣で、ツンツンすだれ頭の曾我茂樹が背筋を正した。

「あ、古閑さん、こんにち……」

「おう、光輔。今日部活ないんだろ」

「ああ」

「一緒に帰ろうぜ」

「ん、ああ……」

光輔がちらと夕季を見やる。

それを別段気にもせず、こともなげに祐作は重ねてきた。

「古閑ちゃんも一緒なんだろう。ちよつと待っててくれよ。すぐ来るから」

「あ、古閑さ……」

「あ、古閑ちゃん、また一緒に遊びに行こうな」

「あ、あの……」

「おい、行くぞ、茂樹」

「な！」

後ろ髪引かれる茂樹の手を無理やり引き、祐作が去って行く。

残された二人は、ぼう然とその姿を追っていた。

夕季が光輔を見つめる。

それに光輔が振り返った。

「何？」

「……。何も……」

「また一緒に遊ぼうって」

「……。ふ、うん……」

「あ、また……」

「そんな顔してない！」

「……どんな顔？」

「……別に」

「……。別に？……」

「……」

「夕季」

雅の声に二人が振り返る。

「あ、光ちゃんもいたんだ」

「おいっす」

「遅いから来ちゃった」

「今、そっちに行こうと思ってた」

「あ、なんだ。やっぱり雅か」

「何？」 きょとんと光輔を見つめる雅。 「やっぱりって？」

「いえ、何も……」

夕季が思いきり光輔を睨みつけていた。

第十九話 『プライマル』 4

彩り鮮やかな街並みを光輔は軽やかに歩いていた。

光輔の隣には雅と夕季の姿が見える。

三人そろっての下校は珍しかった。

バレンタインフェアに浮かれる街の風景を、浮かれまくる雅がスカートをひるがえしながら飛び跳ね振り返る。

「今から夕季と義理チョコ買いに行くんだけど、光ちゃんも行く？」

「荷物持ちで？」

「うん」朗らかに笑う。「帰る時、一つ持ってたってもいいから」

「……なんか切なくね？ それ」

「おんなじ、おんなじ。今日か明日かの違いだけだよ」

「明日も会うのに……」

夕季がちらと光輔を見やった。

「羽柴君達、よかったの？」

「ん？ ああ。断つといた」涼しげなまなざしを差し向ける。「夕季が嫌がってるからって言ったら、納得してた」

「……」

「ねえ、嫌だよねえ」

「……」

「茂樹は悲しそうな顔してたけどさ。あいつはまだおまえの本性とか知らないからさ」

「……」真顔を雅へと向けた。「みやちゃん、こいつにもチョコあげなくちゃいけないの？」

「こいつって……」

引き気味の光輔を捨て置き、雅が楽しそうに笑った。

「一応ねえ、義理だから。一人だけあげないと嫌な娘って思われち

やうし」

「どうでもいいけど」

「一番安いのがあげとけばいいじゃん。箱が潰れちゃったやつとか」
「うん」

「いや、なんか、女の子の嫌な部分があんな盛りなだけ……」
ドン引きの光輔。

「まあ、夕季。明日は特別な、スペシャールウデエイだから」

夕季からの反応が得られないまま、雅がさらに押し込もうとした。

「スペシャールウデエイ」

「……」

「えー、なんでそんなに上から目線なの」

「いや、俺には困ってるようにしか見えないんだけど」

腕組みをし、頬を風船のように膨らませて、雅が夕季を睨みつけた。

「もういい。夕季なんてもう一緒にラーメンとか食べにいったあげないから。おなががすくまで」

「……」

「またすぐそうやってスネた顔してからに！　かわいい！」

「いや、俺にはすごく悲しそうな顔してるようにしか見えないんだけど……」

「もう、光ちゃんはすぐそうやっていじわるなこと言うてからに！
かわいい！」

「いじわる……、かわいい？」　光輔が悲しそうに眉を寄せた。「お
まえってクラスで浮いてない？」

「何をゆー！」

「おおっ！」

「バイ、ショージムラカミ」

「……びっくりしたな、もう」

「おお、シンスケできたか、やるな、光ちゃん」

「いや、何言ってるの……」

「光ちゃんにひどいこと言われた！ ショック！」

「……あ、確かに言い過ぎたかも」

「確かに浮いてるけど！」

「やっぱ浮いてんじゃない……」

「そんなことより何より、光ちゃんなんかに言われたのがショックなの！ びっくりしたなあ、もう！ 光ちゃんのくせになくまいきだぞおー！」

「誰の真似？……」

「もういこ、夕季。ラーメン食べにいこ」

「う、うん……」 夕季がほっとしたように頷いた。

「いいの！ それで！」

「……」

「あ、今日、光ちゃんのおごりね」

「え、なんで俺が！ ……て、俺も誘われてたの？」

「ええ！ 大丈夫なの？ 桔平さんなんてメールすると仕事抜け出してでもおごってくれるんだよ。呼んでもないのに来る時あるし。ウザす。もういい、桔平さん呼んじゃうから」 楽しそうに振り返る。

「あ、光ちゃん、何食べたい？」

「いや、俺はおなかがいっぱいで。おなかよりむしろ胸が……」

「夕季は？」

「あたしもやっぱり行くところが……」

「じゃ、ベトコンラーメンだね」

「こいつ、聞く耳ないな……」

「……」

「えっと、桔平さんのメアドは……」 メールを打つ。一分とたたずに返事がきた。「早っ！ すぐ来るって。すごく大事な会議中だけど」

光輔と夕季が顔を見合わせた。

「……。あの人って貯金とかあるのかな」

「たぶんないと思う……」

篠原みずきは一人で洋菓子店のワゴンセールを吟味していた。
かたわらに車両が停まり、中から下品な顔がのぞく。

桔平だった。

「お、光輔の彼女じゃねえか」

カアツと顔を赤らめ、弾かれたようにみずきが振り返る。
すると助手席に座る雅がたしなめにかかった。

「そういうこと言っちゃ駄目。だから桔平さん、女の子にもてないんだよ」

「はっはっは。相変わらずみっちゃん、平気で男心を真っ二つに引き裂きやがるな」

「うん、天然だから仕方ないよ」

「天然なのに自覚してんだな！」

雅は光輔らと別れ、荷物運び兼、お食事代係として桔平を呼び出したのである。

二人に近寄り、みずきが頭を下げる。

「あの、こんにちは」

「今からベトコンラーメン食べに行くんだけど、一緒に行く？」

「いえ、まだ用があって……」

「じゃ、後ろに乗ってね」

「人の話、聞いてないですね……。……ベトコン？」

「おいしいんだよ。また今度行こうね」

「あ、はい……」

みずきの持つきらびやかな包み紙へと目をやる雅。

「光ちゃんにあげるチョコレート？」

「！」

「いや、みっちゃん。人のこと言えねえだろ。デリカシーねえなあ」

「ええ、桔平さんには負けるよお。デリカシー・ゼロだもんね。」

カロリー・オフみたい。さすがってとこ」

「なんか、けなされてるみたいだな」

「明らかにけなしてるんだけどねえ」

「あ、やっぱそうか！」

二人にぐいぐい押し込まれ、言葉もないみずき。それを見て雅がおもしろそうに笑った。

「あ、この人、桔平さん。ひいらりんでいいよ」

途端に桔平が嬉しそうに躍り上がった。

「あのね！ いいけどね！ 女子高生が俺のことそう呼んでくれるならさ！」

「やったね、ひいらりん」

「おう、まあ……」

「無理です」

「無理か！ そうか、無理か！」

「残念でござる」

「かたじけねえ……」

しゅんと肩を落とす桔平。気を取り直して、みずきと向かい合った。

「名前、何だっけか？」

「あ、篠……」

「みずきちゃんだよ」

みずきの存在をさておき、二人が勝手にかけ合いを続ける。

「呼びづらいな。よし、ニックネームつけてやるよ。俺はネーミングの達人だからな。こう見えてもネーミング・センスの塊なんだぜ。藤原のカタマリだ！」

「今のでセンスゼロってバレちゃったね」

「俺こそがネーミング・ハンターだ！ またの名を、ネーミング娘ともいう。娘、って、オッサンなのになあ！」

「オッサンなのになえ」

「ちなみに歴代の最高傑作は、親友につけた『鼻毛大臣』だ」

「もう最悪だあ」

「……」みずきの顔から血の気が失せていく。「あたしはそのまん

まの方がいいかな……」

「そのまんまみずきか？　なんだかネガティブすぎんだろ。思い切
って攻めていこうぜ」

「じゃ、あたしからね」

「お、先攻はみっちゃんか。ところでいつの間に対戦形式になっ
んだ？」

「……」

「ん〜と、みずきちゃんだから、みずぴーとかかな」

「なんだそりゃ、ぴー、って。ぴーとか、芸がねえだろ、芸が」

「そう？」にんまり笑う。「はい、次どうぞ」

「みずぷー、ってのはどうだ？」

「ぴーがぷーに変わったただけだね。フリくさいなとは思ってたん
だけど、思った以上に芸がなかったね。ちなみに自分はペーなんだ
よね」

「おう。ぴー、ぷー、ペーはあだ名の基本だ」

「ペーは名前なのに一緒になっちゃったんだね」

「ガッツリな」ドヤ顔でみずきへと振り返った。「よし、どれでも
好きなオプションを選べ」

「……」ひと時のフリーズ。「ええー！」

「あれ、不評！」

「納得の結果だよねえ〜」

夕季は光輔らと別れ、ドラグノフの入院する病院へと向かってい
た。

そこはメガルの系列経営下にあり、多額の資金援助のもと、最新
の設備と環境が完備されていた。過去の反省を活かし、緊急時にお
いても柔軟に対応できるシステムと、重要人物を外敵から守るセキ
ュリティが重厚に構築されていたのである。

メガルの敷地内にある病棟も一通りの設備が整ってはいたが、あ
くまでも緊急的、簡易的なものであり、静養のためには環境面にお

いてもこちらの方がはるかに優れたものだった。

夕季が個室の入り口でドアをノックする。

ハンガードアを開き顔を出すと、ドラグノフの嬉しそうな笑顔が出迎えた。

「ユウキ、来てくれたのか」

充分な陽が射し込み、十畳以上もある明るい室内を、きよろきよろと夕季が見回す。

小物入れの上にはプリムラ・ジュリアンの花が飾られ、ミーシャの手書きで『パパへ、早く良くなって』とメッセージが添えられてあった。

「ミーシャは？」

「さっきまでアレクシアと来ていたんだがな。もう一度呼ぶか？」

「いい」ドラグノフにうながされパイプ椅子へ腰かける。「いつ退院できるの」

「ん？」半身の体勢で、かたわらの小物入れに置かれてあった箱を夕季へ差し出した。「あと二週間くらいか」

箱の中から小さな包みを夕季が取り出す。

高級モナカだった。

「お茶ならそのポットの中にある。すまないが勝手にやってくれ」

「ありがとう」

ポットから茶を注ぎ、紙コップの一つをドラグノフへと手渡した。

「すまない」

「二週間で治るの？」

「完治という訳にはいかないが、アレクシアがまだ動けるうちに向こうへ行っておきたいしな」

包みを開き、ドラグノフがうまそうにモナカを頬張る。

「ふん……」夕季が淋しそうに目を伏せ、かぷっとモナカへ食いつく。「甘……」

「うまいだろ。日本茶とのマッチングは最強だ。向こうへも送らせるよう、キッペイに頼んでおいた」

「ふうん……」上目遣いにドラグノフを眺め、茶をすすする。「……苦」

ドラグノフが表情を和らげる。我が子を見守るようなまなざしを夕季へ差し向けた。

「そんな顔をするな、ユウキ。私もミーシャも君と別れるのはつらい。だが、離れているからこそ得られるモノもある。君もミーシャも、きつとさらに成長できるだろう」

「……。お父さんみたい」

するとドラグノフがあきれたように笑ってみせた。

「君のパパはオートリだろう。私も主張したのだが、それだけは譲れないらしい。私は君のオジさんということに決まった。一見外国人風だが生まれは名古屋市だ」

「……いつの間に」

「こないだの会議でそう決まった。コマダとミナミザワが君のお兄さんを名乗り出ていたな。オーヌマは君の担任の先生で我慢するそうだ。クロサキは近所の危ないアイドルオタクという設定で落ち着いた。給料のほとんどをグッズにつぎ込み、同じCDをジャケットごとに何枚も買うれしい。彼だけリアルと設定にまったくギャップがない」

「……。もっと、仕事の話とかしないの？」

「仕事の話は五分で終わった。それから延々一時間君の話だ。キバを君の義理の兄ということにしたら、茶を持ってきたシノブがパニックになっていたぞ」

「……」

「君は彼らに人気があるな。うらやましい」

夕季が顔を赤らめる。ドラグノフを睨むように顎を引き、ズズと茶をすすった。

「ちなみにキッペイは、もっともできの悪い、父親違いの兄ということで全員が納得した」

「……できの悪いというところまでは納得できる」

「ハラシヨ―だ！ ユウキ。彼だけオートリと血がつながっている
そうだ」

「……」

ドラグノフが表情を正す。

「この間は大変だったな」

ヴォヴァルのことだと気づく。

夕季は先のヴォヴァルとの対決を思い返していた。

＊

ヨロイ騎士を思わせるヴォヴァルの風貌が、太陽の光に反射して
妖しく揺らめいていた。

白銀の翼を颯爽と展開し、空戦特化型ガーディアン、タイプ・ス
リー、エア・スーペリアがヴォヴォルへと挑みかかっていた。

第十九話 『プライマル』 5

魔獣との間合いの手前で踏み止まり、細身の身体を覆いつくすほど巨大な翼を展開し、エア・スーペリアが滞空した。

ヴォヴァルは巨大なランスを右の脇にかまえ、左手には小さな盾をビールジョッキを持つように持ち上げている。

微動だにしないそのたたずまいが、警戒心のみを上積みさせていった。

「どうする、夕季。動く気配がないけど」夕季の左側から光輔がうかがう。「なんか、不気味だな」

反対側から礼也が身を乗り出した。

「んなの決まってるんだろ、いきなり必殺技だ！」

夕季が顎を引く。

数千メートル下に山凌市の街並みが浮かび上がっていた。その周辺には、山、海、田畑が幾重にも取り囲む。

瞬時にもっとも影響を及ぼさないであろうポイントと進入角度を割り出し、百手先の戦略へとつなげた。

「……探ってみる」

「てめえ！」

両手を腰の辺りから開き、ガーディアンが手首を上へ向ける。まるで相手をしなやかに抱擁しようとするかのようにだった。

が、夕季が眉間に力を込めるや、その誘いはまやかしかったと気づかされる。

裏返った手首の付け根から、鋭い針のような光がヴォヴァル目に向けて撃ち込まれたのである。

ローズ・ピラスと名づけられたその攻撃はエア・スーペリアの基本技の一つで、手首から一直線に射出されるレーザー状の針が遠方

の敵をも正確に貫く仕様だった。

ヴォヴァルの表層に真っ赤な光が吸い込まれていく。

その刹那、鋼色の全身が激しく発光した。

目くらましの後、攻撃を受け、逆にガーディアンがのけぞる。夕季の動体視力と反射神経の良さ、エア・スーペリアの特化したスピードにより、かろうじてその直撃から免れられていた。

「なんだ、ありゃ……」

ちりちりと焼かれる肩のラインをなぞりながら、惚けたように礼也が呟く。

その後を光輔が受けた。

「……速すぎて何も見えなかった」

ヴォヴァルは先と同様、その場で身動き一つせずに滞空していた。夕季が唇を噛みしめる。

アクセスの瞬間を見逃してしまっていた。暴力的な光の照射に邪魔をされたとは言え、攻撃が避けられたのか、弾かれたのか、はたまた吸収されたのかをまったく確認することができなかった。それは探るための一手が無駄に終わったことを意味していた。

引き続きヴォヴァルに動く意思がないことを確信し、夕季が次の行動を選択した。

「次、行く」

そう言うや、ガーディアンの手首がせわしく展開し、裏側から片刃の曲がりナイフが飛び出してきた。それぞれの手でつかみ、クロスしてかまえる。

リリィ・オブ・ザ・バレイと呼ばれるブーメラン状の一对の刃物は、羽根のように軽く薄いのが、この世のあらゆる物質を粘土のごとくに切り裂くスペックを持ち合わせていた。

司令室で遠方から中継される画面を凝視し、桔平が椅子を弾き飛ばしながら立ち上がった。

「やめろ、夕季！ もっと慎重にいけ！」

桔平の怒声も心奥まで達せず、無防備状態のヴォヴァルヘガーデ

イアンが切りかかっていく。

刃先がヴォヴァルの間合いを侵す頃合いで、再びその全身が太陽のように発光した。

「うあ！」

「ぐお！」

弾き飛ばされ、空中で踏み止まるガーディアン。

叫び声をあげ身をそらした二人に対し、夕季は瞬きもせずその状況に抗い続けていた。

胸もとの切削痕を畏怖するように眺め、こめかみを汗が伝う。

それは一つの仮定を立ち上げたことを意味していた。考えたくない結末が脳裏をかすめ始める。

だが夕季はそれを確定へと導かねばならなかった。

「次」

夕季が静かに告げると、ごく自然に光輔と礼也が口もとを引きしめた。

「必殺技だね」

「やる気か、てめえ」

それに夕季は答えない。

ただ真っ直ぐにヴォヴァルを見据え、淡々とそれを口にした。

「ポジションチェンジする」

「はあ！」礼也が語気を荒げる。「何言ってやがんだ。このままのが威力でけえだろうが！　なんでわざわざ……」

「五十パーセントの出力で、攻撃した後、すぐにブラクトで防御することをイメージして」

「……」

有無を言わせぬ夕季の真剣な表情に、二人が思わず息を飲む。

言われるままにポジションチェンジを終えると、サイドの光輔と礼也の位置と、胸部の装飾部分や全身に走り抜けるラインの発光色が入れ替わっていた。

攻撃主体の陸竜王への依存から、防御に重きを置いた海竜王から

のサポートを選択したためである。

「行く」

「おう！」

「おっし！」

ヴォヴァルよりさらに上昇し、両腕を大きく広げ、ガーディアンが反り返る。胸の装飾部分がコロナのごとくに散乱光を放ち、バチバチと音を立てハレーションし始めていた。

「やめろ、てめーら！ 無茶すんじゃねえ！」桔平がスタンドマイクを握りしめ絶叫する。こめかみを嫌な汗が伝い落ちた。「引き返せ！ そいつはなんかヤベえ！」

『……まだ』

「んだと、おい！」

前だけを見つめる夕季のまなざしは揺るがない。

『おい、夕季、いい加減に……』

言う間もなく、鋼板に集束した光の塊はパルス波を従えながら、稲妻のごとくに急激に敵へと襲いかかっていった。

ヴォヴァルの発光を待たずに、すぐさま夕季が叫ぶ。

「礼也！ 光輔！」

一瞬のうちに、白銀の翼がガーディアンを巻き込むように包み込む。ブラクトと呼ばれるその防御法は、まるでチューリップのつぼみのようなだった。

直後に凄まじいエネルギーがその表層へと差し向けられた。

強固なつぼみをくの字に折り曲げ、ガーディアンは数千メートルも吹き飛ばされ、落下していった。

「ぐおっ！」

「ああっ！」

顔をゆがめインパクトに蹂躪される礼也らに対し、夕季は活目したままそれを受け止めていた。

人影途絶えた沿岸部の集落地域へ突き刺さり、大地を揺るがし、大穴を穿つ巨大なつぼみ。

防御を解き夕季が空を見上げると、はるか彼方の高空では無傷でそこにとどまり続けるヴォヴァルの姿があった。

無力なる人類を、哀れみのまなざしで見下ろす優越者のごとくにやがてヴォヴァルのシルエットが跡形もなく消えてなくなる。

消滅ではなく、カウンターの待機を示すゾーンに針をとどめながら。

安堵のため息をもらす光輔らとは別に、夕季の脳裏には複雑な想いが渦巻き始めていた。

夕季の中で確信とともに一つの感情が湧き上がる。その深層までたどりつくことは容易だった。

もはやヴォヴァルが、自分達を敵とすら見なしていないということも。

『バカ野郎、言わねえこっちゃねえ！　おい、大丈夫か！』

桔平の焦ったような呼びかけだけがいつまでも耳の奥にこだましていた。

『おい、しっかりしろ、おい……』

＊

「どうした、ユウキ」

ドラグノフの呼びかけに夕季の心が呼び戻される。

「別に」不思議そうに覗き込むドラグノフにちらと目を向けた。「ちよっと、ぼーっとしてた」

「それは見ればわかる……」

「……」顔を伏せ、膝の上でぎゅっと握りしめた拳を夕季が見つめた。「手も足も出なかった」

「仕方がない。今度はうまくやれ」

「……うん」

すると安心したようにドラグノフが、ふっと笑った。

「キッペイが君のことを心配していたぞ。私もそうだが。君は危な

つかしくて見ていられないそうだ」

「……」

「君は大人なのか？ 子供なのか？」

「……何それ」

「並の大人では到底太刀打ちできないほどの甲斐性と精神力を持ちながら、時おり、まるで十七歳の少女のような感性が見え隠れする。まったく不思議な感じだ」

「……」

「まあ、十七歳だと言っても誰も信じないだろうがな」

「……十六だけど」

思いつめたような表情で、凝視する拳を夕季がさらに強く握り締めた。

「……。信用……」

「？」

「……なんでもない」

「……」

ドラグノフの顔を見つめ、神妙な様子で夕季が口を開く。

「ねえ、もし相手が自分からは一切攻撃してこないとしたら、どうすればいい」

その問いかけにドラグノフはしたり顔で即答してみせた。

「何もしなければいい」

「……」

「相手にその意思がないのなら、無理に戦う必要はない」

「……。放っておけば、いずれミーシャを殺しにくるってわかっていても」

「その時はミーシャを守ればいい」につこり笑いかけた。「簡単なことだ」

「……」

狐につままれたような表情で硬直する夕季をおもしろそうに眺め、ドラグノフはモナカを丸ごと口へ押し込み、講釈を続けた。

「何も思い浮かばない時はシンプルに考えることだ。何重にも張り巡らされた策が、単純に押し込んでくるだけの相手に敗れることもある……。ハラショーだ！ モナカ！ ……大事なのは相手の精神的な質量に圧倒されず、挑み続けることだ。ん、っぐ！」夕季から茶のおかわりを受け取る。「すまない。強い相手と戦う時、わたしがまずどこを狙って攻撃するのか、わかるか？」

夕季が首を振った。

「心だ」

「！」

「一撃で相手の心をへし折れば、それ以上戦わずにすむ。こちらも無駄なダメージを受けなくてもすむからな。策をろうする者にとって一番厄介なのは、諦めない相手だ。叩いても叩いても向かってくるファイターだ。己を信じ、他者を信じ、すべてを犠牲にしても守り抜こうとする信念だ。ゲリラ戦などで物量に勝る大国が、旧式の装備しか持たない小国を攻め切れないのも、その覚悟の差だろう。抗わなければ未来のない身の上と、安全な場所から数式のみで作戦を練り上げる立場の相違。自分達の自由を勝ち取るために決して振り返らない者と、戦うこと自体に疑問を感じながらトリガーを引く者の温度差は大きい」

「……」

「諦めずに挑み続けていれば、やがてうつすらとでも見えてくるものもあるだろう。完璧でない限り、必ず綻びはある。針の穴ほどの綻びだとしてもな」

「……」ドラグノフに注目したまま、夕季がぐっと顎を引く。「心も弱点もない完璧な相手だったら？」

「その時は諦めろ」

「……言っていることが違う」

ドラグノフがおもしろそうに笑った。

「どんなに頑張っても不可能は可能にはならない。覆せるのは限りなく不可能に近い可能性までだ。それがかなわなくとも、誰も君達

を責めたりはしないだろう。その責任を他人に押しつけるような人類ならば、滅んでしかりだ」

「……すごいこと言う」

「だがもし相手が完璧な防御を誇っているだけだとすれば、チャンスが一つだけある」

「！」

夕季の顔つきが変わったことに気づき、ドラグノフがにやりと口もとをつり上げた。

「相手がアクションを起こす瞬間を見逃すな。防御以外の行動を起こす時、そこに必ず隙はできる。焦りは禁物だ」表情を和らげ、笑う。「キッペイもそう言うはずだがな」

「……」

「彼も私が戦いたくない人間の一人だ。とにかくやり方がセコくて汚い。軍隊式に言えば、あのクソ野郎だ。おっと、口がすべった。彼には黙っておいてくれ、向こうへモナカを送ってもらわなければならない」

「……」ドラグノフの顔をしげしげと見つめながら、夕季がカバンから小さな包みを取り出した。「これ」

途端にドラグノフの目尻がだらしなく下がり始める。

「お、私にくれるのか。チョコレートだな」

「早いけど。ミーシャには明日メガルで渡すつもり」

「そうか。気がきくな。ギリでもありがたい」しばらく嬉しそうに包みを眺め、夕季へ目を向けた。「キッペイにも渡すのか？」

すると夕季が顎を引いてかまえた。

「……あの人とはそういう感じじゃないから」

「そうか」夕季からのプレゼントをまじまじと眺める。娘を気遣う父親のような顔だった。「これは彼には見せられんな」

「……。だって、絶対変なこと言うし……」

「そんなことはないと思うがな」

「……」

ドラグノフが、ふっ、と笑った。

「きつと喜ぶぞ。ああ見えて彼は淋しがりやだからな。私が鼠なら彼は兎だ」

「……二人ともそんなにかわいくない」

「……。そうか……」淋しそうに窓の外へ目を向ける。「君はキッ

ペイが言っていたとおり山猫だな。山ネコ娘だ」

「……うるさい」

第十九話 『プライマル』 6

バレンタインデー当日。

帰りしな、靴箱の扉を開けた夕季の目の前に飛び込んできたのは、チョコレート山だった。

同学年の女子からだけでなく、上級生からのものも見受けられる。大半は礼也のクラスの女子からのものだったが、同級生からのそれはいくつか見受けられたのが夕季には意外だった。

滑り込んで来た光輔がそれを目の当たりにし、愕然となった。

「……負けた。がびーん……」

夕季が振り返る。

カバンの中をさばくり、真顔で光輔がチョコレートを突き出してみせた。

「俺、こんだけ」合計六箱。「おまえのクラスの娘からも貰ったのに……」

顎を引き、夕季が光輔を睨みつけた。

「……なんで睨むの」

「……睨んでない」

「……」

がつくりと肩を落とし、光輔が背中を向けた。

「あいつら、どんだけ貰ったのかな。祐作には負けるだろうけど、茂樹には勝ってないかな。俺、男子クラスなのに健闘した方だと思っただけど……」何気なく振り返ると、睨みつけてくる夕季と目が合った。「……だから、なんで睨むの」

「……」

「……」

「……」

光輔の目を見据えたまま、夕季がカバンの中から小さな箱を取り出す。それから機械的に、ぐい、とそれを光輔へ差し出した。

「……。そんなことだろうと思ったけど」

「……いないならいい」

「いや、いるいる」奪うように箱をつかみ取り、光輔が嬉しそうに笑った。「さんきゅー、夕季」

「……」

「光輔」

ふいに後ろから呼びかけられ、光輔が振り返る。

茂樹だった。

「あ、茂樹」たった今貰ったばかりの七個目のチョコレートを、自慢げに差し向けて笑う。「夕季から貰っちゃった」

「あー、おまえ！」夕季の方をちらと見て、茂樹がギリギリと光輔を睨みつけた。「いいなー！」

夕季が恥ずかしそうに顎を引く。

「あーもー、おまえ、それ俺によこせよ！」

「なんでだよ。おまえだって篠原達から貰ったじゃんか」

「もーう！」

「なんだ、もーう、って……」

先代生徒会長にしてミスター山凌学園、衣浦卓也は、廊下の陰から角の向こう側を何度も確認していた。

下校の挨拶をしてくる女生徒達に愛想をふりまいた後で、ターゲットの姿を見定め、さっと身を隠す。かしこまった姿勢で何度か髪を撫で、身だしなみを整え、通り抜けた人影に最高の笑顔で振り向いた。

「やあ、今帰りかい」

キラリ白歯を光らせた衣浦に、はっとなった表情が振り返る。

桐嶋楓だった。

「よかったら一緒に……」

「すみません」着信も完了しないうちに、楓がやつつけ返信を叩きつけた。「今急いでますから」

振り返ってから今に至るまで、楓は前傾姿勢のままだった。

停車する素振りを微塵も見せないその様子に、衣浦が思わず身のけぞらせる。

「……あ、そう」

「すみません！」

足早に立ち去った語尾は、ドップラー効果をともないながらその背中ともども彼方へ消え行く。

残されたのは何も得られずに立ちつくす、バレンタインダーの三年連続タイトルホルダー、衣浦の悲しげな姿だけだった。

楓は隣の校舎から礼也の姿を見かけ、何とか追いつこうとしていた。

昇降口の手前で背中を視界に収め安心したところを、ふいに礼也が振り返り、ビクッと体をすばめる。

「なんだ、おまえも帰るのか」

「……うん」

「部活は」

「……お休み」

「ほおん。ま、いっけどな」

「……」

「んじゃ、帰るか」

「いいけど……」ひくつく口もとを悟られぬよう、うん、と楓が引きしめる。「……フレール寄ってく？」

「んにゃ」ぼりぼりと後頭部をかきながら大あくびをした。「昼間寄ったからいいわ。オバちゃんからチョコ貰っちゃった」

「……そう」

元気なさげに楓がうつむいた。

道中、礼也のたれ流す意味のない悪態が、楓の耳もとへこだまし

続けていた。

「ったくよ、バレンタインなんてくだらねえ。どいつもこいつも何浮かれてやがんだろうな」

「……」情けなく眉を寄せ、楓が覇気のない声をもらす。「たくさん貰ってたくせに」

「ああ！」楓をじろりと睨みつけた。「おかしいじゃねえか。からかってやがんのか？ 去年は名前がねえちっこいのが一個しかなかったくせによ。嫌がらせか。ねえ方がマシだって。呪いじゃあるまいし。うまかったけどよ」

「……」

「まさか、てめえじゃねえだろうな」

「！」

「な、わけねえか。ツンケンのくせに、んなことしたらキャラ違いだもんな」

「……」

「こんなチョコばっか食えるかっての」パンパンに膨らんだカバンを恨めしそうに眺めた。「おい、やろうか」

「！ どうして私が貰うの！」

「……いや、てめえじゃなくって、チビどもにやれって」

「……」楓が口をつぐむ。またもや、口もとがひくつき出していた。

「……駄目だよ。勇気出して、くれた人の気持ちも考えてあげなくちゃ」

「どう考えろっての。顔も知らねえ奴ばっかだってのに」

「……」

「ったくよ、チョコなんざどうでもいいから、メロンパン渡す儀式に変えろっての」

「それで誰得なの……」

はっ、と思い立ち、楓がカバンの中からメロンパンを差し出す。途端に礼也の顔が光り輝いた。

「お、プレミアムじゃねえか。俺が行った時や、もうなかったぞ。」

朝イチで行かねえと間に合わねえってのに、おまえよく買えたな」
「遅刻ギリギリのタイミングだったけどいちかばちかで」悲しそうに楓が顔をそむけた。「慌てて走ってたら途中で転んで、結局遅刻しちゃったけどね……」

「いただき」礼也が嬉しそうにメロンパンにかぶりつく。「てめえからのチョコがわりだな」

「……」

その時、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「レーヤ」

礼也が顔を向ける。

通りの向こうから、花のような笑顔のミーシャが手を振っていた。礼也と目が合うや、たたた、と駆け寄って来る。

「お、ミーシャじゃねえか」メロンパンを隠し、礼也がミーシャを抱き上げた。「何やってやがんだ、こんなところで」

礼也に、たかいたかい、をされた状況で、ミーシャが楽しそうに笑う。

『もう、レーヤはすぐに子供扱いする』

「はは、相変わらず何言ってやがんのかちつともわかんねえな」
「知ってる子？」

不思議そうに眺める楓に、礼也が目をやった。

「んあ？ メガルに転勤してきたオッサンの子供だ。こう見えてもロシア人だぞ」

「こう見えてもって……」

「フランス人みてえだろ」

「……さあ」愛らしいミーシャの顔を、楓がまじまじと眺める。「綺麗な子。お人形さんみたい」

「だろ？ ぜってえこいつはデルモ体型の鬼のような美人になる。夕季みたいなブサイクロンとはえれえ違いだ。な、ミーシャ」

『ああ！ レーヤ、何か食べてる！』

「そうか、おまえもそう思うか、ミーシャ。やっぱだって」

「……」

ミーシャが宙ぶらりんから解放される。ふいに楓に目を向けると、大人びた笑みを浮かべてみせた。

『レーヤの恋人？』

「オツケー。オツケーだ、なあ、ミーシャ」

「……」

「ミーシャ」

三人が振り返る。

通りの角に優しい微笑みをたたえるアレクシアの姿があった。

『レーヤ、こっちこっち』

「お？」

ミーシャが手を引き、礼也をアレクシアのもとへと連れて行く。

楓もその後へ続いた。

『ママ、レーヤにあげて』

『はいはい』

重そうな手荷物の中からアレクシアが平たい箱を一つ取り出した。一旦ミーシャへ渡し、その小さな手から最終的に礼也のもとへと伝わっていった。

「お？ 俺にくれんのか？」

カゴの中からプリムラの花も差し出す。そして覚えてたの日本語を口にした。

「ギリチョコ、ギリチョコ」

「おいミーシャ、あんな……」

再び礼也がミーシャを抱き上げ、嬉しそうに笑った。

「このやろ」

ミーシャも楽しそうに笑った。

何とはなくうらやましそうに眺めている楓に気づき、ミーシャが手に持ったプリムラの花を差し出した。

途端に楓の目が点になる。

「私に？」

自分を指さす楓に頷き、ミーシャがいたずらっぽく笑う。

『レーヤの恋人のあなたにも特別にあげる』

受け取る楓にはその言葉の意味がわからない。

両者を見比べて、アレクシアが優しい口調で通訳してみせた。

「素敵なあなたにあげますって」

「ありがとう……」

楓が照れたように口ごもる。ふと思いつき、カバンを探って余った義理チョコを一つ取り出そうとした。

その時、ラッピングされた一際大きな箱がこぼれ落ちた。

礼也やミーシャが注目する中、かあっと、楓が顔を赤らめる。不自然な平静を装い、楓がミーシャへチョコレートを手渡した。

「……はい」

『ありがとう』楓に礼を言い、抱きかかえられたままのミーシャが、顔が触れ合うほどの距離で礼也へ向き直った。『レーヤもギリチョコもらったの?』

アレクシアが平静を装い通訳を続ける。

「……。レイヤもチョコレートを貰ったの、って」

「今ギリチョコつつたろ、こいつ……」

礼也がミーシャを地面に降ろす。

妙な空気が流れ始めていた。

「……」やがて沈黙に根負けしたような形で楓が先ほどの大箱を取り出し、えへんと咳払いし、礼也へ差し出した。「……はい」

「……」ぶすつと苦々しい表情になる礼也。「んだ、てめえ、持つてんなら早く出しやがれ」

「……だって、いらなさそうだったし……」

「いるってーの!」

「……言ってること違う……」

「はあ! この世界にこの日、チョコいらねえ男なんざいるわけねえだろ」

「でも衣浦先輩は、俺はいいからって言ってた。別に気を遣ってく

れなくてもいいからって。先輩、人気あるからお返しとか大変そうだし」

「ああ！ バカかてめえは！」

「……何」

「んなこと言ってやがんのは、モテねえ野郎のせつねえ予防線だつて！ 察してやれって！ かええそうによ」

「モテない？……」

「てめえも大概天然入ってやがんな」

「何それ！ もう返して！」

「ふざけんな！」

「ふざけてるのはどっちなの！」

「ぜってー返さねえ！」

『あゝ、いいな〜！』

気まずそうな二人の攻防もまるで気になけず、突然ミーシャがじたばたと騒ぎ始めた。

『レーヤ、おっきいギリチョコ。いいな〜、かえて〜』

「とても大きな……、ギリチョコね、うらやましい、って言ってる」

「……。まあ、どうせギリだろうけどよ……」

「……」

『あゝ、レーヤ嬉しそう』顔をそむけた礼也をミーシャが冷やかした。『ひゅうひゅう』

表情から何となくその内容を礼也が察する。

「何言ってやがんだろな、こいつは……」

「とても嬉しそう、ですって」

「いや、いちいち訳してくんなくってもいいって……」気を取り直し、ミーシャを高く掲げ、ぶんぶん振り回した。「てめえ！ この野郎！」

『あはははは……』

きゃっきゃとミーシャが無邪気に笑う。

その様子を楓はアレクシアとともに楽しそうに眺めていた。

ミーシャを降ろし、礼也が照れ隠しにメロンパンにかぶりつく。
するとミーシャの瞳が輝き始めた。

『あ、メロンパン。ちょうだい、レーヤ』

「てめえはチョコで我慢してろって」

『ズルい！ 卑怯者！ このタマナシヤロー！』

「……いい加減、オッサン達をこいつから立ち入り禁止にした方がいいぞ、アレクシア」

「ええ、私もそう思うの。でもイヴァンが……」

切なげな顔を向け合う礼也とアレクシアを、楓は複雑そうな表情で眺めていた。やがて、はっと気がつき、カバンの中からメロンパンを取り出すと、ミーシャへ差し出した。

「ミーシャ、これあげる」

『わり、すごい。何でも出てくる』メロンパンを両手で持ち、ミーシャが嬉しそうに楓の顔を見上げた。『あなたならレーヤをあげてもいい』

ミーシャの言葉が理解できず、アレクシアへ目を向ける礼也と楓。アレクシアは何も言わず、ただ穏やかな笑みをたたえながら三人を見続けていた。

「どっか行くとこか？」

礼也の何気ない問いかけにアレクシアが答える。

「イヴァンの病院。ミーシャがどうしても今日お花をあげたいって言うから」

喜々とした表情でメロンパンにかじりつくミーシャをちらと見やり、礼也がアレクシアへ向き直った。

「俺が持ってたってやろうか？ 重てえだろ」

「でもレイヤ、他に用があるんでしよう」

「いや、帰るだけだしよ」楓に目を向けた。「おまえも行くか？
イテえギャグ言うロシア人のオッサン、紹介してやるぞ。シモネタも満載だ」

「……いえ、結構です」

アレクシアが少しだけ悲しそうな顔になった。

夕食の仕度をする忍へ夕季が近づいて行く。

「お姉ちゃん……」

「ん？」振り返る忍の目に飛び込んできたのは、夕季が抱える大量のチョコレートだった。「……誰にまだそんなにあげる気なの？」

「違う。貰った。学校で」

「……」チョコレートの山をまじまじと眺める。「すごいね。木場さん達より多いんじゃない……」

「……どうしてだろ」

「そんなに深く考えることでもないって。よくあることだよ」

腑に落ちない様子で夕季が顔を向けた。

「お姉ちゃんも貰った？」

「ああ、高校生くらいの時はね」

「……。話したこともない人ばかりなのに……」

「友チョコとも違うみたいだね。なんかそういうのってあるみたい。あの頃の年代だと」

「食べる？」

「駄目だよ、夕季。みんな勇気を出して渡したんだから。その気持ちを受け取ってあげなきゃ」

「……どう、受け取ればいいの」

第十九話 『プライマル』 7

夜半、他に人影もなくなったメック・トルーパーの事務所で、桔平が何度も机の引き出しを出し入れする。

騒々しさに顔をゆがめ、書類をまとめていた木場が不愉快そうに振り向いた。

「何をしている」

「いや、ねえんだわ」

「何がだ」

「何がっておまえ！」 キツとなって振り返る。「チョコに決まってるんだろが！」

「……チョコなら昼間、義理チョコを山ほど貰っただろうが」

「それはそれだ。夕季からのがねえんだ」

「……」

「どうなってんだかよ。みっちゃんとかしの坊はちゃんとくれんになる。みっちゃんのやつの中身は予想どおり激辛チョコだったがな。見たまんま真っ赤で、開けただけで匂いがすげえのなんのって。俺は一口食っただけでヒーハーだったが、インド人もびっくり、とか言いながら礼也と二人でバリバリ食ってやがったな。どうなってんだ、あいつらの味覚は」 辟易顔の木場の目の前で、激甘コーヒーズはあれ一個だけだったな。そういや去年波野ちゃんがくれた、ハンバーグの形したチョコはきつかったな。チョコだってわかってんのに、脳ミソはハンバーグとしか認識してくんねえ。チョコ味のハンバーグと認定した時点でアウトだった。手作りなのはいいが形もやけにリアルで、刻んだタマネギまで再現してあると思ったら本物入れてやがったしな」

「……」木場があきれたように顔をそむけた。「彼女はそういうのが苦手なんじゃないのか？」

「ん？ 夕季がか？ 冗談じゃねえ！」ぽっぽー、と頭を噴火させる。「ドラやんのところにはわざわざ届けに行ったり話だ。昼に大事な会議ブッチして遊びに行ったら、野郎、自慢げに見せびらかしてきやがった」

「それで進藤が目をつり上げていたのか……」

「あの野郎は昔からあだ。ロシア人のくせに、セコくて汚ねえ。軍隊式に言うと、あのタマナシ野郎だ」

「昼間、同じようなことを俺も言われたが……」

「そういや、ミーシャに教えてやったら、あのガキえらく気に入りがあって、メックの奴らに連発してやがったな」

「やはりおまえのせいか……」

「くそ、もうアメリカにモナカとか送ってやらねえ」

「……」

「ったくよ……」椅子に、どっかと腰かける。もう一度引き出しを開けた。「やっぱねえ！」

「何度見ても同じだ。俺達にはみっちゃんと連名でくれたがな」

「あゝあ！」ふんぞり返る。「あの野郎、あんなに世話してやってんのに、義理チョコの一つもよこしやしねえとは」

「照れ臭いんだろう。親しい証拠だ」

「ちっとも嬉しかねえぞ。気持ちの問題だ。恥ずかしくっても勇気出して持つてくるところに男は萌えるんだろうが。別にあんたのために作ったんじゃないからね、たまたま大量に購入していた業務用の板チョコがしこたま余ったから、とか言って、いっしょ懸命こさえた手作りチョコ持ってきた日にゃ、駄目な男とか黒崎はメロメロだぞ。いや、俺は駄目な黒崎とは正反対のナイスガイだな」

「貰ったら貰ったで、また気を遣うんじゃないのか。おまえ達はそういう関係じゃないだろ」

桔平の眉がぴくりとうごめく。

「……ん、ま、ちつとはギクシャクするかしんねえが」

「彼女がそういったことをしなかったとして、おまえは彼女とのつき合い方を変えるつもりなのか」

「ああ？　なんだ、そりゃ」

「もう彼女に何かしてやるのをやめるつもりかと言っているんだ」

「……。そういう訳じゃねえけどよ……」

「だったら気にするな。おまえ達の関係はそんなものがなくても充分成り立っている」

「……時々わからなくなるんだよな」

「……。何がだ」

「あいつが何を考えているのかとか……」

「……」 桔平を見据え、木場が目を細めてみせた。「みっちゃんよりるか」

「バカ野郎、スケール違いを出すじゃねえよ。……でもよ」 ふうん、と鼻から憂いを噴き出す。北風に叩かれる窓の外に目を向けると、暗い空の彼方にけしつぶのような星が点々と浮かび上がっていた。「何だか最近、あいつのことがつかみきれないような気持ちになる。光輔や礼也達と同じようにぶったたいたら、簡単に壊れちまうような、なんか、そんな感じた。もっと頑丈だと思ってたのに、意外と細っちいのに気がついちゃったようなよ。結構わかってるつもりだったんだけどな……」

「それだけ絆が深まったということなんじゃないのか。他人なんてものは、知れば知るほど傷つけるのが怖くなるものだ」

「……。けっ、きいたふうな口たたきやがって……」

「どうでもいいが、少しくらい俺の仕事を手伝おうという気持ちにはなれんのか」

「なれねえな。これっぽちもだ」

「……こいつ」

「とは言っても、なんか割り切れねえ。しの坊はでっけえのくれたのに……」 ちらと木場を見やった。「おまえもあれか？　チョコバ

ツトンの駄菓子屋ケース入りのやつ」

「……いや」

「じゃ、なんだ。手作りか？」

「いや」 桔平の目を見据え、きっぱりと言い放つ。「ジャッキーのDVDボックスだ」

「何！」 桔平がガバッと起き上がってきた。「こないだ出たモンキーシリーズのやつか！」

「うむ」

「うむ、じゃねえ。てめえ、俺にも貸せ！」

「断る」

「いや、断るんじゃない……」

その時、桔平を呼び出すためのホットラインが事務所内に鳴り渡った。

「おい、桔平！」

「おお……」

緊急の呼び出しにより夕季が叩き起こされたのはその日の深夜だった。

「何、お姉ちゃん、緊急？……」

スウェットを脱ぎながら夕季が忍へ顔を向ける。まだ眠そうな目をこすった。

パジャマ姿の忍が真剣なまなざしを向けた。

「ヴォヴァルが発動したみたい」

「！」 瞬時に表情が切りかわる。「いつ」

「桔平さんの説明だと、発動自体は明け方みたいだけど」 時計を見上げると午前一時四十分を示していた。「公式な発令は迎撃体勢が完了してからだろうから、この時間だと街の人達の避難も難しいかもしれない。夕季」

「わかってる」 神妙な様子で頷いてみせた。「なるべく街から引き離してみる」

「そう、頑張ってね」

「うん」暖房をともししていない部屋からの冷氣に、ぶるっと身を震わせた。「うう……」

「寒いから、たくさん着てきなよ」

「ん……」

テキパキと仕度を始めた夕季を、忍は頼もしそうに見守っていた。

「何か食べてく？ 昨日の残りなら温めてあるけど」

「あ……」すんすんと鼻をうごめかせる。「……うん」

「じゃあすぐ……」

ピンポン。

「あれ、もう大沼さん来ちゃったの？」自分の格好に気づき、はっとなった。「ちょっと、夕季、出て。お願い」

「うん」

玄関へと向かう夕季。

ドアを開けるや、光輔の切羽詰った顔が飛び込んできた。

「光輔……」

「発動だって！ いきなり！」

「……わかってる。寒いから、閉めて」

さあっと風が通り抜けた。

「寒！」

「寒！」

玄関先で光輔の声を聞きつけ、忍が慌てて飛び出してくる。

入れ替わりに、寒さに震えながら夕季が奥へと逃げていった。

「駄目じゃない、光ちゃん、うちにいなきゃ。何かに巻き込まれて危険な目にあったら取り返しがつかないでしょ。桔平さんに怒られるよ。寒！」

「わかってる、わかってるんだけどさ」必死の形相。「腹減った。

なんか食わせ……」

光輔が言い終わる前に夕季が皿を差し出す。カレーライスだった。「食べれば」

「カレエー！ ラッキ！」むさぼるように食らいつく。「うま！

うちに何もなくてさ、迎えが来る前にソッコーでコンビニ行こうとしたんだけど、レジに並んだらサイフ忘れちゃってさ、うち帰ってたら時間なくなっちゃうし、もう大ピンチで、だったらこのが近いじゃんってさ！ うま！ 寒！ ウマ！」

「……とりあえず中へ入りなよ」

「うんうん！ うまっ！ しいちゃん、マジうま！」

「昨日の残りものだけだね。おかわりしてもいいよ」穏やかに微笑み、夕季へと振り返った。「夕季、もっかいご飯、チンするから待ってて」

「うん」

「あれ、これ夕季のだったの？ ごめ……」パジャマ姿の忍へ目をやり、フリーズする。「そのパジャマ、誰？ キョーヘーさん？」前面いっぱいのキャラプリントを忍が恥ずかしそうにカーディガンで隠した。「ウンピョ……」

メガル基地内のブリーフィング・ルームでおののバトル・スーツに着替え、光輔ら三人が桔平と向かい合う。

ヴォヴァル出現の予定時刻は午前六時前後と推定されていた。

現在の時刻は午前三時。

発動までに時間の余裕があったものの、万全を期して、メック・トルーパーが直接光輔と夕季を迎えに出向いていた。

「ふぁゝあ」

「あゝお……」

あくびをした礼也と光輔を桔平が専用ハリセンで叩きのめす。

「つてえな！」

「しゃきつとしろ、しゃきつと」

「なこと言っただって、ほとんど寝てねえんだぞ。夜中の変てこなアニメ観てて、ようやくと寝ようかって思ったとこでジリリリーン！だ。シャレンなんねえぞ。パンチラとか白くなってて全然見えね

えしよ、ざけんなんて」

「そんな理屈がヴォヴァルに通用するか！ 寝たぼけて返り討ちにあったって、誰も助けてくれねえぞ！」光輔を見やる。「おまえも寝てねえのか？」

「ええ、宿題があって」

「嘘つけ」

「本当ですよ！ 本当に宿題があって！ ……宿題があったんでやろうと思ってたら今いちやる気が出なかったんで、ゲームやってたら眠くなって、うとうとし始めたらすぐジリリリン！ て……」
「バカヤロが！ 寝られる時に寝ておけていつも言ってるんだろうが！」

もう一発ずつしぼく。

「て！」

「た！」

ふん、と鼻息を荒げ、桔平が夕季へ振り返った。

他の二人とは違い、しゃきとしたまなざしで夕季が見つめ返す。

「おまえは」

「十二時には寝てた」

「宿題は」

「やった」桔平を睨みつける。「関係ない」

桔平が、ふん、と顔をそむけた。

「いいか。無理はするな。体調悪いんだっとならすぐに言え。最悪倒せなくても、おまえらの無事帰還が優先だ」

「眠てえこと言ってんなって」鼻をほじりながら、礼也が憎まれ口を叩く。「無理してでも倒しとかねえと、後々もっと面倒なことになるかもしれないだろうが」

「バカ野郎！」

桔平のイカズチがハリセンに宿る。

「ってえ！ ささったじゃねえか！」

「そうしなきゃ今すぐにでもヴォヴァルが地球を壊滅させるって言

うなら無理してでもやれ。俺からもお願いしてやる。だがな、ものごとには勝負どころってのがある。そこで命をかけてまでやるべきかどうか、しっかり考えてから行動しろ。それができねえなら、俺の指示に従え」

「無理をして竜王やガーディアンが行動不能に陥ったら困るから？」
ぶすりと刺し込む夕季へ、桔平がゆっくりと顔を向けた。

「竜王じゃねえ。おまえらの変わりはいねえってことを自覚しろって言うてんだ」

「今は、でしょ」

「！……んだと」

「他に竜王に乗れる人間が現れたら、私達は必要なくなるんじゃないの」

「夕季……」

おろおろとうろたえる光輔の目の前で、桔平と夕季が睨み合う。

「竜王に乗れる人間は何人いたっていいだろうが」

「それはスピアとしてでしょ」いつになく、執拗に夕季が食い下がった。「もし私達よりうまく竜王を乗りこなせる人間がもっと現れて、私達がその中に埋もれたら、それでも今みたいなこと言ってくれるの」

「くだらねえこと言うだ言ってんな。はったおすぞ」

ぎろりと夕季を睨みつけ、吐き捨てる桔平。

顔をそむけ、夕季がぼそりと押し出した。

「……はりたおせば」

それ以上何も言わず、桔平は三人に背中を向けた。

「仮眠室でスタンバっとけ。一時間前になったら起こしてやる」

それから部屋の出口付近で足を止め、静かにそれを叩きつけた。

「もし嫌々やってんだったら、いつでも言うてこい。強制はしねえ」
言いたくなさそうにつないでいく。「命張ってんだ。信頼がなくなったらおしまいだからな。そんなくだらないことで、おまえらを死なせたくない」

桔平が出て行った部屋の中で、光輔が夕季の正面に立つ。心配そうな面持ちだった。

「何やってんだよ、おまえらしくもない」

すると、ぷい、と顔をそむけたまま、夕季が淡々とそれを口にしていた。

「別に。ちよつと言ってみたかっただけ」

「でも、あんな言い方しなくなっただけいいだろ」

「……本当に私達のことを信用してくれてるのか、疑問だったから」「信用してくれてるに決まってるんだろ。俺らはともかく、おまえだけは信用してるって」

「だよなあ、こいつにはぜってえ手え出さねえもんな」

どうでもよさげに礼也が二人の間に乱入してきた。

「俺らはポコポコひっぱたくくせによ、あのオッサンは」メロンパンにガッツキながら、礼也が紙コップのコーヒーを流し込む。「俺や寝るぜ。おまえらも少し寝とけて。ま、好きにすりゃいいけどな」

大あくびを引きずり、礼也が仮眠室へと向かう。

その背中を目で追い、光輔も立ち上がった。

「俺も寝とこっかな」

二人が去った後のブリーフィング・ルームに、夕季一人が取り残される。

しばらくして、誰にも届かないような小声で夕季が呟いた。

「……だからだよ」

第十九話 『プライマル』 8

午前六時。

二月のこの時間帯はまだ陽が出ておらず薄暗い。

すでに光輔ら三人は、ガイア・カウンターが算出したヴォヴァルの出現予測ポイントまで到達していた。

前回と同じ出現パターンならば、ほぼ確定のはずである。

陸竜王のコクピット内でスポーツドリנקを流し込んでいた礼也が、呼び出しがかかり、ディスプレイのスイッチを入れ、ボトルをホルダへ収める。

仏頂面の桔平が画面に現れるや、待ちかまえていたように悪態をつき始めた。

「まだ来ねえのかよ」

『焦るんじゃない。焦ったら奴の思うツボだ』

「わかってるけどよ」もう一度ボトルへ手をかけた。「いい加減ジレてきやがった」

『でもさ』

光輔の声が聞こえ、礼也が回線を切りかえる。

画面の端に光輔の不安そうな顔が飛び込んできた。

『あんなハイパー・アーマー着たのとどうやって戦う？ こっちの攻撃見切って、すぐにカウンター合わせてくるしさ』

「眠てえこと言ってんな、てめえ。んなの、出たところ勝負だ」

『あ、やっぱり……』

『礼也』

桔平の押し殺した声に礼也が眉をうごめかせた。

『いつまでもバカなことやってんじゃない。てめえ、本当に竜王から降ろすぞ』

「わかってるってよ。冗談だ」面倒臭そうに耳をほじる。「無茶はしねえ。とりあえず探るだけだ。んで、チャンスがあつたらブツ込む。それでいいんだろ」

『……。いいな。くれぐれも勝手な真似はするな』

「わかってるって」

『光輔もだ』

『わかってます』ドンと胸を叩く。『今度こそイエローに徹します』

『夕季』

『……』

『夕季、返事をしろ!』

『……。はい、すみません』

『……』

画面の隅で光輔一人がおろおろとうろたえていた。

礼也が、はああ、とため息をつく。

「何やってんだかよ」

ちゅう、とドリンクを吸い込んだその直後、万里を走る破碎音とともに空が割れた。

「来やがったか……」

礼也が口もとを引きしめ、己の敵を見定めた。

薄闇の冬空に浮かび上がるように、ヴォヴァルがその姿を白日のもとに晒す。

大空目がけ飛び上がる空竜王を背後に、無人の街へ降り立った魔神を礼也が迎え撃った。

まずはバーン・クラッカーで牽制。

挑発のつもりだったがヴォヴァルは先回と同様微動だにせず、続けてその鋼色の仮面目がけて渾身の一撃を貫き放とうとした。

灼熱の炎塊が到達せんとする刹那、ヴォヴァルの全身が怪しげな光を放ち始める。

その時、夕季が待ったをかけた。

「駄目、礼也！」

夕季の叫び声に氣をとられる礼也。

次の瞬間、陸竜王は凄まじい衝撃を受け、幾棟もの家屋をなぎ倒しながら後方へと吹き飛ばされていた。

真紅の両眼に怒りの炎を宿し、瓦礫の中から陸竜王がのっそりと立ち上がる。

見上げればヴォヴァルは先と同じ状態でその場にとどまり続けた。いた。

「てめ、夕季、よけいなこと言いやがって。氣が散っちゃっただろうが！」ギリと齒がみし、ヴォヴァルを睨みつけた。「集束だ。グランドで一氣にカタつけてやる」

すぐさま、夕季から二度目の待ったがかかる。

『駄目、礼也』

礼也が画面を立ち上げると、夕季の真剣な表情が飛び込んできた。「何言ってやがる。相手、ただのくのぼうじゃねえか。タイプスリーじゃイマイチ迫力不足だったが、グランドならグイグイ押し込めるって」

『勝てない。……絶対』

「んだと！」

いきり立つ礼也だったが、いつになく自信なさげな夕季の様子に毒氣を抜かれたようだった。

「……訳言ってみろ」

礼也に問われ、空竜王の中、静かに夕季が語り始める。

「半信半疑だったけど、今ので確信を持った」ぎゅっと口もとを結ぶ。「今、礼也を吹き飛ばしたのは、陸竜王と同じ攻撃だった」

『んだと！』画面越しにわかるほど礼也が目を剥き、身を乗り出してきた。『どういうこった！ そりゃ！』

やや顎を引き、夕季が続ける。

「空から全部見てた。陸竜王の攻撃が当たる直前で、まるで鏡のようにはヴォヴァルからクラッカーが伸びてきた。当たった瞬間

に、礼也の目の前にそれが突然現れたって言った方が正確だと思う。たぶん、前回あたし達がやられた時も同じ。ヴォヴァルは相手の攻撃をすべて跳ね返す。遠くからの弱めの攻撃ならば、何とか前みたいに致命傷を避けられるかもしれない。でも避けるのはほぼ不可能だと思う。いくら反応速度が優れていても同じ。それが強ければ強いほど、速ければ速いほど、あたし達はより深く自分を窮地に陥れることになる」

『……。無防備状態の自分の急所チョイスして、思っくそ攻撃してたってことか。どうりで凄まじいわけだって……』

オープンチャンネルとなったその謎解きを、多くの者が耳にし、そして絶望する。

光輔も、あさみも、木場も、そして桔平も。

「いったいどういう仕組みだ……」

顎の下の汗を手の甲でぬぐい取る桔平に、顔を向けることもなく、あさみがぼそりと呟いた。

「それがわかるくらいならば、きっとプログラム自体が人類への攻撃を諦めるでしょうね」

「……」

「自動反射装置かよ。カラミティじゃあるまいし、反則だろ。結局、自分がくろう前提の、腰の引けた攻撃しかブツ込めねえってことじゃねえか……」コクピットの中、礼也が身悶える。「何か方法はねえのか。このまま見ているだけじゃ、奴は倒せねえぞ」

『手を出すな』

桔平の押し殺した声に、三人が一斉に振り返った。

あっけにとられる三人を画面越しに睨みつけ、重々しい表情で桔平は続けた。

「今はまだ奴からの攻撃はない。無理してわざわざ削られる必要はねえ」

『だが、もし奴が打って出てきたらどうすんだって』

「何とか打開策を見つけるんだ。それまでは静観しろ」

『何とかって、どうするの』

夕季が肝の据わった声で桔平に食らいつく。

『いくら考えても方法は見つからない。このまま行動を起こさなければ、いつまでも何も変わらない』

「じゃ、どうするつもりだ。行動起こして玉碎してりゃ、結局何も変えられねえぞ。それどころか取り返しのない損失が重なるだけだ。さっきも言ったはずだ。おまえらの損失イコール、人類の敗北だってな」

『……探ってみる』

「てめえ、くだらねえこと考えてんじゃねえぞ。自分がやりや何とかなるって発想が一番はた迷惑なんだ。自信がねえなら許可しねえ」
『やってみなければわからない。空竜王は三体の中でも一番攻撃力が低いから、被害も最小限ですむ。光輔と礼也はそれをよく見て、何かわかったら教えてほしい』

「待て、夕季」覗き込むあさみを肩で押しのけるように、桔平が前のめりになった。「すぐに遠隔操作でミサイル撃てるよう手配する。それなら被害もねえ。それでいいだろうが。勝手に無意味なことするんな！」

画面中の空竜王が突然街へ降り立つ。周囲を見渡し、タンクローリーを頭上に掲げると、再び飛び立っていった。

「おい、夕季！」

桔平の呼びかけを無視し、夕季が上空からヴォヴァル目がけてローリーを投げつける。

ガソリンを満載したタンクはヴォヴァルへ激突して大爆発を起こした。

しかしヴォヴァルは光らない。

空竜王も無傷のままだった。

「……どういふことだ」

『ヴォヴァルはこっちの攻撃をすべて見切る。自分に対して効果のない攻撃は、はなから相手にもしない。これでも無意味だって言う

の』

「……。戦艦、一発で沈めるミサイルが、てめえのより貧弱だったのか」

『……ヴォヴァルに聞いてみれば』

「……」

「彼女の理論が正しければ、ミサイルは発射装置ではなく、差し向けたこちらへ返ってくる可能性もあるわけね」腕組みをし、桔平を横目で流しながら、あさみが意味ありげに笑う。「もっとも、対艦ミサイルくらいではこの防壁はビクともしないでしょうけれどね。そんな貧弱な攻撃がヴォヴァルを本気にさせるとは到底思えないけれど」

「……」

黙り込んでしまった桔平から視線をはずし、ふいにあさみが真顔になった。

「少なくとも竜王ならば、ものの数分でメガルを瓦礫の山に変えることができる」

「……」

無言のオープンチャンネルから顔をそむけ、夕季が眉を寄せる。

「誰かがやらなければいけない」上ずるようにそれを口にした。「誰かが犠牲にならなければいけないのなら、あたしが……」

『集束だ、バカ野郎！』

「礼也……」

『てめえ一人で何ができる。てめえのとりえは目がいくらいなんだからよ、俺らに任して、まん前でしっかり見とけ！』

「……」

『やるしかないだろ』光輔が乱入してくる。『とにかく今はやってみるしかない』

『だな』二人を見比べ、礼也がしょうがない、と言わんばかりに笑った。『どうせおしおきされんのは俺らだけだ。おまえはそのかわいげのない目つきで、漏らさねえで弱点探っとけって』

「……うるさい」

七色の光を従え、三体の魔王と三つの心が集束する。

地上戦特化型ガーディアン、グラント・コンクエスタがヴォヴァルの前へ立ちはだかった。

同じ表情の三人のまなざしが、同じ方向をしっかりと見据える。

「臥竜偃月刀だ！　おい、どっから突つつく」

「頭！」

「俺もそう思……」

「しゃっ！」両腕を張り、二人を押しつけるようにぐいと身を乗り出す。「とりあえず突つついてみるって！」

数分の後。

街には打ち伏せられ片膝をつくガーディアンと、無傷のままその場にそびえ立つヴォヴァルの姿があった。

誰の目から見ても、ダメージの差は明らかだった。

司令室でスタンドマイクを握りしめ、桔平が撤退命令を下す。

「わかっただろう。やみくもに突っかかって、自分が傷つくだけだ。撤退しろ」

『冗談じゃねえ……』

「何だと！」

『まだ一ミリも削ってねえ。このままで終われるかって。なあ、光輔』

『……もう少しで何とかなりそう、……な気がするんだけどな……』
「煮え切らない二人に桔平がこうを煮やす。」

「おい、夕季」

『……はい』

「何かわかったか」

『……。まだ……』

桔平が口もとをゆがめる。

「撤退か継続か、おまえが決める。もし判断を誤ったら」眉間に力

を込める。「今日限りオビディエンサーから降ろす」

『！』

桔平の決断に慌てたのは光輔と礼也だった。

「ちょ、ちょ、桔平さん……」

「おい、つまんねえ冗談言ってる場合じゃねえだろ」

『冗談じゃない。本当に降ろす。おまえらもだ』

「……」礼也が夕季へ振り返る。「本気みてえだな、オッサン」

夕季は何も言わず、ただヴォヴァルを睨みつけていた。

「撤退しよう」

光輔の提案に礼也が頷く。

「だな。今、無理くり、かたあ、つけなくても……」

「まだ。今やめても、何も対策が立てられない」

拒否を告げる夕季に二人が言葉を失う。

「今奴が動き出したら、誰も守れない。何もできずに大切な人が死ぬのを黙って見ていなければならぬ。そんなの嫌……」

その意志の強さに礼也が目細めた。

「ブレイクだ」

「！」目を見開き、夕季が顔を向けた。「礼也、どうして……」

「勘違いすんな。最初の作戦に戻るだけだ」ぐぐい、と睨みつける。

「俺が人柱になるって」

「……」

「仕方ねえ、つき合ってる。嫌だけどよ。おまえはカウンターくらわねえ場所からしっかり見てろ。でもって、確実に弱点見つけとけて。したら、オッサンも文句ねえだろ」

「でも……」

「判断はリーダーの俺が下す！」

「……」

「……認めちゃったね」

「あんでもねえって！　ちょっと言ってみただけだ！」

「あ、やっぱり……」

「そのかわし、あのバカぶっ倒したら、図書券だけでなく、シースーでもおごっとけて話だ！」

「回らないやつ？」

「はあ！ 回ってるやつに決まってるんだろが！」 見下すように光輔を睨みつける。「プリンやババロアのねえ寿司屋なんぞ、寿司屋じゃねえ！」

「……本気でそう思ってたの？」

「バーカ！ 言ってみただけだって！」

「……。俺、結構納得しちゃってたんだけど……」心配げな夕季を振り返り見て、光輔が卑屈な笑みを浮かべてみせた。「心配するなって。礼也がやられたら、次、俺がやるから。嫌だけど」

「おう！ 続いとけて！」腑に落ちない様子で首を傾げる。「てめ、俺がやられたらとはなんだ！」

「いや、ちよつと言ってみただけ……」

「はああっ！」

「礼也、光輔！」

夕季の呼びかけに二人が目を向ける。

音もなく、ヴォヴァルが動き出すところだった。

「今度は奴の攻撃権ってわけか……。ブレイク、取りやめだ！」

仁王立ちのガーディアン目がけ、巨大なランスを振りかざし、ヴォヴァルが突進を開始した。

第十九話 『プライマル』 9

勢いの衰えたガーディアンを上回るスピードでヴォヴァルが猛進する。

叩きつけられたランスを臥竜偃月刀の両手持ちで防ごうとしたが、今のガーディアンには踏みとどまるだけの余力すら残されていないかった。

「野郎、これを狙ってやがったのか」

「違う」

強烈な光の目くらましとともに吹き飛ばされ、歯がみする礼也に、夕季が苦しげに告げる。

「もう、あたし達には興味がなくなっただけ」

「はあ！」

「打つ手がなくなったあたし達を、あいつはもう敵とすら認めていない。……これ以上、茶番につき合う理由もなくなったから」

「茶番だと……」

続けざまに繰り出された二撃目、三撃目も同じく受け止めようとする。だが結果は同じだった。

ヴォヴァルの攻撃に力を込めて立ち向かえば、その分上乘せされて跳ね返ってくる。そして抵抗しなければ、ただ打ちつけられるのみ。

礼也達にできたのは、何もせずに逃げ回ることだけだった。

鈍く輝くランスの尖端が、ガーディアンの胸もとを貫こうと迫りくる。

「礼也、ブレイク！」

「仕方ねえ！」

緊急回避のため、ガーディアンが三体の竜王へ分離した。

それぞれが別方向へ展開し、ヴォヴァルの攻撃の矛先を逸らそうと奔走する。

空竜王は空高く飛び上がり、陸竜王と海竜王は建物の陰へと身を潜めやり過ごそうとした。

獲物を求め悠然と周囲を見渡すヴォヴァルに、礼也と光輔は片時も緊張の面持ちから解放されることはなかった。

「くそ、マジでここまでかっての！」礼也がサイドパネルへ拳を叩きつける。「情けねえ！ 刺し違える方法すら思いつかねえ。レツドなのによ！」

陸竜王が瓦礫を踏み外すそのかすかな物音に、ヴォヴァルが反応した。

「ち！」

繰り出された巨大なランスが、礼也と陸竜王がいた領域をまるごと払い飛ばしていく。

間一髪で跳び出した礼也が、ナックル・ガードを連続展開し、次から次へと壁面へ取りついて危険区域からの離脱をはかろうとした。しかしヴォヴァルのロックオンは解除されることもなく、陸竜王の動きをトレースするように執拗に追従し続けてきたのだった。

陸竜王が取りついた後には、確実に崩壊が訪れる。衝撃とヴォヴァルの駆逐によって。

「礼也！」

礼也を援護しようと飛び出した光輔が、海竜王の手のひらから霧を噴出させ攪乱を試みる。

するとヴォヴァルがくるりと振り向き、海竜王に狙いを切りかえ追いつめた。

「光輔、逃げろ！ そんなもの奴には通用しねえ！」

直線的に海竜王をとらえ、まばたきする間も与えずヴォヴァルが間合いを詰めていく。

「く！」その迫力に思わずのけぞりかけた光輔だったが、ぐっと両眼に力を込め覚悟を決めた。「来るなら来い！」

両腕から銀色の長爪を繰り出し、海竜王が眼前の敵にファイティングポーズを叩きつける。

朝焼けを受け、海竜王の全身が妖しく乱反射していた。

その時、ヴォヴァルの足もとへ風の散弾が突き刺さった。

ゆらりと空を見上げるヴォヴァルと海竜王。

はるか上空から急降下しながら、白銀にきらめく機影が飛び込んでくるところだった。

『夕季、当てるな！ 絶対に当てるなよ！』

「そんなのわかってる！」がなり立てる桔平に夕季がうるさそうに吐き捨てる。「気が散るから黙ってて！」

カミソリ一枚分の隙間を残し、空竜王がランスのなぎ払いを潜り抜けた。

見たもの、近寄るものすべてに反応するヴォヴァルが、今度は夕季の空竜王を追いかけて飛び上がってきた。

「夕季！」

心配そうに呼びかける礼也に、夕季が応答する。

『あたしがこいつを引きつけるから、礼也達はその隙に基地まで逃げて』

「逃げろだ？ バカ野郎、てめえ、どうする気だ」

『なるべく被害がなさそうなところへヴォヴァルを誘い込むつもり。できればそこで決着をつけたい。何かわかったら連絡するから、その間にとりあえずの対策を考えておいてもらって』

「オッサンにか！」

『……進藤さんに』

「どうやって俺らがそこ行きたい」

『……。一旦通り越して、帰ってくる間に来てくれればいい』

「はあ！ てめえが一分飛ぶ距離で、俺らがただ走らされんのかわかってんのか！」

『なら、真上に向かって飛ぶ』

「だから、どこまで上がる気だって！」

『……。宇宙』

「はあ！ 行けんのか！」

『……冗談だけど』

「バカ野郎、センスもねえくせに、こんな時だけツマンねえギャグかましてんじゃないぞ！」

『せっかく考えたのに……』

「うっせえ、ボケ！」

『……』

「おい、逃げ切れねえぞ。マジで」

『あと十時間くらいなら飛び続けられる』

「ふざけてんじゃないぞ！ ただでさえ寝不足だったのに、そんな無茶決め込める訳ねえだろ。すぐガス欠起こしちゃうって」

『大丈夫。一度どこまで高く上がれるか試してみたかったし』口もとを引きしめ、凜としたまなざしを向けた。『とにかくやってみる』

「おまえ……」

『礼也』

「……おお」光輔からの呼びかけに、礼也が目線を差し向ける。眉間に皺を寄せ、噛みしめた歯と歯の間から憤りを吐き出した。「野郎、ハラくくりやがったな」

『みたいだね……』

光輔も夕季と同じ表情だった。

そして礼也も。

「ったくよ。……！」ふいに周囲を見回した礼也の顔から、みるみる血の気が失せていった。「あんま、空気読めるタイプじゃねえみてえだな」

『？』

「戻ってきやがった。天然すぎてハメることもできねえのか、それともガーディアンでもマーキングしてやがんのか……」

礼也の眼前へヴォヴァルが降り立つ。

「メンドクせえ……」ランスを振り上げ猛突進を開始する巨影を、陸の王者が真っ向から迎え撃とうとした。「まあ、何でもいいわ。考えてもなんもわかんねえし、シンプルにいつとくか。！」

礼也が露骨に顔をゆがめる。

陸竜王に被さるように、漆黒のウォーリアー、海竜王が立ち塞がっていた。

『てめえ、邪魔だ！』

「俺の後ろから攻撃しろよ。俺が受けるから」

『はあ！』

思いがけない提案に素っ頓狂な声をあげた礼也へ振り返ることもなく、光輔が涼しげな笑みを浮かべてみせた。

「こっちの方が防御力は上だから、俺が限界になるまで、おまえは何も考えずに攻撃し続けろよ」

『はあ！』

最短距離で接近しつつあるヴォヴォルを視界の奥にとどめ、礼也がギリと歯がみする。

「限界きたらどうすんだって」

『大丈夫。その前におまえを置いて華麗に逃げるからさ』

「はあ！」

『……冗談だけど』

「ったくよ……」陸竜王のコクピットの中、礼也が辟易した様子でヴォヴァルを睨みつけた。「なんでてめーらそろって、ハラくくった時に限ってイテえウケ狙ってきやがんだ」

『……ははっ、なんでだろ』

「まあよ、中身が救えねえのは今に始まったことじゃねえかっ！」大地を踏みしめ、陸竜王が拳を前へ突き出す。バーン・クラッカーのかまえた。貫つとくぞ、光輔！」

「オッケッ！」

長爪をクロスして防御の姿勢を堅持する海竜王の脇から、礼也が渾身の一撃をヴォヴァルへ見舞う。

だが、それによってダメージを被ったのは盾となって立ちほだかった海竜王ではなく、その背中に守られた陸竜王の方だった。

「ぐあっ！」

『礼也！』

ノードメージのまま振り返り、もんどりうつように後方へ弾き飛ばされた陸竜王を、光輔が目で追った。

「通り抜けたのか、こっちを！」

『光輔！』

夕季の絶叫に前へ向き直ると、眼前にヴォヴァルの巨体が迫り来るのを光輔は確認した。

「くっ！」

『光輔、逃げて！』

対応が遅れた光輔を救うべく、高空から夕季が続けざまに拡散空波を放つ。

牽制のはずが乱れ撃ちの手もとが狂い、そのいくつかがヴォヴァルを直撃することとなった。

「しまった……」

失策のペナルティを覚悟する夕季。だがいくら待てども、災難は降りかかってはこなかった。

「……」

口もとを引きしめ、もう一度空波を撃ち放つ。そしてすぐさまそれは、カウンターとなって空竜王へと返ってきたのだった。

「何やってんだ、おまえは！」

きりもみ状態で落下して行く画面越しの空竜王へ向け、桔平が声を張り上げる。

地上寸前で機首を返し、夕季が再びヴォヴァルへと挑みかかっていった。

拡散空波の反転をまともに浴び、今度こそ地表へ激突する空竜王。よろめきながらも何とか立ち上がった。

朦朧とする意識の中、突進してくるヴォヴァル目かけ、夕季がブ

レードをかまえる。ヴォヴァルに対して真っ向勝負を挑むつもりだった。

「やめろ、バカ野郎！ 早くそっから逃げろ！」焦ったように桔平がわめき散らす。「逃げろ！ 早く！」

懸命の呼びかけが届くこともなく、夕季が逃げる素振りを見せることはなかった。

「逃げろ！ 夕季！ バカな真似はやめろ！ 早く逃げろ！」

ダメージを払拭しきれずにふらつき、それでもしっかりと大地を踏みしめ、空竜王がもう一度空波を放つ。

弱々しげに振り絞るように繰り出された攻撃を、誰もが無駄な悪あがきと思っていた。単なる自殺行為であると。

が、それによってもたらされたのはカウンターによる打撃ではなく、ダメージを重ねずに立ちつくす空竜王と、かすかな反応を見せ一瞬足止めされたヴォヴァルの姿だったのである。

スタンドマイクを握りしめたまま、桔平が言葉を失う。

礼也や光輔も同様だった。

「どうなってんだ……」

『あ……』

夕季がさらに一太刀を加える。今度はまともに返し技をくらい、空竜王が後じさった。

ただし、五分の力で。

『光輔！ 礼也！』

あ然とする礼也達の心呼び覚ます夕季の叫び声。

『からくりがわかった』

『ほんと……』

「何！ ほんとうか！」

ディスプレイの中、夕季が頷く。

『集束しよう』

『よし、わ……』

「おし、わかった！ カタあ、つけんぞ！」

礼也の号令とともに、再びガーディアンが集束する。

朝陽を浴び、その姿は勇壮に輝いて映った。

すぐさま臥竜偃月刀を上段にかまえるガーディアン、グラント・コンクエスタ。

音も立てず、地表を滑るように間合いを詰めるヴォヴァルを、必殺の領域で待ちかまえた。

「で、どうすんだ、てめえ」

前だけを見据え、礼也が奥歯を噛みしめる。

同じ体勢で夕季がそれに答えた。

「あたしの言うとおりにして」

「……ち、しゃあねえな」

礼也を見つめ、夕季が小さく頷く。

「んじゃ、いっとくか！」

「うん」

それを横目でちらと見て、少しだけ光輔が淋しそうな顔になった。その時、勢いをそぐ横槍が三人の心に待ったをかけた。

『おい、やめろ、おまえら！』

第十九話 『プライマル』 10

ミシミシという音が聞こえてきそうなほどスタンドマイクを強く握りしめ、桔平は画面上の夕季に覆い被さった。

「勝手なことはするな。もっと慎重に……」

『信じて』

表情も変えず、夕季が囁くように絞り出す。

『……今だけでいいから……。……お願い』

そのまなざしに宿した決意に気がつき、桔平が目を細めた。

「どうするの。もう駆け引きは通用しないみたいよ」

腕組みをしながら成り行きを静観するあさみを、ちらと横目で見やった。

「辞めるとか辞めないとか、そんなことで彼女の心が折れるとは思えないけれど、もうどうでもよくなったみたいね」

「……」

「もともと彼女は素行が問題視されていたわけだから、その気なら実績うんぬんは関係なくすぐにでも更迭できるわよ。私達にとって何より優先すべきなのは、ワンオフであることの希少価値よりも、組織の構造自体に悪影響を及ぼし、その根幹を揺るがしかねない不良因子を取り除くことだから」表情も変えずにしれっと言い放った。

「人類全体のまとまりと協力を方々へ呼びかけているこの重要な時期に、身勝手な思いつきで道理を覆すような人間には大事を任せられない。そういう論法には私も賛成よ。ましてや身内なら、なおさらね。まあ、あなたが人のことを言えた義理じゃないでしょうけれど」

「……こっちゃん、いつだって腹切る覚悟はできてるぜ。クビでも何でも望むところだ」ギリと歯がみし、画面を睨みつける。「いっそ

死ねって命令してみろよ。もろもろ全部被って、今すぐバケモンに特攻してやる」

「誰のために？」

「！」

ふふん、とあさみが鼻でせせら笑った。

「どうして私が、わざわざあなたの喜ぶような条件を提示しなければいけないの。死ぬ気なんてこれっぽちもないくせに」

「……」

「あなた、彼らに人類や世界平和のために死んでくれって言える？ 私は言えないわ。だってバカらしいもの。いくら功績を残して他人の記憶に刻まれたとしても、死んだ人間は二度とその世界に存在することはできない。記憶は残された人だけのものよ。それに、そこまでして守るに値する人間が、この世界中にどれだけ存在するの。みんなのためって言うけれど、そのみんなって、本当に望んで死んでくれる立派な人達より守られるべき存在なの。平和であることに気づかない人間が、平和を望んで悲しみにくれるかわいそうな人達に、いったいどれだけのものを分け与えていると言うのかしら。私にとっての世界は私の死とともに消滅するし、他人を守ることは己自身を守ることでもある。偽善や奇麗事を並べ立てるよりも、その方がわかりやすくていいんじゃない。あなたもそう思っているんじゃないよ」

「……おまえと一緒にするんじゃないよ」

「あら、ごめんなさい。てっきりそうだと思ってたのに」いたずらっぽく笑う。「あなた前に、王様になりたいって言ってなかったかしら？」

「……」

「彼女、きつとあなたの決定に従うと思うわ。何故かはわからないけれど、あなたのことを信頼しているみたいだから。ただし、最後のわがまを見逃してあげただけ。矛盾してるみたいだけど、わかるでしょ？ そういうの」ふいに真顔になった。「このまま利

用するか、見切りをつけるか、はつきりさせてあげたらどう？」

「……」マイクを引き寄せ、回線を切りかえる。「おう、しの坊か。市内の住民は全部地下へ逃がしたか」

腕組みをしたまま桔平を見下ろすあさみの口もとが、かすかに笑みをまとった。

「木場や鳳さん達にも伝えてくれ。メックはすべて陣場町周辺から撤退しろって」真っ直ぐに前を見つめるその瞳が光を放った。「そこが、決戦場だ！」

ランスを真っ直ぐかまえ、ヴォヴァルが直進する。その尖端はガーディアンの身体の中心を目標として定めていた。

「夕季……」

光輔が心配そうな声をあげる。

夕季がそれをきっぱりと切り捨てた。

「まだ」

「まだって……」

「礼也、受ける準備をして。左の下に向けてかまえて、徐々に体勢を右側へずらして、横からラクダの首を切り落とすイメージで」

「……。あっちが本体だったてことか」

「……そう」

「おっし！」

重心を落としてガーディアンが臥竜偃月刀を腰だめにかまえ、切先を後方へそらす。

ランスの反対側から、懷を両断しようという狙いだった。

「これで考え違いだってんなら、こっちが真っ二つだな。この距離からじゃ、避けようがねえ」

「大丈夫」夕季の瞳が強い輝きを放つ。「そうはさせない」

大質量のランスがガーディアンの胸もとを貫かんと襲いかかってきた。

それを紙一重でかわし、臥竜偃月刀をなぎ払おうとするや、ヴォ

ヴァルの巨体が発光し始める。

直前で夕季がストップを告げた。

「礼也、刃先を引いて！」

「んな！」露骨に顔をゆがめ、礼也が夕季を振り返った。「何言ってるやがる！　今さら！　ラクダやんじゃねえのか！」

「いいから！」

畏怖するように夕季を眺め、ギリと奥歯を噛みしめる礼也。

「礼也、夕季の言うとおりにしよう」

「光輔……」

光輔の落ち着き払った態度が、礼也の迷いを払拭する。

二人を眺め、夕季が声もなく頷いた。

「まったく、知らねえぞ、俺や！」

無理な体勢から強引に刃先を後方へ向けるガーディアン、グランド・コンクエスタ。

ラクダの首を左側面に残し、すり抜けるようにヴォヴァルの盾の正面へと滑り出た。

すると、いつの間にかヴォヴァルの発光は消滅していた。

「今！」

「今って？」

夕季の切迫した叫び声が、再び礼也の心を惑わせる。

「早く！　もう一度刀を前へ向けて！」

「なあろーっ！」

不恰好な姿勢で、泳ぐように長刀を盾目がけて這わせる。

しかしそのおもちやのような盾へ刃先が触れようとする間際になっても、ヴォヴァルの身体は発光しなかった。

「やっぱり」夕季がぐっ、と顎を引く。

「おい、夕季、戻すのか！」

「戻さないで！　そのまま振り切って！」

「盾だぞ！」

「いいから！」

その一連のやりとりはごくわずかな時間に集約されていた。
一瞬の判断の交錯。

しかし迷いのない夕季の確信が、三人の心に充分な余裕をもたらしたのである。

すれ違いざま、臥竜偃月刀を横一文字に振り抜くガーディアン。
その位置関係が逆転した時、すべてが決していた。

ヴォヴァルが左手に保持していた小さな盾が切りつけられ、上下に分断される。

それが魔獣ヴォヴァルの最期だった。

振り返る礼也達の眼前で、鈍色の巨体が音もなく大気中へ融けながら消えていく。

同じ頃、振り切っていたガイア・カウンターから、発動を示すパターンが消滅しつつあった。

動くこともままならず、その光景を畏怖するように眺める三人。

「あれが、……本体だったのか……」

礼也がごくりと唾を飲み込む。

顔も向けず、夕季が頷いた。

「偶然当たった攻撃がヒントになった。盾を狙えばヴォヴァルの身体は光らずにダメージを受ける。たぶん、全身に受けた攻撃を盾からはね返していたからだと思う。その反対に、盾に受けた攻撃は、すべて本体へと通る」

「……やるじゃねえか。てめえのくせに」顎の下の汗を拭い取り、にやりと笑う。「そんなん、オッサンじゃなかったって誰も信じねえぞ」

珍しく誉めようとする礼也に、夕季が複雑な様子で目を細めてみせた。

マイクスタンドを放り出し、桔平がどっかと腰を下ろす。

「やるわね、彼女」

あさみの呟きに、表情もなく目を向けた。

「ついでにうるさい政府の連中を煙に巻く方法も聞いておいたらどう？」

あさみは妖しげな笑みをたたえ、廃墟と化した街の風景を眺め続けていた。

「また特別予算を組まなくちゃね。あの子達にボーナスでもあげておく？　一億円ずつくらいなら役員の賞与カットで何とかなるわよ。功績と貢献度を考えたら、百億円でも安いくらいだと思うけれど。」

あなたのお給料から毎月差し引いておく？」

「……おちよくってやがんのか」

「そうとも言うわね」

「……」

「冗談よ。ちょっと試してみただけ。さっきあなたに言ったことは本音だけれどね」

「……。ざけやがって……」

押し出すように発せられた桔平の声に、あさみが顔を向ける。

「空竜王のあんな貧弱な攻撃じゃ、すべてにダメージが通ってたかどうかもわからない。もしあの盾がヴォヴァルの罠だったら、今ごろ……」

「今ごろ世界が滅んでいたでしょうね」

「！」

目を見開き注目する桔平に、あさみがいたずらっぽく笑ってみせた。

「どのみち駄目だったとしたなら、腹をくくって一か八かを実践した彼女達を誉めてあげてもいいんじゃないの。よくやったって言って、思い切り抱きしめてあげたら。嘘でもきくと喜ぶわよ。お金はともかくとして、それくらいしてあげてもバチは当たらないんじゃないの。それとも、本当に親心が出ちゃったとか？」

「何を……」

「幸運なことに、愚かな私達は選ばれた人達の活躍で、また人類滅亡の危機を回避できたわね。お祝いに回らないシースーでも食べに

行く？　あなたのお給料から差し引いておくけれど」

「……」

「これも冗談」ふっと表情を和らげ、桔平に背中を向ける。「後始末のことを考えるととてもそんな気にはなれないわ。今日はもう帰っていいって、彼らに伝えておいて。どうせ学校も臨時休校でしようし、古閑さんも一緒に午後から代休出しておくから、何か食べに連れてってあげたら」

部屋を出て行くあさみの声も耳に入らず、桔平が、ぐっ、と奥歯を噛みしめた。

「あのバカ野郎……」

第十九話 『プライマル』 11

朝の訪れとともに、世界はまたいつものどおりの光を取り戻していた。

魔獣撃退に浮かれる基地内で、桔平は一人複雑な表情で無人のメック・トルーパー事務所に足を踏み入れた。

憤りのように深く息を吐き出し、自分の席へどっかりと座る。

眩しい陽射しを目を細め受け入れると、以前ドラグノフ達と交わした雑談が脳裏をかすめた。

『柊さんはさしづめ、できの悪い兄貴ってとこかな』

『なんだと、南沢、てめえ!』

『駄目駄目長男だな。俺達とは血のつながりのない、再婚した駄目な父親の連れ子の駄目な息子だ』

『駒田……』

『その意見には私も心から賛同する』

『おい、ドラヤン』

『誰がドラヤんだ……』

『だがな、柊、安心しろ。こんな腐れちようちんみたいな兄貴でも、あいつは見捨てたりしないから』

『誰が腐れちようちんだって、鳳さんよ……』

『哀れすぎて見捨てることができないうだろうがな。ガッハッハ!』

『あんたも充分哀れな部類だろ。再婚した駄目な父親ってのはあんたのことだぞ』

『何! 駒田、貴様! 許さんぞ! きーさーまー!』

『いや、もっと早く気づけよ……』

『あーみーまー!』

『おまえら、一応会議中だぞ……』

『そうですね、鳳さん。俺もそのとおりだと思います』

『何がだ、大沼！』

『沼さんまで……』

『……いえ、夕季のことですが』

『お、珍しいな、おまえ』

『彼女はそういう人間だ。いつだってそんな素振りも見せずに、俺達のことをちゃんと気にかけてくれている。だから俺達は、あいつのことを放っておけない。な、真吾』

『ッス！』

『俺達があいつのことを信頼している限り、あいつは俺達を裏切らないはずだ。もし夕季に何らかの迷いがあったのなら、それはおそらく俺達の責任だろう』

『今日はよくしゃべるな、大沼』

『ええ、俺は彼女の尊敬する立派な先生ですから』

『おい、いいのか、柊、言わせっぱなしで』

『……』

『おい、柊……』

『……』

ふと、机の引き出しがわずかに閉まりきっていないことに気づき、手をかけた。中を覗き込むと何かが奥に挟まっているのが見える。

手を伸ばしそれを取り出す桔平。

潰れたチョコレートチョコレートの箱だった。

表情もなく包装を破り取る。すると中から一枚のメッセージカードが現れた。

そこには、こう書かれてあった。

『桔平さんへ』

『いつもご馳走してくれてありがとう。毎日忙しくて大変だろうけれど、体に気をつけて頑張って下さい』

『夕季』

きらびやかな装飾も絵文字もない、飾り気のない、夕季らしいメ

ッセージだった。

物憂げに目を細め、もう一度桔平が深く息を吐き出した。

満身創痍のオビディエンサー達が基地へ帰還する。

が、その顔は降りそそぐ朝陽同様、晴れ渡っていた。

「つたく、てめえはまたガケップチしやがって。最初っからビーム撃つときゃよかったじゃねえか」

礼也の悪態を夕季がいなす。

「こっちがそれを読んでいることが奴にわかったら、また逃げられると思ったから。あいつの本当のシールドはあの小さな盾じゃなくて、ランスと本体の方だった。あの長くて大きな槍と巨体にこっちの攻撃はすべて吸収され、弾き返される。それにモーシヨンの大きい攻撃は隙も多い。反転されて、盾をガードされたらアウトだから」
「んで、最後に慌てて一発くらってみせたわけか。わざと」

「慌てたわけじゃない。……白々しいかとは思ったけど」

「俺らに考え読ませねえたために、無理くり別のことを考えてやがったな。何が、ラクダだったの」

「……」

「え？　どういうこと？」

あまり参加できずにいた光輔がおそろおそろそれを口にした。

「どうしてそんなことする必要があんの？」

「わかんねえか、てめえは」

「へ？」

「おまえみてえな直結野郎がそれ知ってたら、意識してちらちらしちまうだろが。バレバレのテレフォンパンチになっちまったら、奴にスカッとかわされて、はいおしまいだ」

「……なるほど」

「ほんと、おまえはよ」

「……。どうせ俺はイエローなんだけど……」

いじける光輔を尻目に、礼也がもう一度夕季へと向き直った。

「にしてもよ、何もあんなギリギリの攻撃でなくても」

「自信があった」

「嘘こけ。おっかなびっくりだったくせによ」

「……。そんなことない……」

「はあ！」

「あ、でもさ、桔平さん、かなり怒ってたような」

「おう、どやされっぞ、オッサンに」

夕季の眉がぴくりとうごめく。二人へ顔も向けずに呟いた。

「平気。たぶん……。また謝ったふりするからいい」

「やっぱ、ふりだったのか、こいつ……」

「ちゃんと説明してからやればよかったのに。そうすればあんなに怒らなかったと思うんだけど」 光輔がやれやれと言わんばかりに夕季を眺めた。「あ、それだと俺らにもバレちゃうか。確かにチラ見しちゃうかもな、俺……」

「……言いたくなかったから」

「何、意地になってんだかよ」

「……」 顔をそむけたまま、夕季がかすかに口を曲げてみせた。

「やっぱり一回きちんと謝つとした方がいいんじゃないかな。結構本気っぽかったし、本当にぶつとばされるかも」

「そりゃねえだろ。こいつはオッサンのお気に入りなんだからよ。」

逆に、よくやったって、頭なでなでしてもらえんじゃねえか」

「礼也がしてもらえば」

「ああっ！」

皮肉たっぷりの礼也に、夕季がいつもどおりの受け答えをしてみせる。

それから夕季が、ふっ、と表情を和らげた。

淋しげな瞳を二人から遠ざけながら。

「私達に利用価値があるうちは、誰も本気で怒ったりはしない。でないと自分達が困るから。信用とか信頼とかも必要ない。結果さえ出していれば、文句を言う必要もないし。私達はただそれだけのつ

ながりなんだと思う」

「いきなり何言ってるんだ、てめえ」

「上辺では理解を示すようなことを言っているけど、心の中では何を考えているのかわからないってこと」

「そんなのこっちゃだって同じだろうって」

「……。そうかもしれない……」声のトーンを落とす。ため息をつき、続けた。「お互いの利害が一致しているから、かろうじてバランスは保たれる。実績を出し続けていれば、捨てられることもない。わかってるのはそれだけ。きつとみんなそう思ってる。あの人も。利用価値があるうちは、だけど。でも今はそれが一番大事なことになるだと思っ……」

「はあ！」

夕季のぼやきを咀嚼しきれないまま、腑に落ちない様子で光輔が首を傾げた。

「……そう言われてみれば、桔平さん、最近あんまり怒らなくなっ
たかも」

「はあ！ 何言ってるやがる。ずっとイライラ怒りまくってんじゃないかねか」

「あ、本気でって意味だけど」

「ホン気もウソ気もねえだろ！」

「うん、まあ……」

自分の考えをうまく消化できずにいる光輔をちらと横目で見てから、夕季が目をつ伏せた。

「仕方ないよ」

「え？」

「もう、怒る必要がなくなったから。……他人のために」

「おまえよ……」

「もし本気で私達を降ろそうとしてるのなら、それも仕方ないことなのかもしれない。所詮私達は単なるプロトタイプにすぎないから。いろいろなプロジェクトが進行していて、私達のデータがそれにフ

イードバックされてることくらい知ってる。私達はその礎にさえなればいいはず。次へつながりさえすれば、なくなってもいい存在。……それだけでしかなかったってことだと思う……」

「……」

その時、三人の心が緊張感につつまれた。

真剣な面持ちの桔平が、近づいて来るのが見えたからだだった。

他の二人には目もくれず、無言で夕季の前に立ち、桔平が厳しい顔つきで見据えた。

夕季も同じ表情でそれと向かい合った。

その疲れきったまなざしを、眉一つ動かすことなく桔平が受け止める。

夕季の目の下には隈が浮き上がっていた。極度の緊張状態が続いたせいもあったが、肉体的な疲労以外の何かが関係しているようでもあった。

ふいに桔平がハリセンを取り出し振り下ろす。

躊躇なく叩き込まれた一閃は、それまで聞いたこともないほどの激しい打撃音を撒き散らし、真っ赤な厚紙の束を夕季の頭頂でちりぢりに飛散させた。

息をのみ、驚きに目を見開く光輔と礼也。

何より、夕季のそれが一番大きかった。

すかさず気持ちを立て直し、夕季が、キッと桔平を睨み返した。

しかし桔平の表情は、わずかにもゆらぐ気配を見せなかった。それどころかさらに激しく夕季を睨みつける。

「今度勝手にあんなバカしやがったら承知しねえぞ」

凄みのある声で、桔平が平坦にそう告げる。

夕季は乱れた頭髪を直すこともなく、口を結び、ただ悔しそうに桔平の顔を睨み続けていた。

互いに退くこともなく、今にも噛みつかんばかりの憤激をぶつけ合う二人。

光輔と礼也は何もできず、黙ってことの成り行きを見守るだけだ

った。

沈黙が気まずさを倍加させる。

時の経過とともに、夕季の瞳の奥で感情がかすかに揺れ始めていた。

やがて根負けしたように口を開く。

「……ごめんなさい」

眉間に皺を寄せ、桔平が静かに夕季を見据える。

背中を向け、去り際にぼそりと呟いた。

「メシ食いに行くぞ……」

それから、足を引きずるように桔平が歩き出した。

三人は沈黙のまま、その厳しく、どこか物悲しげな背中を見守り続けていた。

しばらくして、夕季がその後を追って、とぼとぼと歩き始める。

一度だけ手の甲で目尻を拭ってみせた。

了

第十九話 『プライマル』 11 (後書き)

お読みいただきましてありがとうございます。

スローモーションで大きな展開もなく、ロボットものではないがロボットもろくろくからめられず、その他もろもろ恐縮ですが、ゆるゆるつとまたお越し下さい。

次話、『絶望のトリガ』へと続きます。

第二十話 『絶望のトリガ』 OP

樹神雅は暗闇の中、一人膝を抱え込むように座り、顔を埋めていた。

外の物音に気づき、目線を向ける。

睨みつけるその瞳から、涙が頬を伝って落ちていった。

トントン、と軽く手で叩く音がする。

その後、陵太郎の声が聞こえてきた。

「コンコン」

「……」

「コンコン。誰かいますか？」

「……」

優しく問いかけるような陵太郎の声にも、雅は反応しようとしな
い。

それでも陵太郎は調子を変えることなく、朗らかに次の言葉を繰
り出した。

「ひょっとして、この中に笑顔の素敵な女の子がいませんか？」

雅は暗闇からその声の先を睨みつけていた。

やがて押入れのふすまが、すっと開く。

涙の通り道を手の甲で拭いながら、雅が顔を出した。

涙目のまま雅が、にゅっと笑うと、陵太郎も楽しそうに笑ってみ
せた。

「やっぱりいたな。自称、世界一の笑顔が」

その眩しさに、沈んでいた雅の心が晴れ渡っていく。

「にへへへ」と嬉しそうに笑った。

他に誰もいない薄暗い部屋の中で雅が立ちつくす。

棚の上に飾られた陵太郎の写真に目をやり、静かに笑いかけた。
軽く拳を握り、ノックの真似事で宙を叩く。

「コンコン、誰かいますか？」

当然誰からの返答もない。

もう一度、それを繰り返した。

「コンコン。誰かいますか」淋しそうに笑い、写真の中の笑顔を見つめた。決して返ることのない、涼しげなまなざしを。「誰か、いませんか……」

唇がわなわなと震え始める。

それから雅はベッドにうつぶせて、呻くように泣き出した。

第二十話 『絶望のトリガ』 1

「ほんとにこのVの字眉毛はよお」

メガル本館内の職員食堂で、桔平の声に夕季が口をへの字に曲げた。

「てめえはいつもいつもブスツとしてやがって。そんなんだからメル友とかもできねえんだ」

「うるさい」口の中でカツカレーをもごもごさせながら、W眉毛で桔平を睨みつける。「自分だっていないくせに」

「ああ、何言ってやがる。俺のケータイにはみっちゃんからのメールがバンバン入ってくるぞ」ギリギリと睨み返した。「おはよー、とか、おやすみ、とかな」

「全部定型分だけどねえ」ミートスパゲティをちゅるるっと吸い込み、雅が楽しそうに笑った。「しかも時間がくるとオートで送っちゃうやつです」

「でもよ、たまに長いのもくれるよな」

「長い時は百パーご飯の催促だけどねえ」

「こないだあれだろ？ 今日泊まりに行ってもいい？ ってくれたよな？」

「ああ、しいちゃんと間違えて送っちゃったやつね」

「おお、わかってたんだけど、なんかドキドキしちゃったな」

「そんなのあるわけないのにねえ」

「ないのにな、あっははは！」

「あっははは」

「……」

夕季があきれ顔で桔平を眺める。

それに反応し、天井を完食した桔平が露骨に顔をゆがめてみせた。

「まったく。ちったあ、みっちゃんみてえなかわいい顔できねえのか。口もと、こう、にゅっと上げてだな、こんなふうに……」

キツネうどんをたぐり寄せ、桔平が振り返る。

すると凄まじいへの字口で雅が睨みつけていた。

「わーお！　すげえへの字口！」

「今、あたしの方ちらちら確認しながら言ったよねえ」

「おうよ」得意げに胸を張った。「基本だからな」

「基本だよねえ」

「何の話、してんだろね」夕季の隣で、大盛りカツ丼を手にした光輔が気の毒そうに目を向ける。「どうせくだらないことだろうけど……」

「知らない」

「んだ、てめえは！」

うどんをズハズハかきこみながら、桔平が不本意そうに夕季を見下ろした。

「てめえは十九にもなって、もっと大人の対応とかできねえのか」

「十六！」

「十六だあ！　嘘つけ、みっちゃんは十九だっつってたぞ。なあ」

「確かに言いました」

「みやちゃん……」

「てめえ、年ごまかしてるだろ」

「ごまかしてない」

「嘘こけ！　なんちゃって女子高生が。それでシチュ萌え野郎のドキドキハートを撃ち抜くつもりか。黒崎みたいな。だまし討ちだな、てめえ！」

「何バカなこと言ってるの！」

「バカあ！　俺がバカだと！　おもしれえ、もっぺん俺の目を見て言ってみろ！　言えんのか！　ああ！」

「このバカ！」

「ああ！　ストレートすぎだろ、てめえ！　実にせつねーぞ！　バ

カとか直で言われた方の身にもなってみろ！」

「……ごめん」

「いや、そういうのも逆につらい……」

やれやれという顔で光輔が二人を見比べた。

「夕季、俺と同年なんすけど……」

「そんなの知るか！ バカ！」

「……」

「てめえ、本当は二十二なんじゃねえのか。どんだけダブってやがんだ」

「それだとしいちゃんより年上になっちゃうけどねえ」

「あれ？ しの坊、二十五じゃなかったっけ？」

「実はお兄ちゃんの二コ上だったという後付け設定で」

「くそ！ やっぱりあいつも俺を騙してやがったのか！」

「ねえ桔平さん、あたしは？」

「ん？ みっちゃんはプリーティーだから、十五くらいだろ？」

「ピンポン！ 大好き！」

「あんでもねえよ」

「いや、ピンポンじゃないし……」 丼をテーブルに置き、光輔がため息をつく。「もうすぐ高校卒業じゃん」

「てめえ、言いがかりつけてんじゃねえ！」

「訴えるわよ！」

「……」

「ねえねえ、光ちゃんは？」

「んあ？」 片手でピザを持ち上げ、もう片方の手で鼻をほじりながら桔平がどうでもよさげに答える。「んなもん、どうでもいいだろ」「ねえ、どうでもいいよねえ」ちゅるるる、ポンツと、天使の微笑みで見つめた。「ちなみにお願いだからその手で触らないでくださいねえ」

光輔が困ったような顔を夕季へ向ける。

「……どうしたらいいんだろねえ」

「知らない。ごちそうさまでした」

光輔にそっけなく答え、夕季はプンスカと頭から湯気を出しながらトレーを持って行ってしまった。

畏怖の表情で光輔が振り返る。

すると雅と桔平は普段どおり、どうでもいい話に花を咲かせていた。

遅めな昼食のため、食堂には人がさほどいない。桔平の大声と雅の笑い声だけが、広い場内に響き渡っていた。

「何があったんすか？」

「んあ？」オムライスをガバツとすくい上げ、鼻の穴に指を突っ込みながら桔平が不快げな顔を向ける。「何がっておまえ、あの野郎せっかくビッグニュース教えてやったてのによお」

「くれぐれもその手で触らないでくださいねえ」

「なんすか、ビッグニュースって」

「それがよ、おまえ。上町のホコシャッチつつうサ店に、なんと、城ノワールが新メニューで入ったつつうじゃねえか！」

「……。それで？」

「それでってよ。普通それ聞いたら、みんな大喜びだろうが。ひやつほー、てなもんで。ウェーブがスタンディンオベエションだぜ」

「……。なんすか、しろのわーるって」

「はあ！」フォークに刺したエビフライをぷらぷらさせ、桔平が光輔を睨みつけた。「てめえ、城ノワールも知らねえのか！ 高校生にもなって」

「……はあ、すみません……」

「非常識な奴だな」

「非常識だよねえ。白のワール知らないなんて」

「なあ」

「ねえ」

「……。おまえ知ってんの」

「ちっとも知らないですよ」

「……」

砕けた心を拾い集め、光輔が何とか自分を立て直す。

「……で、あいつがどうしたんすか」

「あいつもおまえと同じだ。そんなのちっとも知らねえ、とか又カしやがるからよ。ガツンと言ってやったわけだ。なあ、みっちゃん」

「ねえ、桔平さん」

「……いや、おまえも同じこと言っただけど」

「おい、言いがかりつけてんじゃねえ！」

「訴えるわよ！」

「……。好きにしてよ……」

「食いに行くぞ、つつつたら、よくわからないからいらない、だつてよ。どうということだ！」

「どうということなのねんのねん！」

「……」

「ったくあの野郎、なんか勘違いしてやがる。標準で上から目線だよ。笑いの一つもとれねえくせに、いっぱしの女子高生ぶりやがって。悔しかったらモノマネの一つもしてみろってんだ」

「別に悔しいとかじゃ……」途中で気がついた。「何言っただんすか？」

「何って、おまえよ！」

「じゃあ、あたしからね。んんんっ……」得意げに胸を張り、雅がノドの調子を整える。「あどね、あどね！」

「雅、何やってんの……」

桔平がポンと手を叩いた。

「わかった、みっちゃん。相撲取りの子供の時の真似だな！」

「ぶぶー！ 正解はてんぱった時のしいちゃんでした」

「ちつくしよう。俺も負けねえぞ！」

「頑張って、桔平さん」

「あの、……」

「んんんんっ！……」すまし顔でノドの調子を整えた。「マーン

グロウンマイニャー！」

「まんぐろーぶ、にゃにゃ？」

「……なんすか、それ」

「ああ！」キツとなって光輔を睨みつける。「喋る猫の真似に決ま
ってんじゃねえか！ 常識だぞ！」

「いや、知らないっすって……」

「ピンとこいよ、ピンと！」

「はあ……」

「あゝ、そっくり」

ポンと手を叩いた雅に、桔平が歓喜の表情を向けた。

「だろ？ みっちゃん。こないだ、おもしろビデオ大賞でやってた
んだけどよ。猫のくせに、ほんとに日本語喋ってんだもんな。かゝ
わいいよなあ！」

「うん、かゝわいいよねえ」にこにこにこ。「観てないから知
らないけどねえ」

「あ、やっぱそうか！」

「そうです」

「あっははははー！」

「あははははは！」

「何がおもしろいんすか。いったい……」

「しの坊に録画頼んどいたら、あいつまた失敗しやがって。たまた
ま木場が録ってたからよかったようなものをよ。取り返しつかねえ
ことになるよだったぞ、ホント。観れてよかったぜ。昨日も夜中
まで二人で大爆笑だ」

「やっぱり。しいちゃんおっちょこちよいだから、その時あたし
が被せて録画しちゃったの気づかなくて、終わってからオロオロ
してた。また桔平さんに怒られるって」

「マジか。ほんとあいつはおっちょこだよなあ」

「ねえ」

「キツく叱ってやったら涙ぐんでやがったけどな。おかげで後ろか

ら夕季に飛び蹴りされて、そんな時の記憶がねえ」

「あっははは！ どっちもどっちだよ」

顔を引きつらせ、光輔が雅を横目で見やった。

「……おまえのせいじゃんか」

「そうですよ」

「……」

食堂で顔を突き合わせ、桔平が雅に笑いかける。

「ほんと、みっちゃん的笑顔は無敵だな。嫌なことなんて全部ふっとんじまうよ」

「やっぱり？」

「……そうかな」雅の隣で光輔が辟易しながら呟いた。「いじわるで全部ぶっとんじやう時ならあるけど……」

「そんなことないんだよ。昔っからかわいかったんだよねえ。目がきよろつとして、口もともにゆつと上がってて、まるで天使みたいだって」

光輔の目が点になる。

「誰が？」

「あたし」

「……。雅？」

「うん」

「自分で言っちゃうの？」

「ええ、まあ」

「……ふん。……」

「……」雅が不機嫌そうに顔をゆがめた。「ええ〜！ 何それ！ びっくりだよ、もう！」

「……いや、こっちがびっくりなんだけど」

「いや、みっちゃんが正しい」桔平が腕組みをしながら、うんうんと頷く。かたわらのアツアツおでんに手をつけた。「みっちゃん的笑顔にはインド人もびっくりだ。あちち！ ふほっ！」

「だしょ。あ、たまごくださいな」

「よく食うな。ほれ」

「ありがとう。あちち！ ほっほふっ！」

「はっはっは。あちちっ！ ほほっほっ！」

「……熱いのわかってるくせに、なんで一口でいこうとするんすか？」

「そりやおまえ、基本だからだ」

「基本だよねえ」

「へえええ……」

「おまえも食え、ほら、ガンモだ」

「あちちちっ！」 ガバツと立ち上がり、光輔が泣きそうな顔を突き出す。「そこ、口じゃないす！」

「……いいリアクションするな、こいつ」

「ねえ、負けてられないよねえ」

鼻の頭をおしぼりで拭きながら、光輔が恨めしそうに二人へ目を向けた。

それをおもしろそうに眺め、雅が大根へと手を伸ばす。

「ちなみにあたしは毎日世界一の笑顔を見えています」

「……どこで？」

「うちで。んゝ、ンマイニャゝ。あ、しまった……。あちちっ！」

「駄目だろ、みっちゃん。忘れてちゃよ」

「てへ、ペろん」

「ペろんは口で言わなくてもいいけどな」

「なんと！」

やれやれ顔の光輔が、ガンモドキをほおばる。

「……それひょっとして、毎日鏡で自分の顔見てるってこと？ あ、ウマ！」

「ピンポン、正解！ 五万点さしあげます。今のところ光ちゃんがトップ」

「俺は？」

「桔平さんは三点」

「あれが三点かよ！　今回はレベルたけえな！」

「今から十問は全部五点だけど、最後の問題は四万点だから頑張っ
てねえ」

「はっはっは、んじゃ最後の問題だけでいいじゃねえか」

「でも全部正解しても、桔平さんは四万飛んで五十三点だけどねえ
」

「何！　それじゃ逆転のチャンスねえだろ。ちくしょう、まだオー
プニングクイズなのにすでに光輔の優勝確定か。出来レースじゃね
えか！　やるせねえな」

「光ちゃん、おめでどう」

「いや、ちっとも嬉しくないし」恨めしげに見やる。「このいじわ
るな顔が世界一って言われてもなあ……」

「わかってないなあ。そこが紙一重で世界一な感じなんだけど」

「……何言ってるんの、かな」

「わかってるくせに！　にこっ」

「ウザ……」

「俺もできるぞ！　アルカイツクぽくなっちまうがな」

「わあ、やって、やって」

「よし、んんん……」

桔平の目がキラリと光る。

「にこっ！」

にたりと笑った。

「わあ、不気味。マイナス百万点」

「ちくしょう。せめて三点だけはキープしてきたかったのによ。こ
のビハインドはでけえな」

「残念。じゃあ、おごってください」

「まだ食うのかよ……」バナナを口に押し込みながら、桔平があき
れたように雅を眺めた。「仕方ねえな。デザートでも食いに行くか」
「やたっ」

「……いいんすけどね、別に」はあゝ、とため息をつく。「どう

でもいいけど、なんでおまえっていつもニヤニヤしてんの？」

「ニヤニヤじゃないよ。ニコニコだよ」

「いや、どう見ても意地クソ悪そうなんだけど……」

「失礼な。光ちゃんのくせに！」

「そうだ、光輔のくせによ！」

「……」

「んじゃ、みっちゃん。こんな奴ほっというて城ノワールでも食いに

……」

「パス！」

「……ぱす？」

第二十話 『絶望のトリガ』 2

昼食を終え、校内の渡り廊下で光輔は、持てざる男、曾我茂樹と雑談を交わしていた。

「いいよな、おまえは」

「何が？」

「古閑さんと仲良しだよ」

「仲良しって言うか、ただの顔なじみただけなんだけど」

「ありえねえだろ、そんなシチュエーション。ただの顔なじみってな、普通にもっとブサイ子ちゃんだろ」

「何が？」

「あと普通にデブっちよりんとか」

「何言ってるの、おまえ」

「だから、ギャルゲーじゃあるまいし、なんであのレベルとおまえみたいなのが知り合いだって話でさ」

「顔の話？」

「顔の話だよ！　なんだよ、おまえ、ブ男のくせに！」

「俺がブ男ならおまえもその類だって」

「うまいこと言った気になるな！」

「……なんだ、それ」

「もうう！」

「いや、もうう、って……」

どうでもよさげな茂樹の言いがかりに光輔が眠たそうな顔を向ける。

二月だと言うのに陽射しが暖かだった。

ヴォヴァル討伐からさほど日は経っていないものの、関連地区から離れた地域では、とりあえずは平穏な日々をすごすことができ

いた。

「ふぁゝあ」

光輔があくびをする。

すると茂樹の後ろから、雅がひょっこりと姿を現した。

「呼んだ？」

「あ、雅」

緊張のあまり茂樹が直立不動となる。

それをいたずらめいたまなざしで見つめ、雅が楽しそうに笑った

「はぁゝい。出まして来まして、みやびちゃんよ」

「……」

硬直する茂樹にかわり、光輔が困った様子でツツコミを入れる。

「雅。何だかよくわかんないけど、イタイよ」

「そう？」

「うん。なあ、茂樹、……って、何照れてんの、おまえ！」

もじもじしながら茂樹がニソニソと笑った。

「いや、アリかなって思って」

「何が！」

「アリだよね？」

「アリっす！」雅の顔を熱く見つめ返す。「アリまくりっす！」

「アリまくりまくりすていだよね」

「有馬栗馬クリスティーンです！」

「何それ！」

「ふが……、へっぷしっ！」陽射しの眩しさに茂樹がくしゃみを撒き散らす。「へっぷ、へっぷしん！」

それに再び雅が反応した。

「呼んだ？」

「何が？」

あきれ顔の光輔を押しわけ、勝手にスパーク中の茂樹がひとりで踊り出てきた。

「呼びました、呼びました！」

「あ、やっぱり」

「何が！　どういう意味！」

茂樹が光輔に振り返る。

「さあ、よくわかんないんだけど……」

「おまえさ……」

「ええ！　知らないの」あきれ顔の光輔の横で、びっくり顔の雅が勝手に騒ぎ出し始める。「くっしゃみ一つで、涙にもろいいい」

「……知らないって」

「思わずびっくりだよ」

「こっちがね……」

「曾我君もびっくりだよね？」

「びっくりだす！」

「おまえさ……」

「曾我君なら知ってるよね」

唐突に雅に振られ、茂樹が碎け飛ぶ。

「ああ、知ってます、知ってます！」

「マジで？」

「……いや」

「おまえさ……」

二人を眺め、雅がいじわるそうに、ふふふ、と笑った。

「あなたがご主人様ですね。わちきは笑いのツボからふいをついて飛び出した、いじわるみやびちゃんです。軽い感じでみやびちゃんと呼んでくださいまし。合コンとかのノリで」

独自ワールドにただ押し込まれるのみの茂樹に、再び緊張モードが発動した。

「あ、み、み、みやびちゃ……」

「何なりとお申しつけを。さん、はい！」

「は、はい。……。じゃあ……」

「でもその前に、すびませんが、のどが渴いてしまったのでジュースを買ってきてただけませんか、ご主人様。今、あらぴんからぴ

んすかんぴんぴんなの」

「はい、わかりました!」

一瞬のタイムラグもおかず、弾かれたように茂樹が、ぴゅー、とダッシュする。

それを見て雅が焦ったように呼びかけた。

「あ、ちよっと、待って!」しまったという表情。「オレンジでいいです!」

「……。こんなことしておもしろいの?」

冷やかなまなざしで雅を見下ろす光輔。

それを楽しそうに受け止め、雅が言い放った。

「うん。曾我君ってかわキモいんだもの。ついからかいたくなっちゃう」

「……今、キモいつて言った?」

「確かに言いました」

「……。すかんだこめら……」

「それからドシタノ!」

放課後、下校のため昇降口へと向かう夕季を見かけ、小川秋人が声をかけようと近づいて行く。

その時、夕季の背中を追いかけるように、光輔が滑り込んで来た。

「夕季、一緒に帰ろ」

「……」ぶすりと見上げる。「また部活休みなの」

「何言ってるの。試験休みでどこの部も休みだって。野球部は明日までだけど、どうせ茂樹とか勉強したって同じだろうしさ」

「人のこと言えないくせに」

「それはごもつともな意見だと思う!」

夕季の前で楽しそうに笑う光輔の姿を横目で見ながら、秋人は肩を落としながらその場を後にした。

「あ、穂村君」

通りかかった女生徒の一人が光輔に声をかける。

その隣の生徒も嬉しそうに手を振ってきた。

「あ、木下さんに丸もっちゃん」振り返り、笑い返す。「こないだはチョコありがとね」

「いいよ、別に。お返し期待してるから」

「マジで」

「マジだよ。ね、丸もっち」

「だよ」

「ははは」楽しそうに笑った。「丸もっちちゃんのくれたの手作りじゃん。俺泣きそうだったよ」

「なんで泣くの」

「いや、その心遣いに光輔感げけ……」

「あ、噛んだ」

「噛んだ、噛んだ」

「いや、噛んでないし」

「噛んだよ」

「噛んだ、噛んだ」

「まあ、体育コースだから……」

「関係ないよね」

「ねえ」

「あはは……。あ、木下さんのくれたの、あれ、高いやつだろ？」

「そんなにだよ」

「そっかな。夕季のより高そうだったような。夕季のもうまかったけどさ。ちっちゃかったけど」

「光輔！」

思わず光輔に噛みついた夕季に、二人が意外そうな顔を向けた。

「何？ 穂村君、古閑さんから貰ったの？」

「あ、うんうん。箱が潰れたやつかと思ったら、ちゃんとしたのくれた。案外いいところあるな」

「光輔！」

「なんで顔真っ赤なの？」

「……」

「いいなあ」

「へ？」

クラスメート達の何気ない呟きに、光輔と夕季が振り返る。

「私も木ノッピも古閑さんにあげたんだよ。いつもわからないところ教えてくれるから。飯田ちゃんも。ねえ」

「うん、だよ」

思いがけない展開に、夕季の口もとと背筋がピンとなった。

「……。……。ありがとう……。あの、あたしも……」

すると二人は申し訳なさそうに作り笑いを浮かべてみせた。

「あ、いいの、いいの。私ら好きでやってるだけだから」

「そそ、お礼、お礼。またわからないところ、教えてね」

「……うん」

「んじゃあさ、夕季」ナイスアイデアをひらめかせる光輔。「ホワイトデーにお返しを……」

夕季に思い切り睨みつけられ、光輔の心が後退する。

「……するから、楽しみにしててね」

「……」

校庭へ出て、光輔が仕切り直す。

「あのことだけどさ」

声をかけた光輔に、夕季が不機嫌そうな顔を向けた。

「何言ってるんですか、このバカちゃんは」

「え……」

「この人マジウザいっス」いじわるな声が次々と光輔に襲いかかる。

「いっそのあたりで死ねばって感じでスなあ」

「……」

夕季は困ったように光輔を眺めていた。救いを求めるまなざしではあ、とため息をつき、光輔が夕季の後ろを覗き見た。

「……やめれば、雅」

すると小悪魔の笑みを浮かべ、雅が飛び出してきた。

「よくわかったな。やほー、光ちゃん。出まして来まして、いじわるみやびちゃんよ」

「……何、その嫌がらせ」

「あたしが言っただんじじゃないよ。夕季の心の声をアテレコしてただけだよ。ね、夕季」

「みやちゃん……」

「だって、そういう顔してたし」

「あのね……」光輔が腕組みをする。「確かにそういう顔してたけどさ」

「光輔……」

その時、さらなるかしましさか二人を襲撃してきた。

楽しそうに笑う雅と、同じ表情で笑い、光輔らを取り囲む、その友人達が三人。

包囲が完了し、雅が光輔を友人達へ紹介し始めた。

「皆の衆。この子が光ちゃんです」

すると似た者三人組のテンションが一気にブレイクした。

「ああ、この子が泣き虫光ちゃんですな」

「かわいいねえ」

「かわいいわあ」

「はは……」光輔、苦笑い。「……どうしょ」

「泣いちゃうかな。ねえ、泣いちゃうかな」

「いや、泣かないって……」

「あ、しゃべった!」

「しゃべったね。かわいい!」

「ねえ、かわいいー!　しゃべってる!」

「……」

「泣いちゃうかもねえ」雅が楽しそうに笑った。「泣くとありやريانこりやريانで超音波出しちゃうから、周りの人は気をつけてください」

「マジで！ 読めねえ〜！」

「ちよえ〜！ 恐ろしいな、光ちゃん！」

「誰かバリヤー、バリヤー出して！ このままだとやられちゃう！」
「出ないし、そんなん……」 顔を引きつらせ、光輔が声を上ずらせる。「……ウザ」

続いて夕季がロックオンされた。

「こっちが夕季先輩でござる」

「この子がでござるか？」

「いかにも。この子が古閑夕季先輩でござる」

「このコガコガ？」

「頭良くて、美人で、十九歳の？」

「そうです」 頷く雅。「去年まで中学生だったのに十九歳。不思議」

「一年生なのに十九歳で先輩でありますか？」

「そうです」 頷く雅。「あたし達より二コ下なのに十九歳。不思議」

「みやちゃん！」

夕季の抵抗に雅が目丸くする。

「え？ 違った？ 十九歳はあってるし、頭良くて、美人じゃないの？ 不思議ー！」

「十九歳じゃない」

「あれ、そっち？」

「そっち？……」

途端に他の三人から、目を覆いたくなるようなツツコミの群れが飛びかかってきた。

「おんや〜、美人だってどこ否定しなかったでゲスね」

「頭いいってのもね。さては自覚してますな」

「はは〜ん。こりゃ、十九歳じゃないってのも嘘臭い限りだわねえ」

「……」 夕季、撃沈。

「ちなみに光ちゃんより夕季先輩の方がバレンタインのチョコ、五つも多かったのです。男前だから」

「ええ、光ちゃん、一個だけかよ？ せつねー！」

「悲しくて泣いちゃう？」

「すでに心が泣いてるかも」

「……あのね」

一しきり騒ぎ立て、四人は笑いながら立ち去っていった。

ボロボロに打ちのめされ、その場に残された光輔と夕季が無言で立ちつくす。

「……」

「……」

「みやびーズだ……」

「……みやちゃんズ」

「……。ウザいね……」

「……。……結構ウザい」

「え？」

「……」

その島から人の気配が途絶えたのは唐突だった。

早朝、島民の幾名かが島外の人間に連絡を取ったのは確認済みだった。

それから半日も経たずに島との連絡は不通となる。

不審に思った関係者が現地へ赴き、その惨劇を知ったのはわずかな時間後のことだった。

その島に住む人間すべてが何モノかに襲われ息絶えていたのである。

ある者は引き裂かれ、ある者は食い破られ、またある者は凍りついた表情のままショック死を迎えた。

死する者すべてに共通していたのが、誰もがその顔に絶望の色を刻みつけていたことだった。

そしてそれが、得体の知れないプログラムの発動に関わっていたことを、メガルの関係各位は結果から結びつけることとなる。

絶望のプログラム、バジリスクとして。

第二十話 『絶望のトリガ』 3

「くそ！」

司令室別室で桔平が拳を机へ打ち当てる。

その背後には腕組みをしながら冷静に様子をうかがう、あさみの姿があった。

「なんで気がつかなかった」ギリと奥歯を噛みしめる。「これじゃ何のためにスタンバってたのかわかんねえだろ！」

「仕方がないでしょ」

平坦にそう告げるあさみへ、目を向ける桔平。

その視線を表情もなく受け止め、淡々とあさみは続けた。

「これまでのパターンに照らし合わせれば、この地域に的を絞って迎撃態勢をとることがもつとも確率が高いことは、誰もが承知していたはず。それ以外のイレギュラーな必要性のすべてに考慮するのは困難を極めるし、現実的に見て対応も不可能だわ」

「だが、勝手にプログラムに偏見を持って、緩くかまえてたのも事実だ。俺達が自分達の過去の失態を掘り下げて、考えうる限りの局面を想定していたら、もっと危険性を示唆できていたのかもしれない」

「結果論ね。私達がいき当たった発動からたどって、あの島の人達が全滅するまでのおおよそ十三分だとの報告があったわ。直径七キロの島の三百人以上の島民のすべてがこと切れるまでの所要時間よ。本島から約二十キロ。メガルからは三百キロ以上離れた場所なのに、たった十三分で何ができたと言うの？」

「空竜王なら何とかなる」

「彼らは誰一人携帯電話すら手にしていなかった。逃げるのに必死で、他のアクションを起こす時間も余裕もなく、次々と殺されてい

ったの。誰がそれを私達に伝えられるのかしらね」

「……」

「バジリスクは私達の想像をはるかに超えている。あなたが求める猶予すら私達には与えられないのかもしれない。他人のことなんてかまうことすらできない状況。個人個人が逃げ延びることだけで精一杯なのだとしたら、もはや打つ手もない」

「……じゃ、どうしろってんだ。このまま手をこまねいて、俺達以外の他の人間がやられるのを黙って見てろってのか」

「それしかないでしょ」

眉一つ動かさず冷淡に告げたあさみに、桔平が言葉を失う。

それを見てなお、まるで当然のことだと言わんばかりにあさみは続けた。

「私達にできることは今までどおりここで待つだけ。ここへプログラムを誘導し、被害を最小限に押さえながら確実に殲滅する。それがここを決戦場に仕立て上げた、私達の懸命な判断よ」

「……よくそんな冷酷なことが言えるな」

「……」

「目の前で家族や大切な人間が殺される人達の身にもなってみろ。何もできずに、助けを求めて泣きながら死んでいく者の身になってみろ。自分には関係ねえとも思ってたやがんのか。でなきゃ、そんなこと口にでき……」

「じゃあどうするの？」

「！」

「いてもたってもいられないなら、あなたが何とかしてみる？ 世界中の人間を救いたいから、困っている人達すべてを助けるためにやみくもに走り回って見たらどう。ここを放棄してね。一睡もせず走り続けて、きっと何もできないままあなたの肉体と精神は破滅するでしょうね。それで満足ならばそうすればいい。私は止めはしないわよ」

「そういうこと言ってんじゃねえだろうが！」

あさみを睨みつけ、桔平が碎けよとばかりに机に拳を叩きつける。だがあさみは相変わらざる冷静さを保ち、それを静かに受け止めるだけだった。その表情にかすかに哀れみをたたえながら。

その時、司令室からの呼び出しがかかった。

桔平を見据えたまま、あさみが内通電話を手取る。

「はい」報告を受け、わずかに眉を寄せた。「……そう、わかったわ」

会話の内容に注目する桔平に、あさみが目線で合図を送った。

「バジリスクの反応が確認されたそうよ。予定時刻は午後四時」

「んだと！」桔平が立ち上がる。「あと二時間もねえだろが！」

「朝の発動から数えても約六時間。このペースで少しずつ削っていくつもりかしらね。私達の手の届かない外堀のエリアから」

「……」

「……。古閑さん。木場主任と鳳主任をこちらへ呼んで。大沼主任も。オビディエンサーには三十分後にもう一度ブリーフィング・ルームへ集合するよう伝えておいてもらえるかしら。長期戦の可能性が出てきたわ。今日から彼らをしばらくこちらで拘束することになりそうだから、学校の方へも連絡をお願いね。あと」内線電話で忍への確に指示を与えながら、あさみが桔平をちらと見やる。「樹神雅をまた例の場所へ……」

ブリーフィング・ルームの大型デスクの前でパイプ椅子に座り、

光輔らが神妙な面持ちで時がすぎるのを待つ。

作戦指示用のスクリーンにはまだ何も表示されておらず、予定の時刻がすぎても桔平もあさみも現れなかった。

「まだ、帰れないのかな」光輔がぼそりと呟く。「今日ゲームの発売日なんだけど……」

「知るかって」礼也があくびを放った。「てめえは気楽でいいな。どっかでプログラムが発動したって話だぜ」

「え、マジ！」光輔が身を乗り出して礼也に注目する。「何も言わ

ないから、俺、待機だけで、てっきり不発だと思ってた」

「さつき鳳さんやゴリラえもんがアワくって上がってったぜ。なんだか、シャレンなんねえ様子だった。俺ら、当分このままかもな」

「マジで……」

光輔が視線を伏せてため息をつく。

それに夕季が顔を向けた。

「バジリスクは反応が小さかったからショート・プログラムじゃないかって言われてたけど、とんでもない考え違いだったみたい」

「またヴォヴァルみてえなのじゃねえだろうな」

夕季と礼也が顔を見合わせる。

「あれはもう勘弁してほしい……」夕季が悲しげに目を伏せた。「……まだ頭がひりひりする」

「俺もごめんだっての！」ばりばりと頭をかきむしりながら、礼也が悪態をつき始めた。「この先あんなのばっかじゃねえだろうな。やってらんねえぞ。もっとこう、頭とか使わねえで力だけでねじ伏せられるような奴は来ねえのかよ」

「頭で何とかなるうちは、まだましかも」

「ああ！」

「そのうちきつと、何をしても歯が立たないようなプログラムもやって来るはず。ガーディアンだけでは到底対抗しきれないような次元の違う敵が。その時どうしたらいいのか、今のうちに考えておかないと……」

「んなの、力で押し返してやりゃいいだけじゃねえか！」

「……。一振りで地球を真っ二つに割るような奴だったとしても？」

「……そんな奴をどう考えりゃ倒せるって……」

「わからない」夕季が口もとをキッと結んだ。「でもいつか、そんな日がくるような気がする……」

「……」礼也が腕組みをする。「くそ、こんなことならフレールで買いだめしてくりゃよかった。ちよっと出かけて……」

「無理。許可がおりないうちはここから出られない」

「……。んじゃ、光輔、おまえ行ってこいよ」

「なんで俺が」

「ゲーム買いに行きてえんだろ。そのついでにちよろっとパシってこいつての」

「……てか、おまえ、俺をなんだと思ってるの？」

「てめえ、何様だ！」

「それ全部お返しするけど……」

「んだあ！」頭をかきむしる礼也。「そうだ。桐嶋に頼んで……」

「今は部外者は立ち入り禁止」夕季がじろりと礼也を睨めつけた。

「どのみち避難勧告がまだ解除されてないから、市内のお店はどこもやってない」

「ったくよお！」

「……それ、先に言ってよ」

メールの着信に気がつき、夕季が確認する。

「誰？」光輔が覗き込む。「しいちゃん？」

「うん……」夕季が腕を引き、光輔を睨みつけた。「あれ、どうする、って」

「雅のこと？」

「……うん」

「……このままだと食い込みそうだね」

「……」

「そうだ！」突然、礼也がひらめく。「しの坊に頼んでメロンパンを……」

夕季と光輔が冷やかな視線を礼也へ向けた。

「……いい加減にすれば」

「……俺もそう思う」

「な！」

バツが悪そうに礼也が顔をそむけた。

「……食堂から持ってきてもらおうと思ったんだが、まあいいか……」

「……。ごめん。ちょっと言いすぎた」

「俺もごめん」

「……いや、そっちの方が実にせつねえ感じなんだが……」

第二十話 『絶望のトリガ』 3 (後書き)

某マゾゲーで三十万ソウルをロストした時、久々にコントローラーの軋む音を聞きました。廃人まっしぐらです。
お読みいただきましてどうもありがとうございます。

第二十話 『絶望のトリガ』 4

光輔ら三人は竜王のコクピット内で待機していた。

発動の予定時刻まであと約二十分。

出撃のゴーサインが出るまで、ハッチを跳ね上げた状態でそれぞ
れのリラックス方法を取り入れ待ち続けるのだ。

夕季は携帯プレーヤーで好みの音楽を聴き、光輔は携帯ゲーム機
でゲームに興じる。

しかし二人の表情には笑顔も余裕もなかった。

礼也もディスプレイに映し出した衛星番組を睨みつけながら、イ
ライラと腕組みを続けた。

三人とも緊張の色を隠せず、神妙な面持ちでその時がくるのを待
ちかまえていた。

格納庫のドアを開け、息を切らせながら忍が現れるや、途端に、
むっとした表情で礼也が立ち上がった。

「遅い！」

「ごめん、ごめん。なかなか抜けられなくてさ」乗降用のラダー
を登り、礼也へ紙袋を手渡す。「はい、これ。メロンパン」

「手遅れになるとこだったっての」奪うように引ったくり、礼也は
早速メロンパンにがつつき始めた。「ふんろんよほ……、んぐふ！」

「ほら、礼也、ジュース、ジュース」

「んぐふうっ！」

じろりと夕季が睨めつける。

「人にものを頼んでおいて、何、その態度は」

「んがあ！」

「いいって、夕季」忍が楽しそうに笑った。「こんなもんで喜んで
くれるなんてかわいいもんじゃん。ね、礼也」

「ほんなもんふあ、なんら！」

「あっははは！ 怒った、怒った」

釈然とせず、夕季が口をへの字に曲げる。

その様子を眺め、忍が微笑ましげに目を細めた。

「夕季」

忍が放ったパックの飲料水を夕季がキャッチした。

「頑張ってね、夕季」

「あ、うん。ありがとう、お姉ちゃん」

「ねえ、しいちゃん、俺のは？」

光輔にせかされて振り返る忍。

「ああ、ごめん、ごめん。光ちゃんのはハンバーグカレーだったね」
荷物を掲げ、そそくさとステップを降りていった。「大丈夫なの？」

こんな時にこんな重そうなの食べちゃって」

「平気、平気」

「中で吐いちゃ駄目だよ。掃除するの大変らしいから」

「あ、うん。……そう言えば、しいちゃん、こないだの飲み会でまた酔っ払ってげーげーやったってマジ？」

「またってどういこと！」

「なんでいきなりキレんの……」

何気ない話題に光速で反応した忍に、光輔が若干引く。

それを眺め、夕季が少しだけ眉を寄せた。

「お姉ちゃん、またやったの」

「……」

残念そうに目を閉じ、忍が憤りのようなため息を吐き出す。

「あのね、またとかじゃなくてね……」ほんとにもう、と腰に手をあてた。「そういう根も葉もない噂で言いがかりつけるの、やめてくれないかな」

「違うの？」

「違う、ってば……」

「……ごめん」

「いいっ、けどねえ……。今って、そういうこと言ってる時じゃないでしょ。出撃前だっていうのに、みんなちよつと真剣みが足りないかなと思って……。人もたくさん死んでるのに」

「……うん、確かにそうかも」

「……。さっき自分だってげらげら笑ってたのに……」

「！それは、それだし……」

「……それ？」

「そうだ！」忍が思い出したような振りをして、ポンと手を叩く。

「こんな時でなんなんだけど、あれどうしょっか！」

夕季がそろりと顔を向けた。

「みやちゃんのこと？」

「うん。やっぱり何かやってあげようかなって思ってるんだけど」

「……それこそ今決めなくてもいいことだよね」

「光ちゃんてば……」

「でももう時間もないかも」

「……まあ、確かに」

「明日だものねえ……」

「ああ、いらねえだろ、んなモン」

みなが礼也の発言に注目した。

「なんか欲しいモンあるか、って聞いてやったら、お金ちょうだい！とかヌカシやがったしょ。そういうガラでもねえんじゃねえか」

「確かに、お祝いとかにしちゃうと、みんなにつっこまれて居心地悪いかも」光輔がもっともらしく補足する。「あいつはボケまくりみたいだからね。そういうの結構苦痛だったりするかも」

「まあ、そうなんだけどね……」忍がせつなそうに眉を寄せた。「でも、ああ見えてみやちゃん、案外淋しがりだからねえ」

「……あたしもそう思う」

「あんな感じだけど、裏じゃ結構泣いてるかもよ」

「ああ！んなタマじゃねえだろ、ありゃ」かじりついたメロンパンをぶらぶらさせ、身振り手振りの礼也が目を見て訴え始めた。

「よけいなことやなくなっちゃっていいって。いらねえって。いじわるでカウンターされるのがオチだ。ガキじゃねえんだし、そんな見え透いたゴツコなんぞで喜ぶかって。前にオッサンの車と一緒に乗ろうとしたら、『同乗するなら金をくれ!』とか言いやがった。二人でアホみてえに喜んでやがったが、こっちゃんモトネタすらわかんねえ」

「……。自分だって桐嶋さんからチョコ貰って喜んでたくせに」

「ふざけんな、てめえ!　んなモンで俺が喜ぶわきゃねえだろ」

「喜んでた」

「ああああ!」

「やめろよ、おまえら」

間に入ってきた光輔を、礼也がギリリと睨みつけた。

「てめえもそう思ってたやがんだな!」

「いや、思っていないって……」

「チョコごときで俺が喜ぶかって!　俺が喜んでたのは、あいつがプレミアムメロンをくれたからだ!」

「……あ、喜んでたのは事実だったんだ」ハンバーグを喉に詰まらせる。「んっが、ふんぐっ!」

「たりめーだったの!」

ピーピーピー、と呼び出し音が竜王内に響き渡る。

モニターをオンにすると、桔平の顔が飛び込んできた。

『おい、そろそろ準備を、……っておまえら、何食ってやがる!』

「いや、出撃前に軽くよ」

「そうそう」

『そうそう、って光輔、てめえガッツリ食ってんじゃねえか!　うちのバーグカレーは安くてボリューム満点で有名だぞ。そんなんで竜王ぶん回して、またしの坊みたいにげーげーしちまっても知らねえからな!』

「またってどういうことですか!　そんなこと、この子達に言わなかつたって!」

忍の叫び声に桔平が反応する。

『お、しの坊、そんなところで何やってんだ。忙しいんだから、早く戻って来い』

「はいい……」

「お姉ちゃん」

夕季が厳しい顔で忍を見据えた。

「……あいい」

こそこそと忍が格納庫から逃げ去り、夕季達が仕切り直す。

「何か新しい情報は？」

『ねえ』きっぱりと言い切った。『何の手がかりもねえ』

「それでどうする気なの」

「また打つ手なしだよ……」

礼也の皮肉を桔平が受け止める。

『打つ手はある』

「どうすんだって」

『発動五分前になったら外に出て集束しろ』

「どこで？」礼也があきれたように吐き捨てた。「どこでどうなるのかもわかんねえのに、集束だけしてどうすんだっての」

『だからだ』

「ああ？」

桔平が夕季に注目した。

『グラウンドじゃない。タイプ・スリーでいく』

「空の上から見張って、場所がわかったらすぐに対応するの？」

『それもある』

「？」

『おまえ、前に言ってたろ。エア・タイプにはサーチ能力があるって』

「うん……。そう。了解」

夕季達に蚊帳の外へ追いやられた筋肉脳の二人が、おそろおそろ参入してくる。ポカン、とした顔だった。

「おい、俺らだけでわかってんじゃねえって。もっと光輔でもわかるように優しく説明してやれって」

「……いや、確実にわかってないよね、おまえも」

「んなのはどうでもいいって！」

「おまえさ……」

『バカのおまえらにもわかりやすく説明してやろう』

「んだ！」

「ひど……」

ネクタイを締め直し、桔平が、んんんっ、とノドの調子を整える。

『いいか。これからおまえらはタイプ・スリーに集束して、空高く飛び上がるんだ。んで、発動寸前に集中して索敵を開始しろ。羽根が落ちるようなかすかな物音も聞き漏らすな。バジリスクの気配を少しでも感じ取ったら、ソッコーでそこへ向かえ。位置さえ特定できれば、監視衛星が追従してサポートする。朝と同じ条件ならば、一、二分がリミットだろう。以上だ』

「なる」

「そういうことか」

「って、進藤さんが言ってたんだね」

『！ んだ、ため、夕季！ こら！』

「なこったろうと思ったけどな」

『ため、礼也！』

「俺らのことさんざんバカにして、結局自分だって丸パクリじゃないすか」

『……光輔、おまえまでそんなふうになんて言わなくても』

「光輔、礼也、もう行くから」

「ああ」

「おう！」

『……。おう、頼んだぞ……。』桔平が気を持ち直す。『うまくやったら、みっちゃんもオススメ、城ノワールおごってやるから』

「パス」

「あの、俺も……」

「フレールの極上メロンにしとけて」

『おまえら……』

空を、雲を、真上に貫き、ガーディアン、エア・スーペリアがメガルのはるか上空で翼を広げ滞空する。

発動まで残り時間はあとわずか。

夕季が目を閉じ、感覚を研ぎ澄ませると、それに二人が続いた。正確な脳内時計が時を刻む。

ふいに活目し、夕季が眉間に力を込めた。

「ダンディライアン」

夕季の提唱とともにガーディアンが自身を抱くように腕をクロスさせ、翼を大きく上下、前後左右へ展開する。

それはさながら種子を抱く白いタンポポを連想させた。

「サーチ」

無数の種子となった思念の糸が放射状に飛び散り、広域にわたる網となって地上を覆いつくしていった。

ガーディアンの中で夕季が神経を集中させる。

それは竜王のサポートのみでなく、夕季の持ち合わせた情報処理能力と精神力の高さも手伝って、集積化を極めた最新のコンピューターやリーダーをも凌ぐ凄まじいスペックを具現化していた。

数千キロメートル先の針が落ちる音と、対極にある場所で蟻が這い回る物音を聞き分け、その優先順位を瞬時に確定させる。天文学的な数字の羅列を取り込み、組み替え、置き換える。それはコンマ数秒の間に、一人の人間が一生かかっても使い切れないほどの記憶をとどめる作業に酷似していた。

夕季のこめかみを汗が伝う。

力を込め続ける眉間が痙攣し始めた。

「夕季……」

「黙ってて！」心配して声をかけた光輔を一声で制する。「集中で
きないから」

「……ごめん」

光輔を眺め、礼也が、シーだ、という仕草を試みせた。
発動の予定時刻が過ぎる。

五秒経過。

十秒経過。

三十秒経過。

一分、経過……

そこで夕季はかすかな異変を感じ取った。

メガルより南西約四百キロメートルの距離に小さな反応。そして
その反応はしだいに数を増しつつあった。

「桔平さん」夕季が叫ぶ。「水代島に避難命令を出して！ 今すぐ
！」

『わかった！』疑う素振りも見せず、桔平が夕季の進言を受け入れ
る。『おまえらは今すぐそこへ向かってくれ』

「了解！」

第二十話 『絶望のトリガ』 5

エア・スーペリアが遠く四百キロメートルを隔てた水代島へ急行する。

マツハの領域をはるかに超えた機体は海面を真つ二つに割り、水柱のカーテンを噴き上げた。

「夕季、もっと高く飛べ。それじゃ海上に影響が出る」

『大丈夫』無線を通じて夕季からの落ち着き払った声が返る。『ちゃんと計算してる。ギリギリだけど』

「計算してるって、おまえ……」

桔平の後ろであさみが妖しげに微笑んだ。

「すごいわね、彼女」

「当然です」桔平の横で忍が嬉しそうに胸を張った。「私の妹ですから」

「よけいなこと言うと邪魔なんじゃないかしら」

「あのな……」

「大丈夫です」忍がディスプレイを見つめながらにやりと笑う。「信用されているらしいですから、あの子」

得意げな様子の忍へ、桔平が恨めしそうな顔を向けた。

「……おまえは酒の席でどんどん信用をなくしてるんだがな」

「……あい……」

発動から約五分後、ガーディアンが到着した時、島民百六十人足らずの水代島は阿鼻叫喚の地獄と化していた。

無数の黒い影に追われ、人々が逃げ惑う。

家屋は崩壊し、火に焼かれ、引き裂かれた車両が炎上していた。「ち、遅かったか」礼也が歯がみする。「ありや何だ、インプか」

「ちょっと違う」夕季が礼也へ顔を向けた。「でもあのサイズなら、分散して戦った方がいいかもしれない」

光輔が頷いた。

「そうしよう。別々にやった方が早い」

ガーディアンが三つの光に分離する。

三体の竜王は黒い影を追って島中を駆け抜け、数分の後、すべてを殲滅させた。

そこでバジリスクの反応は途切れた。

地上に降り立ち、光輔と礼也が一息つく。

「何人、助けられたんだろうな」

恐怖と安堵に泣き叫ぶ生き残りの島民達を眺めながら、やるせなさそうに光輔が呟いた。

「一人も助けられないよりマシだって」

「そりゃそうだけど……」夕季がまだ空竜王から出てこないことに気がつく。「夕季は？」

「ああ？」礼也も空竜王へ目をやった。「感傷にひたってやがんのか。ガラにもなくよ」

「……」

光輔が無線で呼び出しをかけるが、返事はなかった。

心配になって二人が外側からハッチを開ける。

そこで見たのは、疲れ果て、パネルにつっ伏して寝入る夕季の姿だった。

「……肝据わってやがんのか、こいつは」

「……」

その後、鳳や木場らががん首を揃え待ち構えるブリーフィング・ルーム内で、一心不乱にケーキやフルーツを食べ続ける夕季の姿があった。

その食べっぷりに礼也が顔をそむける。

「よく食えんな、そんな甘いモンばっか。見てて気色悪くなってく

るって。オエエゝだ」

夕季がちらと礼也を見やる。

「自分だって毎日同じ物ばかり食べてるくせに」

「ありゃ別格だろうが！」礼也が目を剥いて食いつく。「さっきだってめえが甘いモンが食いたかったから、仕方なしに食わせてやったんじゃないか！ 不本意だったけどよ！ あれがフレールのだったら、そうは簡単にいかなえとこだぞ！ 感謝しとけ！ てか、返せよ、てめえは！」

「……。おいしかった」

「お、おお……」

「不本意だけど」

「ああっ！ ふざけんな！ フレールの極上食ってからもっぺん同じこと言ってみやがれ！ あまりのうまさにはっぺたげっそり落ちちまっても知らねえぞ！」

「落ちないと思う」

「でけえ口たたきやがって！ ガイコツになってから後悔すんなよ！」

「……何言ってるの」

苦笑いの光輔。

ほっと一息といった様子のオビディエンサー達に比べ、木場らは深刻な表情で考察を重ねていた。

桔平と忍が書類を山のように抱え入室すると、バナナを頬張りかけた夕季の手が止まった。

「何か結論でも出たのか？」

木場のまなざしを真っ直ぐに受け止め、桔平が首を横へ振ってみせた。

「そうか……」

「こんな書類ばっか無駄にこさえて、必要なことはなんにもわかんねえ。あれで日本でもトップの頭脳集団だってんだから泣けてくる」バナナをテーブルへ置き、夕季が食い入るように書類にかぶりつ

き始めた。

そのバナナをこっそりと抜き取る光輔。大沼に目撃され、あははは、と笑ってごまかした。

「朴さんも呼んだのか」

木場が桔平の隣にいた朴へ目を向ける。

すると朴は陽気な笑顔を木場へ向けながら言い放った。

「ゴリちゃん、久しぶり」

「頼むからそれやめて下さい……」

「貴重な資料が手に入ったんでな。あと、この人の仮説を聞いて、おまえらも判断してみてください」

桔平の推薦を受け、朴がややバツが悪そうに笑った。

「確定じゃないけどね」

「それ以前に、奴らのガチガチ頭じゃ、仮定にすらたどりつけねえだろ。コンピュータで予測できることしか信じられねえんだ」

「偉い人達、そのへんの技術屋の立てた仮説なんてまったく興味なさそうだったけどね」

「そのへんの技術屋が戦艦一発で沈めちゃうようなバズーカ作れるかって……」

「僕が溶接の免許持っていないからバカにしてるんだよ、きっと。ミサイル作る時もハンダゴテだから、ハンデだよな」

「……ハンダでミサイル作ってやがんのか」

「嘘、嘘。ノーライセンスだけど平気で溶接しちゃってるよ。うまいもんだよ。たまに機械が爆発して電気落ちるけどね」

「ありや、てめえのせいかな……」

「リフトとかも持っていないけどプロ級だよ。よく壁にぶつけるけど。教えてもらわなくても結構なんでもできちゃうもんだよ、あっちははは！」

「いや、免許取りにいけよ。予算出すからよ……」

二人のやりとりを眺め、鳳がおもしろそうに笑った。

「技術屋と言うより、あんたの人格に問題がありそうだぞ、朴」

「ひどいね、鳳さん」鳳に顔を向け、朴が大笑いし返す。「あなたに言われたらおしまいだ」

「いや、俺の方こそおしまいだがな、がっはっは！」

「いや、僕の方こそおしまいだね、あっはっは！」

「いや、そんなことないだろ、がっはっは！」

「いや、あるね、あっはっは！」

「てめえら、いい加減にしがれ！」

桔平の一喝に恥ずかしそうに笑い合う二人。

「鳳さん、落ち着いたら明日でもどう？」

「おお、いつもの店だな」

「ちよっと待て！ てめえら！」

「いやいや、今はこんなこと話してる時じゃなかったね。ごめんね、桔平さん」

「仕事中だからな。ケジメはつけねえとな。すまん、柊。さあ、話を続けろ……」

「じゃなくて、俺も誘え、なろー！」目を剥いて訴えかける。「お願いだから！」

「桔平さん、本当に淋しんぼだね。ほつとくとウサギちゃんみたいに死んじやいそう」

「ウサギちゃんてツラじゃねえだろ、こいつは。ウナギちゃんだな」

「ウナギちゃん！ 違うないね、なんだかヌルヌルしてるし」

「だろ？ ガッハハハ！」

「……いや、メタボが二人で何言ってやがんだろうな」

書類を読み終え、夕季が顔を上げる。バナナをくわえた光輔と目が合った。

「！……。あ、ははは……。勝手にもらっちゃった……」

「いいけど……」

桔平にうながされ、朴がプロジェクターを設置する。

「朴さん、頼む」

「あいよ、ウナギちゃん」

「あのな……」

それはたまたま島民の一人が撮影に成功した、最初の被害地となった島の惨劇の様子だった。

異変に気づいたカメラの持ち主が、機材を持ち出し撮影し始めたのである。

間もなくその持ち主自身も災難に巻き込まれ、放り出されたカメラが傾いたままの映像をワンフレームで映し出していた。

その内容に室内にいた全員が息を飲む。

「これは……」

思わず木場が声をあげた。

第二十話 『絶望のトリガ』 6

広域の範囲を網羅した、メガルからの危険示唆の連絡が島の役場へ入ったのは、第一の犠牲者が出た時刻からかなりの時間が経過した後のことだった。

予期せぬ一報に連絡を受けた側が戸惑う。が、その戸惑いは数分の後、すべて恐怖へと置き換えられることとなった。

島の上空に不気味な黒い影が浮かび上がっていた。空を覆い隠すほどの巨大な影。

遠くかすかに、そして連なって近づいてくる悲鳴を聞き取り、一人の島民が不安げに顔をしかめた。

その時だった。

それが現れたのは。

空から降って湧いた拳大の卵が地に落ちて碎け散る。その中から人の形を巨大化させた黒い影が現れたのである。

あらわになるや、間を置くことなく、影が人々を襲い始める。

最初に襲われたのは、顔をしかめた先の青年だった。

恐怖と驚きに目を見開き、わめき散らしながら一心不乱に彼が逃げ続ける。

周辺にいた人々は何もできず、彼と同じ表情でその光景を見守るだけだった。

自分達の目の前に卵が落ちてくるまでは。

卵が割れ、中から黒影の巨人が現れると、あとは恐怖にかられ逃げ惑うことしかできなかった。

黒い影は人々を追いかけて、追いつき、そして引き裂く。或いは押し潰す。

それを見た者すべての眼前に卵が落ち、もれなく黒い影が襲いかかってきた。

最初の一人を死に追いやった影が別の目標を定め、次は複数の影がその対象を追い求める。その数は追われる者の減少に反して、どんどん増えていった。

一つだった影が徐々に数を増していき、ある一点を境にその比率が逆転する。

そしてトータルにしてわずか十三分という短い時間の中で、三百名を超す島民すべてが命を奪われたのだった。

＊

悪夢の上映会を終え、冷たいコンクリートの壁に囲まれた室内で、言葉を失った面々がやりきれない顔を見合わせる。

影一つ作らない照明だけが、その場にそぐわない無機質な明るさを主張し続けていた。

「……まあ、こんなところだが」

のっそりと立ち上がる、桔平の表情は暗い。

その心の内を礼也が代弁した。

「こんなところだがって、んなの見せられても対策の立てようがねえじゃねえか」

「……」

「こんなのインプの時と同じじゃねえか。戦ってみてわかったが、奴らたいしたことない。メックでも充分に通用する」

「そのとおりだ」重々しく頷く桔平。「むしろインプより脆い。殲滅するのめたやすいだろう。ただし、奴らの出現ポイントが特定できて、俺達がすぐに駆けつけることができればな」

「んなの無理だって。メックの行動範囲なんてたかが知れてる。とても日本中をカバーしきれんモンじゃねえ」

「わかってんだよ、そんなことは。だから頭がイテえんだ。それに

ねつらったように警察署も自衛隊も届かねえ場所絞り込んできやがった。いくら脆いつつても、メック以外でどんだけ通用するかは定かじゃねえしよ。少なくとも、一般人が身近な武器を手にして撃退できるレベルではないことは確かだ。プログラムってだけでこっちの責任にされるってのに、厄介なことこの上ねえ」

頭を抱える桔平を眺め、木場が口を開いた。

「で、朴さんの仮説っていうのは？」

「おお、そうだった」桔平が振り返った。「頼む、朴さん」

「あいよ、桔平さん、ゴリちゃん」

「いや、それ、やめ……」

「お嬢ちゃんもお坊ちゃんもゴリちゃんも、さて、おたちあい！」

「……」

木場をさしおき、朴が自論を展開し始める。

それは常識者にとっては到底理解し難い見解だった。

「卵、見えたよね。小さいけど、バジリスクの産んだ卵。これたぶん、空から降ってきたはず。黒い影は一見無秩序に人を襲っているようだけれど、ちゃんと一つの法則を持ってる」

「法則？」

礼也が眉をゆがめ、隣へ顔を向ける。

バナナをくわえる光輔がぶんぶんと首を振った。

すると朴は面々を見渡し、あらかじめ予定していたように夕季を指名した。

「はい、夕季ちゃん」

「……」夕季が、ぐっと顎を引いた。「……新しく現れた影は、最初は必ず一人の人間に狙いを定める」

「ピンポン、さすが」

「……」

「今の、すごくいいところついてる。僕もそれ、おかしいなと思ってた。目標を達成した影が続けて襲ったり、新しく出てきた奴が合流したりして複数になることはあっても、最初は必ず一人だけを狙

つてる。卵が割れた時、目の前にいた人間を」

「……だから何だったの」

「礼君、慌てないで」

「……。……まさか」

ぼそりと呟く夕季に顔を向け、朴がにやりと笑う。

「わかつちやった？ 夕季ちゃん」

「……。いえ、まだ……」

「たぶんそれ、当たってると思うよ。少なくとも僕の予想とおんなじじゃないかな」

「……」

「だからよ、二人で楽しそうに会話すんなっての」礼也があきれたように吐き捨てた。「こっちや……、光輔ごときにゃ、ちっともわかんねえぞ。なあ」

「わざわざ言い直さなくっても……」

「楽しそうじゃない」

「ああ！」

「礼君、ごめんね。ちょっと嬉しくなっちゃって。さすが夕季ちゃん。あっちのバカボーンな人達とは脳みその作りが違う」

「今のは問題発言だって……」

「……て言うか、俺達もバカボーンな人達の方に入ってたよね」

礼也と光輔が情けない顔を見合わせた。

「バジリスクが卵を産み落とすタイミング、ここがこのプログラムのキモだね」夕季の顔を見つめ、朴が意味ありげに笑う。「ここに映っている人達、みんな顔がこうやって怖がった時、卵が落ちてきてる」

「て、ことは、あれか……」

「そう」礼也に頷いてみせた。「考えたくないけど、その時の恐怖や絶望といった感情が引き金になってる。これたぶん間違いない」朴の後を追うように夕季が続ける。

「この報告書を見て不思議に思った。島の人口は全部で百五十六人。」

あたし達三人が倒した敵の数が百四十九。合わない分は、何らかの理由で恐怖を感じなかったとすれば説明はつく」

「そう。そしてこれは予想なんだけど、一度トリガーを引いた人間の前には卵は現れない。少なくともその発動の時だけはね」

「んじゃあよ」消化しきれない中、もっともな疑問を礼也がぶつける。「最初の発動の時、なんで助けに行った奴らの前にはあのバケモノがいなかったんだ。誰も一体も倒してねえわけだろ。んじゃ、発動の終了とともに奴らも消えちまうってシステムか？」

「違うね」

「はあ？」

「バジリスクの卵は不安や恐怖心を追いかけるの。動物が匂いや熱で獲物を識別するようにね。その消滅はイコール、絶望を感じる心がなくなったということ。そこにいるみんなが希望に満ちあふれているのか、みんな死んで誰もいなくなったから存在することができなくなったかのどっちか。きっかけになった一人が死んだだけじゃその個体は消滅しない。最後に残された一人が不安を持ち続ける限り、何万、何十万になっても、その一人だけを彼らは追いかける。最後の最後まで絶望にまみれたその一人が彼らに引きちぎられたと同時に、そこにいた無数のゾンビ達もいっせいに消滅する仕組み。なんの証拠も残らないパーフェクトな大量虐殺成立だね」

「……えぐいこと、さらっと言いやがんな」

「バジリスクのメカニズムはガン細胞に似てる。倍々ゲームか十倍十倍ゲームかわからないけどね、最初は一つでも、それが二つになって、四つになって、ある時を境に数え切れなくなって、どっと押し寄せて来る。気づいた時には手遅れ。希望を持つ人間は増殖が押さえられるのも何だか似てる。僕の好きなゾンビ映画にも似てる」

「つまりこういうことか、朴さん」絶句する礼也のかわりに、桔平が乱入してくる。「例えばだ。絶望や不安といった感情がトリガーだとする。この中の一人が何らかの拍子に不安を感じた時に、奴らが一体だけ現れる。それを見た他の十人が絶望を感じたのなら、そ

の数は十倍になる。絶望が絶望を呼び、あつという間に世界中は魔獣で一杯になるって寸法だ。奴らは倒しても倒しても、次から次へと湧き出てくる。誰かが絶望という感情を持ち続ける限りな。それを断ち切るための方法は、全人類から絶望という感情を取り除くか、或いは……」

「或いは、何ですか？」

バナナをくわえた間抜けヅラの光輔を、じっと見据える桔平。

「……絶望という感情を持つ人間すべてを排除するしかない」

「それって……」バナナをぐくりと飲み込んだ。「ふんぐ！」

「自滅だ。うまくできてる。さすがはプログラムってとこだな」

「さすが桔平さん。だてにヌルヌルしてないね」

「ぬるぬる？……」気を取り直して、ボードに記された被害状況と朴の顔を見比べた。「大人達の悲観はすぐに子供にも伝染する。感情をコントロールできない幼い子供達が一旦絶望を覚えたら、世界はあつという間に闇に包まれるだろうな。てか、あんたゾンビ映画好きだったのか？」

「大好き。貸す？」

「いや、いい……」

「残念。名作多いのに」

「あの」おそろおそろ忍が手をあげる。「私、観たいです」

「さすが忍ちゃん、わかってる」

「てめ、そんなん観て、また人前でげろげろすんじゃねえぞ」

「……しねえですってば……」

朴が楽しそうに笑った。

「まだ人の少ない島とかだから被害も少なかったけどね。もし本島の、例えば百万単位で人口が密集しているような場所だと、手の施しようがないよ。いくら夕季ちゃん達でも、一つ一つ目標の違う百万の敵を一度には相手にできない」

「確かにな」光輔のバナナを奪い取り、礼也が難しい顔をしてみせる。「俺らに向かってくる百万なら造作もねえ。だがちりぢりにな

った百万を一体一体追いかけるのはリアルにつらい。小さな島だからいいってわけじゃねえが、まだ何とかなった方ってことだな」

礼也のバナナを夕季が奪い取った。

「てめ！」

「その百万が新たな不安を介して一千万になり一億になり、さらなる不安を感じた世界中で人類の数と同じだけのモンスターが増殖する。あつという間に、世界は奴らに食いつくされる」物欲しそうにバナナを眺めている光輔に気づき、皮を剥いて差し出した。「……はい」

「あ、ああ、サンキューベルマツチョ」

「……」

もふもふと頬張る。「ウマ」

礼也が辟易顔を桔平に差し向けた。

「なんか方法はねえのかよ」

「その方法がさっき幹部会議で却下されたばかりだ。そこで、これからここにいる人間だけで、あらためて多数決をしようと思う」

「はあ？ なんのだ？ 俺らだけで何決められんだって」

「そんな権利、あたし達には……」

「権利ならある」

礼也と夕季を見据え、桔平がにやりと笑ってみせた。

「俺達はこの世界に希望をもたらすことができる、数少ない人間だからだ」

「俺もすか？」

桔平が振り返り、バナナをくわえた間抜けヅラをまじまじと眺めた。

「おまえは……」

「……ふんぐっ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9703r/>

プロジェクト・メガル3・第三部

2011年11月14日03時19分発行